

をるわざをつかさどるをりひめをみそめつゝくものはてに物思ふ……」
といふ風にて、可なり長くつゞいてゐる。

此外第四段に「菊ぞろへ」の節事と、浦島が八雲の前を負ふて空中飛行する道行があり、又第五段には、篁が鷹狩に出る田園生活の節事がある。

【梗概】 第一 仁王五十三世淳和天皇御惱みあり、六月の一日、お慰の爲神泉苑に行幸あり、船にて舞樂を御覽ある。歌舞終つて帝は舞の女藤原みつもの女八雲を賞し給ふ。やがて池の底より童形が忽然現れる。橘逸勢之を討たんとするとき篁がとめる。すると其仙童が昔の浦島だ、帝の御惱をいやさん爲に玉手箱を御覽にかけたいといふ。帝歡覽あると、御惱は立所に平癒する。御悦あつて丹後與謝の郡を賜ふ。

橘逸勢はかねて八雲の前に見ぬ戀をしてゐたが、此度姿を見てはたまらず、而も度々の文も返されざる故、石割入道、横車の大八と呼ぶ二人の臣をして、八雲が大内のしんごんゐんにて、浦島の玉手箱拜見の折に、彼女を強奪せしめようとする。さて當日となると、八雲の前は篁の姿に見とれ、篁は八雲の前の美しさに見とれてゐる。そこへかつぎのきぬに顔を隠した二人の暴漢が現れ、姫を引つばつてゆく。次の間にゐた篁の後見松がね八郎は之を見ると、見事に遮ぎつて、二人の暴漢が例の逸勢のまはし者なることを暴露し、命だけは助けて、無事に姫を送り歸らせる。

第二 先帝太上皇帝は嵯峨の離宮にましますので、嵯峨の天皇と申し奉る。或時その御所の前に「無悪善」と書いた札を立てたものがあるが、それを讀むものがないので、篁に見せると、「さがなくはよからん」と讀むべきかといふ。逸勢は之をきくと、これこそは君を輕侮し奉る者のした事であらう。讀める人は即ち犯人で、大逆罪だといつて

篁の罪を喚きたてる。先帝は大に怒りたまふ。其時今上の帝は、片假名の「子」字を十二書きて篁によませたまふと、篁は「しゝの子のこじゝ、ねこの子のこねこ」と讀んだ。これが讀める位なら、「無悪善」の立札も篁の工む所ではないといつて辯護したまひ、篁の爲に圖つて、わざ／＼彼を隱岐の守護に任じたまふ。

橘逸勢は落書を以て、一旦は篁を陥れたが、ついで彼を失はうとして、院宣を蒙り、石割入道立能、横車大八の二人に軍勢を以て押寄せしめる。けれども戦の後に、松が根八郎は遂に逸勢を追拂ふ。

第三 篁は任地へ赴く途すがら、伏見の里にて、八雲の前の下屋敷に近づき、別れを惜まうとする時、折柄姫は七夕祭を催して、翁は七夕の由來を語り、七夕に願をかけると、三年の中には戀も叶ふといふと、姫はやがて琴をひいて、やるせない戀の思ひをのべる。(七夕祭の物語の節事。)そこへ矢文が届く。見ると逸勢の戀文である。姫はけがらはしやと手をあらひ、耳まで洗ふ。この時、草刈の衣をかりて變装し、先程から隠れてゐた篁が姫に近づき、姫と戀しき物語をしてゐると、又矢が飛んで来て、今度は篁の袂に立つ。ついで逸勢の郎等大八は駈入つて篁を討たうとするが、松が根八郎が飛出してその首を討落す。かくて篁は旅に、姫は都へいそぐ。

第四 姫は結ばれた心をはらすべく、菊の園に出て花見をする、(こゝに歴史上の菊ぞろへの節事がある。)夜になつて寢所近くの童子菊が、忽然童子と現れて姫に近づき、自分は浦島だが、姫を隱岐の篁のもとへ連れゆきたいといふ。そして手をあげて白雲を招き下ろし、姫を負うてそれに乗つて、ふわ／＼と出立する。

道行。「雲のうきなみ立いづる、いづこいかにと知らねども、末のあふせをたのみにて御物思ひも忘れぐさ……」と珍らしい空中飛行である。出雲の三保の湊につき、此處にて浦島が、姫の召したかさを取つて波に投入れると、忽

ち大龜となり泳ぎ出る。姫君はそれにつて隠岐へつく。

さて都にては姫の父右大臣が、姫安かれと清水へ祈つてかへり路、逸勢の勢は襲ひかゝつて、姫の行衛を知らせよと迫り、反抗すれば火あぶりにせんといふ。所へあたりの閻魔堂から魔王が飛出して、逸勢の勢をいためつけて、「我こそは天に有つては破軍の星、人間に下つては野相公篁也冥途に入ては是即第三の冥官ぞや」といつて、衣冠面を取去つたのを見ると、篁の巨松が根八郎である。

第五 篁はなには丸、淺か丸等に伴はれて隠岐にあり、今日は鷹狩に出る。その途にて篁は、ある百姓の生活をみて「げにも隙なき賤がわさ我衣手の御せいの程思ひ出して、我々がふせうの身にて官祿を心のまゝに貪る事、あゝ愚や」と思ひ、老人達の仕事を「さぞくるしかるべきとあはれみ問ふ」と、「うばはきくより勿體なきとの仰で候よ、此しやばせかいに生るゝ身の苦のなき事は候はず、たとへは王様にても、世を思しめす御苦勞あり、ましてやしのう工商の世渡るたつき様々は其身くゝのことわざをしんくと思はゞいかゞせん愚にもとひ給ふぞ」といふ。そして篁に見せるものがあるとして、八雲の前を導びき出してあはせる。と又浦島が玉手箱を携へて出で、篁に向つて、君の母は「七よの其一つ、破軍をむちうにのむとみて出生ありたる星のせい、……姫も七よのれんでうせいの化身」、その老女は我を蓬萊まで誘ふた仙女、きんじこくの主西王母だといふ。そして老母は見るく、「かくやくたるよそほひの王母」となる。浦島はまた「君前生の天上界月宮殿の有様を御めにかげんと立上り、玉手箱を捧げ」、月宮殿に入り、(此處に月宮殿の景や、西王母の桃園の景などが記され、曲節ゆたかである。)一同を案内してもてなす。やがて浦島は、われは東方朝で、假に浦島と現れたのである、行末久しく君達を守らんといふ。そして此玉手箱に五衰を封じこ

めたから御目にかげんとて、玉手箱を開くと、五色の雲たなびき、童子の浦島は翁となる。そして我は九千歳の壽を保つ故、重ねて相見んとて、西王母と共に空に上ると、宮殿は霞ときえる。そこへなには丸等が歸つて、人々を伴ふて館に入る。

第六 篁は八雲の前に遇うて悦ぶ所へ、松が根八郎が女房達をつれて来て、逸勢の悪計を見とがめたので、右大臣から奏して逸勢と篁との對決をさせよとの勅諭を得たといつて、ついで清原友景が正使として迎へに来る。

さて逸勢と篁との對決になつて、逸勢がなか／＼頭として抵抗する折、軒より蜘蛛が下り、浦島が現れ、逸勢が内々帝位を傾けんとして、國々へ軍勢催促の廻文を送つたのを、密かにぬすみ來つたとて奏上し、遂に隠岐へ流される事となり、篁は重く用ひられて繁昌する。

【解説】 橋逸勢が無法な戀を遂げようとして、邪魔になる篁を讒言して窮地に陥れ、やがて自分が滅されるに至るのであるが、其間に八雲の前と篁との戀の経路を叙し、たえず浦島といふ魔の人物を活躍させ、同時に玉手箱の靈驗を見せたりして、そのお蔭で篁等は三世を見ることが出来るのである。空中飛行の道行も珍らしいが、浦島や玉手箱をだしに、機巧仕掛や糸操を用ひてのロマンチックな上演は、存外上演上成功を占め得たであらうと思ふ。農民の生活にふれた所は面白く、其處に凡ての人間の苦を説いたことも、餘りに多くの例を見ないものである。七夕祭の處は曲節も濃かで、琴も用ひられ、音楽味もたつぷりで、殊に月宮殿の美はさこそであつたらうと思はれる。一體曲節上、詞章上謡曲味も多いやうに思はれ、初段には謡曲『羽衣』の句など大分ひかれてゐる。

【原據・影響】 別に『小野篁地獄叢談』といふものがあるが、本曲と直接の関係はない。唯仕組に多少似た所はあ

る。本曲はそれによつたといふよりも、むしろ元祿十三年八月上演の近松の『浦島年代記』に負ふ所が多いかと思ふ。第五段月宮殿の場など、殊にさうである。かくて此曲の上演年代が元祿終以後かと思はれるが如何にや。

尙本曲は謡曲『西王母』及び『東方朔』『浦島』等にもよつてゐるが、又傳記によつたものである。

小野篁は參議岑守の子、道風の祖父にて、嵯峨帝に仕へ、承和元年遣唐副使となり、船破れて進む能はず、四年再び發す。正使藤原常嗣の船破る。常嗣篁の船を奪はむとす、篁應ぜず、病と稱して使を辭し、童謡を作つて諷し、罪を蒙つて隱岐に流さる。世に野相公といひ、書を能くし、詩格白樂天に似る。

○小野道風記——小野道風

【體裁】この正本にも、所見が少くも二種ある。

一、木下版 帝國圖書館、古綴文庫等の藏本である木下甚右衛門版のは、内題に「小野道風記」とあり、柱には「道風」、巻尾には「小野之道風卷終」と記し、前附と後附に、木下甚右衛門の名が見え、半紙形で、本文が八行四十九丁である。

二、大月版 東京帝國大學圖書館藏本にて、題簽に唯「道風」、其下に「土佐少掾直傳」とあり、柱にも「道風」と記し、内題は「小野道風」巻末には「道風の終」とあつて、奥に「本郷菊坂町、大月次郎兵衛」と版元がある。そして同じ八行ながら本文が五十丁を算する。

【太夫・刊年】兩正本共に、奥に土佐少掾橋正勝の名があれど、木下版の前附には、例の如く「寶永五戊子初秋上

句」とあり、大月版には、「寶永四丁亥年六月」の刊記がある。

【形式・曲節付】兩正本共に六段にて、各段首尾に形式句のあることも、文章も同一であるが、木下版は段付が第一第二とあるのに、大月版のは二段目三段目となつてゐる。曲節付は對比はせぬが、同一かと思はれる。大序も兩者同一で、下の如く始まる。尤も用ひられた文字は時々ちがつてゐる。次は木下版による。

第一「扱も其後、げにや仰ても、こともおろかや、人皇六十代えんぎのみかどと申せしは、いとめでたきせいしゆにて、じんせいあつくましませは國とみ、民もゆたかにてたふとみあをき奉る。其比おのゝ中將道風とて……」

木下版の曲節を見ると、主なるものは次の如くである。

ウタイ、サツマウツリ、ギンナヤシ、ヒシグ、クドキ、アミトヤツシ、本フシ、イロサシ、ヲス、フシノリ、本フシナゲ、地ハコビ、ユリトメ、ホウカソウ、ヲドリヤツシハル、本地、カイドウ下リウツリギン、マイハリ、ツキカエシ、片タフシ、近江ムスヒキリ山、アイソ手、引取、哥ヤツシ、トル、玉ノフシ、上方フシ、タイナイ節、三ツユリ、エイカン、吟カハリ、レイセイカ、リ、哥トメ、キンコトハ、片ナヤシ、近江地、本レイセイ、サナイ、キリ山、ユリモトシ

「あるじのかんきに身をくるしめ、タイナイ思ふにかひなき道風と鏡鑑かしこにつきたをし……」(第四段初の湯女のクドキの所)

第三段には有馬の風俗、湯女の道中、第四段には湯女の口説、道行、狂女の段、第五段には怨靈の段など、曲節濃厚な場が多い。

【梗概】 第一 延喜の帝の時、小野中将道風といふ、美色にして能書で、文學に通じたるがある。嘗て菅相菀の口きゝにて、道風は藤森の稻荷の額の揮毫を命ぜられる。此時時平の甥時住も、此命を蒙らんとし來り、一足後れたため、時平は、道風は能書でもその師匠が不明だといふ難辭をつける。そして何か奇特を見せよといふので、道風が筆に墨をふくませて、殿上の障子に投げつけると、龍虎の二字が、動くばかりに書下るが、龍の字に點がないとて、時平が又難ずると、道風はわざと打たなかつたといつて、立つて點を打つと、黒雲が起つて雷電し、二十尋の大龍が角を振立て、時平の頭上にうづまく。時平が驚いて止めよといふので、道風が筆を投げると、雲龍の影が消えて、元の障子の文字が残る。

其頃橘遠安の姫が更衣に召されてゐたが、「女筆のほまれ有けるを、ともない、あしをもうけつゝ、おしゑたてて我朝の、能書のたねを末ながく、つがすべしとの繪言にて」道風は姫を賜はる。

時住は橘姫を見ると氣が遠くなり、何とかして手に入れんものと、郎等と謀り、道風が書いた稻荷の額に、上を調伏の文字ありとて、時平と心を合せて道風を失はうとする。やがて二月初午に道風が書いた額が稻荷にかけられると、時住はそれを引はづさんとするが、此時道風の郎等と争つて追拂はれる。

第二 小野道風は手のふるへを療治すべく、有馬に湯治し、家臣高殿いらかの介宗綱が家を守つてゐる。と當時都に比ひなき高名の白拍子松が枝と、警女小笹とに扮した、時住方の廻し者は、道風の奥方を奪取らうとして來り、宗綱に怪まれて、白狀してしまふ。宗綱は彼等が携へ來た毒酒にて、却つて二人を殺し、敵の合圖を利用して、敵の勢を一人／＼導き入れては殺し、やがて奥方が忍び出る如くに見せて、例の松が枝に扮した死人を、駕籠に乗せて送り

出し、わざと敵に奪はせて、館を取圍んだ敵の勢を追拂ふ。

第三 道風は有馬の紫屋といふ宿に泊り、高殿の舎弟八郎忠勝を従へてゐる。一日八郎は此地の湯の起源をきくと、じん龜元年行基菩薩の開基、宿二十軒、湯女ありて「御湯の時、垢にまいりて流を立て、都にまさる風俗」などと、宿の主人は歴史や現状などを物語る。やがて小姓萩原若芝兩人が一の湯へ迎に行つて、道風をつれて歸る。「其風俗もはれやかに、かむりなをしをぬぎかへて若紫のふちをつれ、短羽織に長刀ものゝふまなぶつき袖のとめきのかほりはつゝと、いま有がたき男色を、かいまたりし色女、いなには争^ぶ有馬なる紫屋へこそ急がるゝ」。此時、ふちは湯女の色も少し見よといつて、暫く道風の髪を直す。「こがるゝ霞思ひの花、誰かまよはじ若さかり、色をみがける玉くしげ、品々てうど取出し爪べにつぼむ梅のゆびかほる油をふくませて……うつりかのあかぬは君のかほばせとおもてをならべそでをくみ、……月と花との色くらべいづれ月やら花じややら、……」かうして湯女ふちが道風の髪を結ふて、はかなき逢ふ瀬をかこつてゐる時、湯女の道中がある。

「心もそらに初雁のとハたる如く女郎のはや道中の色の紋、里にしこなすかゝへ帯、思ひ／＼の染小袖、すそこにこがるゝもみのうら、りんずのはなをはこび足、西施がかほばせおのゝふり、是にはいかでまさるべき、……」。やがて道風が道中する女の名をたづねると、「皆人こがれあふかどのまがきにしげきたつたとて、今全盛の小ゆなぞと」などと一々ふちは語る。

そこへ時住の郎等が二人來て、道風を討たうとするが、禿が妨げ、八郎が二人をいためつけて縛る。此時都から館を夜討の報が來て、道風に早速の歸洛を求めるので、道風は曲者二人の命を助け、駕籠をかゝせて歸洛する。

第四 紫屋のふぢは道風が都に歸つて後は、病と偽つて勤をせぬので、主人の宗貞は彼女を一間に押籠めて、食も與へず虐待する。ふぢは乃ち狂氣になつて、鏡臺に文の枕を結びつけ、道風が殘して呉れた烏帽子を上座に直してくどく。宗貞は之を忍び見ると、遂に彼女を追出してしまふ。彼女は淋しい道行をする。「いとゞさへ淺ましかりし流の身、うきふししげき勤にてあふことかたき其人は、くもいにたかきおのゝ君……君を思へばかちよりぞ行山崎や八はた山、よどの川瀬の水車、誰を待やらくるゝと……こはたの里野の中山に伏見なるとある所に着きにけり」。

時平の甥時住は、道風の北の方をかいまみてよりひたすら憧れて、北の方が藤の森の稻荷を信仰するときいて、強奪すべく參詣の機をねらふ。折から今日錦木に玉づさをつけて狂ふ女あるを見て、狂へ狂へ、狂ふたら戀する人の在所を教へてやらうといふ。「狂女につこと打笑ひ、こなたこそとて鈴を取情なしとよ都人自を狂はせて笑はせ給はん御ためか、たまゝ靜まる我心狂へとの御仰、……なるは瀧の水ゝ日ははるともたへずとしたりゝつねにとうたり凡千年の鶴は萬歳樂とうたふたり……戀すてふ我名はまたきたつた姫、思ひそめたる紅の恨めしの人心戀せずはゝ人は思ひのなからまし……尋ねる方に今一度結び合て給はれや……」と狂女は舞ふ。時住が車の内から狂女に戀人の名をきくと、「雲井に名高き月なればおぼるげにてはいはじもの……秋よりさきに迎へんとあだしかはしのじつならぬおすて詞を頼みつゝ……なげくもはかな今更になをうらおもてある文のすみ色を御らんじて、若御存の方ならは御しるべおはわしませ情は人の爲ならずと」て狂女は車に近づく。文を見て道風の手跡を知ると、時住は郎等と圖つて彼女を利用せんとして、道風に引合せると偽り、道風の北の方の命令だといつて、忽然女を刺殺さしめる。と女の煩惱の一念は凝つて道風の館へ飛行する。

第五 道風は家に歸つて後、心地がすぐれぬとて、ふさいでばかりゐるので、北の方橘姫は心配して、その原因を尋ねると、腰元どもは、君には有馬の湯女が忘れられぬらしいといふことから、昨日も廊下に君の文が落ちてゐたといふので、道風の戀心をとめるべく、一同で圖つて、すぐに道風を北の方の室に招く。「長局はるかに過ぎて御ざしき、しだいゝにさまゝのからのやまとのかさり物心ときめく空たきのかほりゆかしきみちやうだい上段にからおりのしとねを敷て御床に、花鳥の御かけ物卓やかうろのしほらしく、おきあはせよくかたへには、みづしくろたなさまゝのてうどすほうにかざりつゝ、其他數の歌さうしかい、おけむとびはりやうし箱硯を添て直されたり」。かうした室にて道風は酒宴の中間入をしてゐると、いつか侍女白菊が拾ひあげた道風の玉章を読みあげる。「とるてこがるる花もみち、香打ちらしたる色文に詞のつゆのつやきよく、まづとよさりし、折からはぬるとしすればほとゝぎす夢かうつゝかあさつゆの、をきわかれにし時しにも、今の泪を比ぶれば、……ねびきしてかはらぬ松を相生と二世かけて契るべし、心にこめし限りをば又のよる世をまつばかり、もろ共に戀しなばこそ後の世を契るかひある中と思はめ、紫のゆかりの君、ふかく染たる此身より」。文讀をきいてゐた道風は、ふぢに與へた此文が、如何にして此處にあるかわからず、不快を感じて立去らうとすると、北の方は引とめて、「有馬の戀の山ふぢと云はる御やまい」であらう、かく「いやしき流に身を沈め」るは、家を失ふ基だとして、楊貴妃に對する玄宗、西施に對する越王の例を引き、嫉妬でなくて唯「家の爲子孫の爲今よりしてはふぢが事思ひ捨させ給へやと」心を盡してかきくどくと、道風は「誤つたりゆるし給へ」といつて、今より後はふぢを思ひきるといふ。

そのあと「れんぼのやみちれいゝとむねのほむらにこがれくる思ひの山やふぢがれう茫然と顯れて」、涙にくれ

て立つてゐる。道風が目覺めてとがめると怨靈は深く云ひかはしながら、及にまでかけられたことを怨んで、「情なくも北の方、偽り及にかけ給ふは、うらめし共ねたまし共云もおろかや一念は、五百生、けねん、無量劫と聞物をいかでか恨ざるべきや」といふ。之をきくと北の方は怒つて長刀とつて「自が及にかけて殺せしとは跡方もなき空事や」、といつて迫るが、怨靈は笑つて「自らが戀のかたき命のあだ争かすなをにおくべきぞ……悪ごうのとが諸共にむけんさい、ならくのそこにしづむ共君諸共にしづむべしとて立向ふ」。忽ち雙方秘術を盡して戦ふが、「かげろふいなづま水の月姿は見れ共手にとられず」、道風も太刀ぬいて切つて拂へど力なく、もてあましてゐる時、稻荷の神職松岡が出て遮り、「むじやうれいほう神道かぢ、はや立去れ」といひ、更に本當に罪あるは時住で、「ふぢこそ手をおひ伏見に有、……ふぢが思もひとへにたゞ、道風を思ふゆへ、ふびんなりし事なれば早々ふぢを呼迎へ、いたはりつかひ給ふべし、……我は是藤の森の稻荷の神靈」なりといつて飛去る。道風は其後ふぢを家に引とる。

第六 時住は又しても神靈に裏をかかれ、なほ叔父時平にたよる。時平は愈々藤の森の稻荷の額に、君調伏の文字を道風が認めたと奏するので、遂に雙方対決となる。かくて時住の最初からの悪事は暴露され、筆法が問題になつた稻荷大明神の大的字が、額からぬけ出て剣となつて、時住の胸をつきさしてもとに復する。「時住が一せき郎等共に道風に下され」る。

【解説】 一種の勢力争ともいへるが、他人の妻女横領未遂物といった方がよささう有る。即ち時平の甥時住が小野道風の北の方を横領せんとして、様々手を盡すを大筋とするが、それよりも道風が、有馬の湯にて治療中、湯女ふぢになづみ、ふぢは思ふにまかせぬ戀心に、氣が狂つて道風の後を追ひ、時住に偽はられて利用されんとして切ら

れると、怨靈となつて、道風と北の方を襲ふといふ傍系物語の方に、遂に心をひかれるものがある。其處には有馬の湯女の生活や、元祿時代に於ける有馬の繁昌、湯女の道中などが、情味頗る濃かに、而も土佐物に珍らしいほど、巧な文章で描出されてゐるからである。道風逆心の理由は有耶無耶で不得要領なものであり、終の対決の場は不自然至極であるが、土佐物の中では優れた作といへよう。

本曲にて、最も吾々の注意を引くのは、作品の上に漲つてゐる元祿情調と、寫實的な叙述とである。延喜の頃に湯女があつたり、白拍子があつたりすることは許すとしても、道風の湯女ふぢとの濃艶な遊びの場や、湯女の道中の華かな情趣に至つては、延喜の御代には到底思ひもよらぬものである。其所にまた本曲の特徴があるといへばいへるのである。

【原據】 萬治二年の井上播磨の物語『道風額揃』乃至、加賀掾の物語といはれる『小野道風額揃』と關係あるものかと思はれるが、それらを未見にて判定を下すことが出来ぬ。

本曲は道風の傳記によつたものと思はれるが、彼は元來小野篁の孫にあたり、祖父篁と等しく書を能くし、當時の殿壁題字宮門扁榜等、彼の書にかゝるもの極めて多く、醍醐朱雀村上の三朝に仕へた。

【義太夫正本との差】 元祿十一年五月五日から竹本座に上演された『小野道風』又は『小野道風記』と稱する義太夫正本とは、筋の上からは全く關係のない別物である。

義太夫正本については、拙著『古淨瑠璃の新研究』延寶享保篇にゆづる。

【體裁】 紫蘭文庫藏本。作品は頗るまづいものだが、よほど流行したと見えて、此正本は到る處に見られる。半紙形八行五十一丁。柱には賣らんが爲か、「高尾」とあるが、高尾は挿話的にしか用ひられてゐない。巻尾に小傳馬町三丁目木下甚右衛門刊。

【太夫・刊年】 前附に、例の如く、寶永五戊子初秋上旬、土佐少掾橋正勝とあるが、最初の刊年は明かでない。第六段に朝日の阿彌陀如來開帳の事があるが、これは刊年又は上演推定の資料としては力が乏しい。第三段の節事に「カリカネフシ」なるものがある、雁金文七の曲と關係があるとすると、元祿以後の上演物と思はれる。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句がある。

第一「扱も其後、御存知の者誰が有ると召るれば太郎冠者はみつと、次郎冠者つぐしげが、御まへにかしこまる……」能狂言的な大序である、第四段首には、謡曲『勸進帳』の首句が用ひてあつたりするが、別に謡曲や狂言とも深い縁はない。

第三段に獅子の曲の舞、第四段に江戸名所廻り、第五段に七夕の節事などがあり、相當に機巧仕掛も用ひて賑かに上演されてゐる。

曲節付中、珍らしいものを書くと、

シ、ウタ、ウツムスヒ、イロサシ、片ヲロシ、ハルツキカヘシ、片ナヤシ、タシマフシ、カリカネフシ、トナセ、

花笠フシ、二上リ、上方フシ、カスガノフシ、片タフシ、キリ山、近江ムスヒ、舞、イロシナリ、シクレフシ、

ホウカツウ、二ツ三重、諷次第、セツユリ、玉野フシ、アミトヤツシ、チトリフシ、エイカン、一ジノミ、

三ツ引、カイトウ下リ、リヨ、サ、ナミ、本地、本フシ引取、本フシナゲ

【梗概】 第一 浮田左金吾時世は、妻ほしさに太郎冠者惟光、次郎冠者次茂をつれて、祇園の祭禮見物旁々、美人をさがしてゐる。折柄錦小路の棧敷にて、禁中の上北面、齋藤左衛門吉廣の一人娘誰が袖を見そめて近づけば、好意を以て迎へられ、意氣投合する。そこへ又淀河邊の當麻のづかう勝廣といふ好色横暴の悪漢が時世にまねて、誰が袖に近づかうとして嫌はれ、惟光等に追拂はれる。

第二 浮田の左金吾は、遂に禁中の北面齋藤兵衛尉定房の一人姪（前には吉廣の娘とある）誰が袖を妻にすることになり、今日花やかに婿入をする。

當麻勝廣は、其後誰が袖の姿が忘れられず、郎等あくたの助及び浪次郎と圖つて、夜陰に乗じて誰が袖を強奪しようとする。

その夜悪人勝廣等は婿入のあつた定房方に押入り、戦の中に定房を殺す。左金吾等は叔父の仇をとらうとして飛出す。惟光は誰が袖を伴うて東に下る。

第三 當麻のづかう勝廣は、都にて齋藤定房を討つて、大江のゆふがん鬼貫と名を變へ武藏にかくれて吉原に通ひ、當時全盛の三浦屋の高尾を手に入れようと心を盡すが、「千日千夜通ふても叶はぬ戀ぞ」とふられてしまふ。

浮田左金吾はまた浮世の助と名をかへて、仇を尋ねて吉原に通ひなれ、高尾に馴染んでゐる。今日も彼は高尾を訪

れて宴を催し、獅子の曲を奏せしめる。「浮世を忘るゝ色里の、五町の君の數々にみな人がれ伏見町、……外にはあらぬ江戸町や、情に名をやあげや町……初もと結の小紫、こがれこがるゝ花筏、心も波に浮橋や、若紫は藤ともえ……いさや名残の拍子をと、世々も盡せじ松の葉の、散りうせずしてときわぎの千世萬代の壽をかなで、舞をぞ納めける」。

そこへ浮世の助の下部が来て都より御用の飛脚故急ぎ歸れといふ、浮世の助が驚いて高尾と別れた後に、牡丹の花の瓶を踏破つて鬼貫が立ち出て、強ひて高尾を口説く。高尾が思ひの儘に振つて、鬼貫を刺さうとすると、鬼貫は遂に高尾を刺して逃げる。

第四 太郎冠者を連れて身を逃れた誰が袖は、今しも江戸名所めぐりをして、橋場の方へ歸る途中、正覺院にて、浮世の助と馴染んで殺された高尾の物語を、僧の道哲から聞く。誰が袖はやがて浮世の助の所在を尋ねて、深川へ導かれようとする時、塚の後から高尾の姿が現れ、浮世の助との間や鬼貫に殺されたことなどを語り、浮世の助の弔ひを願ふといつて姿を消してしまふ。

と思ふと地獄の様が現出して高尾がくるしむ時、僧道哲が名號を唱へて攻めかけると、阿彌陀佛の姿が輝き、もとの正覺院の様にかはる。一同は浮世の助の家へいそぐ。

第五 誰が袖に別れ、高尾に死なれた浮世の助は、世をはかなみながら、酒にうき日を送り、今夜も七夕星を見てゐると、いつか夢を見る。偶々星一つ落ち、蘆間より天乙女が出て、自分は織女だ、君は牽牛星、色道を世に示さん爲に生れた光る君であり、業平であるのだ、迎へに來たといふ。即ち誘はるゝ儘に梶の葉に乗つて天乙女と共に天上

する。忽ち浮世の助は牽牛星と變つてしまふ。「それ天上と申せしは、此界より八萬由旬、しゆみせんの頂上を、たうり天と申つゝ、帝釋の喜見城、三十三天段々に……」と、此處に天界の説明的節事がある。さて織女と牽牛の浮世の助とが、互に相逢ふてゐる時、織女は浮世の助の身をいたはり、再び上天のかなはぬ事なき爲にと、前に己が一人の妹ふ女を誰が袖、一人の妹順女を高尾として下界に下しておいた、今それに引逢はせようといふと、誰が袖高尾の二人の姿が出て牽牛を争ふ。牽牛は即ち二人に碁を戦はしめて、勝負なきを見ると、先手の順女を負、ふ女を勝といふ。此時順女は恨めしげに、ふ女に向つて戦を挑む、戦の中に浮世の助は夢が覺める。ここへ本當の誰が袖が訪れて來る。

第六 浮世の助は誰が袖に出遇つて、高尾の事を語り會ひ、やがて「朝日の彌陀如來」の開帳を三浦の家にて行ひ、諸人の參詣する中に、鬼貫を見つけて、一同で見事に仇を討つ。

【解説】 浮世の助が妻さがしをして、誰が袖娘を見つけて、婿入をした時、鬼貫と呼ぶ無道者が誰が袖を見そめて手に入れようとして暴力に訴へ、失敗して、娘の叔父を討つ。浮世の助及び娘等は乃ち仇討に出る。その間に吉原の遊女高尾に馴染んだ浮世の助の目をぬすんで、高尾に執心の鬼貫は、高尾を手に入れんとして意の如くならず、又高尾を刺す。けれども浮世の助と誰が袖は、首尾よく廻り合せて、折柄朝日の彌陀如來の開帳に參詣した鬼貫に復讐するといふのである。要するに浮世の助が己が戀人に對する無道を討つて、仇を報するといふ一種の仇討物語に、七夕物語を結びつけたに過ぎぬもので、遊女高尾が借りてはあるが、全曲に對する高尾の有機的關係は至つて貧弱で、僅に弱々しい挿話として用ひられてゐるに過ぎぬ。『三世二河白道』などといふ物々しい外題は、一度二世をちぎつた

高尾に、夢の中で復出遇ふといふ物語に縁をもたせたものであらうが、同じ土佐掾の作『一心二河白道』や『名古屋山三郎』などにまねたものであらう。

【原據・影響】 主人公を浮世の助とか世の助と呼んで、西鶴の『一代男』とでも、さも深い関係がありさうに見せてあるが、色道にかけての傑物であるといふ以外にあまり関係はない。高尾といふ名も、唯のだしに過ぎず、編み込まれてゐる七夕物語は、七夕傳説によつたもので、別の土佐少掾正本『淺草觀音緣起』は、此作によつたものらしく云はれてゐるが、それとの関係も深くない。

○淺草觀音緣起

【體裁】 早稻田大學圖書館藏本。半紙形九行、僅に十三丁の、相當大字の稽古本である。柱には「エンキ」とのみ記され、奥には版元は見えぬが、前附に次の文がある。

「世間にしやうさしの本土佐一流の板行は、予が家ならでは無之處に、頃日方々にて似せ板行……誤有之、太夫直の本とは各別相違仕るにより、今又改之土佐少掾自筆の章さし、所々ふし拍子を付、清濁を極、しやうに不及所は、片かなにてしらせ、拍子のあたりを吟味し、此一流稽古の方御調法にもならんと、予が開板の印には、正利と有之角判をおし、令板行……」小傳馬三丁目、木下甚右衛門

【太夫・刊年】 前附によつて、土佐少掾の語物であることは疑ないが、何代目の土佐が語つたものか。試に本文を見ると、觀音緣起の終つた後に、

虎 扱其始め佛體を網にて引上げ奉りし四人の者はいかにぞや

匠 さん候觀世音みどう入佛有て後、しんの中臣をあかさ堂にうつして一の權現とあがめ申す

虎 さて三人の兄弟は

匠 三社權現と祝ひつゝ三月十八日の祭禮は……

といふ風に、「虎」と「匠」とが、掛合にて語つてゐる處から見ると、これは初代土佐太夫虎之助と、其子二代目土佐太夫となつた内匠太夫とが語つたものか。それとも初代土佐少掾の二男にも虎之助といふのがあるらしいから、二人の兄弟が語つたものか。他の『今川かつら』などの例から見ると、内匠太夫と弟虎之助との語物らしい。

此正本の文中にある推古天皇三十六年に、此觀音像が川から引上げられたとすると、其時から一千百年にあたるのは享保十二年である。その年七月の開帳に語られたものと見ると、此正本は二代目の土佐少掾と虎之助とが語つたと見る方が適當であらう。蓋し、延寶九年の『堺町古圖』を参照すると、其頃はまだ初代土佐掾の時代であるやうだが、貞享四年の『江戸鹿子』や元祿二年の『江戸圖鑑』を見ると、貞享四年は二代目の土佐少掾の時代らしく思はれるから、享保となつては、むしろ其弟の虎之助か三代目かが漸く油のつた時代かと思はれる故である。

早大圖書館藏の本曲奥丁を見ると、後書にて、「三世二河白道五段目、右此本者土佐少掾正勝、正徳四甲午曆初ル」といふ妙な文がある。此年代は上演と関係をもつてゐるかと思はれる。ところが『聲曲類纂』徴の卷の「寛文古畫堺町葺屋町芝居の圖」を見ると、市之丞と虎之助との名題で、『淺草觀音の本地』を演じてゐる操芝居がある。之は正しく土佐掾の芝居にて、本曲同様の物を演じてゐるのだらうと思はれるが、さうだとすると、この正本は後の版本

で、寛文頃の所演は同一正本ではなかつたらうと思はれる。(四一二頁参照)

【形式・曲節付】 唯観音縁起を主として述べる目的の一段物であるから、頗る短いものである。江戸土佐節特有の曲節付が澤山あり、既記の如く掛合でかたる場もあつて、相當にぎやかに出来てゐる。即ち

サシ、色サシ、シナリ、色シナリ、本地、色地、平詞、ウタイ、タマノ、カイドウ、ヘイケ、エイカン、
レイセイ、アミトヤツシ、ヘイケヤツシ、レイセイヤツシ、マイキン、マイハリ、ホウカ、ハル、キンハリ、
キンノリ、フシノリ、下ノリ、色ノリ、ナカシ、ユリ、三ツユリ、色ユリ、ユリステ、サ、ナミ、カ、ル、
キンカ、リ、上カ、リ、キンカハリ、キン、色キン、下キン、上ケムスヒ、ツメムスヒ、下ムスヒ、
キンムスヒ、小ムスヒ、ハルムスヒ、スエムスヒ、ウツリ、フシウツリ、ウタウツリ、サツマツリ、
半ナヤシ、キンナヤシ、色ヒロヒ、ハコビ、キンハコビ、ヲトリ、ユリモトシ、三ツ引、色三ツ引、トル、
ハヤ三重、色ヲクリ、下ヲクリ、サナイ、ウク、ツナキ、クリ、クリ入、ノリミ、下セメ、早ナケ、ナス、引、
キリ山、一ジノミ、色ヲトシ、片ヲロシ、中、下

などの曲節付があり、内匠太夫と虎之助の掛合もあれば、同吟もあり、平詞といふのは次の處に用ひられてゐる。

「こゝろはハよい、ハとふりだすふりつゞみしつたん丹前のハたてを見せたる……」

【梗概】 ある七夕の日、別れた誰が袖をかこち、死んだ高尾を慕ひながら、浮世の助が思ひぬの戀しき夢を結んでゐると、ふしぎやあたりにしげる芦の間に、星が一つ落ち、見る／＼それが天乙女となつて現れ、浮世の助に向つて、色狂ひの心をとゞめん爲に、ふだらく山まで供せよとの使に來たといふ。乃ち浮世の助が乙女のさ／＼ける袖に乗

りうつると、袖は八重の雲路に上る。

丁度七月十日四萬六千日の前夜、世の助が淺草觀音に參つて祈願をこめてゐると、毎夜のやうに馬を引いて參詣する女が來た。世の助が故をたづねると、明日の四萬六千日の爲に通夜をするのだ。此馬は拜殿の右の方なる古法眼元信が畫いた繪の馬で、それが夜な／＼草を食みに出てゐたが、其後ある繪師が繫ぎ馬になをしてから、動かなくなり、草もはまぬあはれさに、今夜は草をはませて、御堂を引くのさといふ。

ついで女は淺草寺の縁起を語り出す。——三十四代推古天皇の三十六年戊子三月十八日、武州入間の郷のしんの中臣といふ觀音の信者は、家の子濱成竹成友成の三人兄弟をつれて、入間川に舟を浮べて、漁に出たが、魚は一尾もとれないで、怪しげな朽木が三度も網にかゝつた。彼はその朽木を陸に投して、歸つたが、爾來「夜毎に、草村金色の光を放ち、大光明天に輝き、地をてらす」ので、草刈ともが立寄つて見ると、「諸天どうじ天下り、槐の木に觀世音の尊體をうつしをき、是は南方ふだらくせかいの教主大じ大ひのちかひある、正觀世音ぼさつ也、今〇法の折なれば此土にじげんましますと宜ふみ聲高々と雲井に上りまします」。草刈どもが之をきくと、刈つた草の中から、「あかさといふ草取出し、柱となして結ひ付、ちがやを以て屋根をふき、かしこにうつし奉る」。其後御堂建立の良材が柳島についたので、聖僧の指圖にて、洪水の中に里人が其材木を引上げると、空に五色の雲がたなびき、花がふり、金色の龍王が淺草村に天下り、此處に觀音の御堂を建立せよといつて上天する。乃ちその通りにして金龍山と名づけたのだ。そして觀世音を引上げた、しんの中臣をあかさ堂に祭つて、一の權現とし、三人兄弟は三社權現と祝ひ祭る、草刈は十社權現となるなどと物語る。

語り終つて頼冠をとつた姿を見ると、女は正に高尾である。そして君にあはん爲に靡をのがれ出て、此佛に祈つた甲斐があつた、嬉しやといふ。世の助が喜んで、夜の明けぬ中にと、手を取つて出ようとする、當麻のづかぶが駈來つて、高尾をさらつて行かうとして、世の助を見つけて斬つける。世の助が観音に祈つて斬つてかゝると、相手の太刀は折れる。隙を見て、世の助は高尾を背負つて逃出す。

世の助が一軒家を見つけて隠れようすると、老母が出て迎へるが、やがて自分は用足しに出てゆき、代りに少女をお伽に出す。少女といふのは、世の助を慕ふて下つて來た誰が袖である。誰が袖は此家が盜賊の住家にて、旅人もてなすと見せて、實は夜中に命をとるのだといふ話をする。と世の助は驚いて、神佛の助を謝しながら、誰が袖と高尾の手を引いて逃げてゆく。

さて夜中に歸つて來た老婆は石の大槌を揮つて、世の助を殺さうとするが、少女の影も世の助の姿もうせてゐるのを見ると、謀らうとして謀られたが口惜しやと、後を追かけて襲ひかゝるが、世の助は勿論観音の庇護にて難をのがれる。怒つた老婆は池に飛込むと、見る／＼大蛇となつて、炎を吐き出す。其時かれうびんは八尺の劍をぬいて投げかける。大蛇は怒りながらも、光明に照されて頭をうなだれ、忽ち不動明王となつて現れる。此時かれうびんは世の助に向つて、左金吾よ、汝は愛着の念深き故に、未曾有の不思議を見せてやつたが、此後一層信心せよといふ。その聲と共に夢はやぶれ、左金吾はいつもの處に臥してゐた。夢かと驚いて起きたところへ、誰が袖がたづねて來て喜ぶ。

【解説】 浮世の助といふ人物をかり、彼の戀人、誰が袖と高尾とをかつぎ出して、浮世の助の夢中に、高尾が観音縁起を語ることにしてあるが、唯縁起を語るだけで、大した役をするでもなく、誰が袖も其名をだしにつかはれてゐるだけである。一種の靈驗物として、観音の力を見せる爲には、少からぬ機巧も用ひられてゐるが、結局観音創立の千百年忌かの開帳の折に、上演された観音縁起物語といふに過ぎぬ。

【出處・原據】 淺草観音の縁起に、土佐節の正本『三世二河白道』の五段目の極めて僅少の一部をかりてつきませたものである。(尙之に關しては四二二頁参照を要する。)

淺草観音縁起は随分古くからあつたものらしく、足利末期頃の同縁起繪卷といはれてゐるものや、慶安五年に出來た繪卷、寛文二年六月上州沼田城主滋野信澄寄進、狩野氏信筆の繪卷六卷、承應三年土師專堂坊撰の『淺草寺縁起』一卷の外、元禄頃に發行されらしい『淺草観音御傳記』などがある。縁起中の柳島に良材が漂着したのを引あげて堂を建てたといふのは、『扶桑略記』の「推古天皇の三年に、沈水香木淡路島に漂着す、勅して観音像を刻せしむ」といふ記述などを取入れたものか。又繪卷では、観音像は宮戸川から引上げたことになつてゐる。尙本曲と『花月十二段』とも多少關係がある。

【影響】 此曲はまた淺草観音靈驗記に關する姥ヶ池の傳説として、文化四年七月には、江戸市村座で、『金龍山創礙』(並木五瓶作)として、ついで安政六年四月同じ市村座で、所作事として、『種々薩埵誓掛額』(河竹默阿彌作)の外題で上演され、後には之を書直して、明治二十三年四月同じ市村座で、『一つ家』と題して上演されてゐる。兩來歌舞伎劇では、むしろ『一つ家』として知られてゐる。

【一つ家】 武藏野の一つ家にすむ鬼婆いばらは、旅になやむ人を泊めては、之を石の枕で壓殺して、所持の金銀を奪ふことを常としてゐたが、ある時、淺草の観音が稚兒姿で現れ、一夜の宿を求めるところが娘の淺茅は、母とち

がつて、やさしい女で、此稚兒を見るとこつそりと落してやる。それと知ると、婆は娘に向つて刃を振りあげるが、此時観音の姿が眼前に現れ、婆は體がすくんで動けなくなるので、遂に悔悟して、姥が池に身を投げるのである。そしてこれが淺草観音堂の前での結乗佐渡七の轉寢の夢とされてゐて、『一つ家』の筋である。

これで見ると、一中節の『石の枕』は勿論、謡曲『安達原』をとつて脚色された『奥州安達原』の石枕傳説などは、皆之と關係があると思はれる。

○京四條おくに歌舞伎

【體裁】 帝國圖書館藏本。半紙形八行四十九丁。柱に「お國」とあり、前附に版元が木下甚右衛門とある。別紙の奥書は欠落したらしい。卷末には「京四條於國歌舞伎卷終」とある。『新群書類從』第五にも收む。

【太夫・刊年】 前附に例の寶永五戊子初秋上旬、土佐少掾橋正勝の二行がある。

【形式・曲節付】 六段曲。第一第四段の首には形式句なく、他の段首及び各段尾には形式句がある。

第一「序葉手おどりきそへや、らくやうの花の、ぢよろうの、なりふりは、うき世ぼらしをしゃんときて、……」
曲節付の主なるものは下の如くである。

序葉手、カ、ル、本フシ、舟歌ヤツシ、クドキ、本三重、ハヤ三重、サツマウツリ、ウタイ、虎ヤ吟、イロヲクリ、ハヤメ、一ツ三重、二ツ三重、本フシヤツシ、本地、三重、キリ山入、乱拍子、本フシ引取

道行はないが、第一段に、重代の重責名劍武具ぞろへ、第二段に主人公所知入の短い節事、第三段に姫の七夕遊

び、第四段に薫姫の吉原入、第五段にはお國歌舞伎の模様、といった風な、色々の節事がある。

【梗概】 第一 當時天下に隠れなき今川仲秋が歌舞伎女お國に溺れてゐるを、重臣荒川刑部と其子小六郎とが諫言をすると、お家横領の野心ある大道寺鐵山と其子江平とは、仲秋を乗せかけて、荒川父子を讒し、機を見て父子を陥れようとしてゐる。

寶藏の虫干の一日、江平が歸つた後にて、小六郎が寶物の番をしてゐると、仲秋の妹薫の前は近づいて、重寶物語など聞いた機會に、小六郎を口説くが、其時がうの名劍は獨り手に抜けて飛廻つて薫の前を負傷させる。物音に驚いて仲秋や大道寺父子が飛出し、刑部父子の罪を鳴らし、小六を一打にしようとするが、父刑部は取調べた上、罪あらば父が手打にするといふ。それを大道寺父子が邪魔をして、仲秋に討たしめようとする時、床に飾られた着長が立出て遮り、中から丹波次郎時秀が飛出して、大道寺父子の此國横領の陰謀をすばぬき、逆心の證據をあげる。けれども仲秋はなほ夢がさめず、大道寺父子をつれて去る。刑部父子と丹波の三人は、國を思ひ君を思ふ忠臣としての無念の涙にむせびながら見送る。

第二 大道寺鐵山、江平父子は、仲秋を墮落させて、荒川父子と丹波次郎を逼塞させ、更に機を見て仲秋を討たうと謀る。

仲秋は今日在京を御めんあつて入國する。「あしげ水おほひばりけや、をぼろといはんさび月げ、すへつむ花や、べにくりげ、すみすりながす黒の駒……關東さしてぞ入國ある」。鐵山父子は跡を追うて攻め來て、鬨の聲をあげる。「仲秋ふぎにして、道にあらざる御ふるまひ、上聞に達しつゝ、我々に仰有り、此城を御預け、仲秋をばいづく

へも追失へとの御事」といつて、攻立てるので、雙方の戦となつて、仲秋は遂に寶藏に入つて切腹しようとする時、荒川刑部は駈け来て押止める。仲秋は漸く眼が覺めて落ちてゆく。刑部は獨り奮闘した後、腹十文字にかき切つて死ぬ。

第三 大道寺江平は本城を乗取り、新に今川かけゆの助照早と名乗つて、世にはびこり暮すが、小六郎と丹波次郎を討もらしたことが氣になつて、各二人の臣を遣して、都の方と江戸とをさがさせる。

仲秋の妹姫薫の前は、照早の戀を退けて、わが戀小六郎にこがれつゝ、今宵七夕の夜を乳女藤が枝と共に、池に舟を浮べて、水に歌を流して、せめても年に一度の逢ふ瀬を祈つてゐる。そこへ照早は近づいて舟に飛乗り、例の如く姫を口説く。此夜に限つて、姫は最初から照早を快く迎へ、進んでその戀を容れ、祝言の盃までして後、母ゆづりの守本尊の愛染明王の像を照早に與へるといつて、わざと水中に落し、自ら之を水中にざぐらうとして、遂に照早を水に入らしめ、やがて彼が水から浮いて來た時、藤が枝と二人で照早の腕を切り、首をかき落し、東の方へ落ちる。

第四 あら川小六は「關東にならびなきだての小六とあだなたち」、また丹波次郎は「丹波の助太郎と名を呼かへて」吉原にて放埒の生活をなしてゐる。折柄薫の前は「丹前ふうと世の人の姿を學ぶしなぶり、女心の大たんにふるや、やつこの長刀」姿で、吉原に小六郎をさがして、丹波次郎に出遇ふが、今勝山にのぼりつめた小六に遇はせるとて、茶屋につれてゆかれる。そして勝山と小六の遊んでゐる所へ、つか／＼と編笠姿で入つて二人を驚かし、やがて編笠をとつて、薫の前の姿となり、小六に向つて今日までの苦勞を語り、散々に恨み言をいふ。小六は此時「此勝山と申は、都四條に名も高きお國と申すかぶきをんな、然るに主君仲秋公、通ひなれさせ給ひつゝ、深き情に預りし、

御恩のおしう仲秋公、此度の乱げきに、本城を御立のき、お國は君を介抱なす」、そして二度の勤をして仲秋の爲に盡してゐるのであつて、専ら仇を討取らん評議をするのみだと語つて、姫の心を和らげる。

そこへ月見の臺を蹴破つて、大道寺の郎等らい八、うんじの二人が飛出し討つてかゝるが、駈付けた丹波と共に、小六が燭臺にてたゞきつけて生捕り、都へ引き、勝山を請出して歸る。

第五 大道寺鐵山は仲秋の行衛をたづねて都に入り、折柄江戸から立歸つて、再び四條河原に棧敷をたててゐる歌舞伎女のお國に近づき、仲秋の所在を知らうとして、今日歌舞伎を見にゆく。(暫く歌舞伎女の美しい姿や、太鼓や鼓の女の美しさや、衣裳などをたゞへて後「えもんながしのまりの曲」を見たりすることを記す。) やがて鐵山がお國に近づいて根引しようといふ。お國は時こそ至れと、合圖の所へ導いてゆくと、丹波は釣とうがいを切落し、小六姫君と共に鐵山の首を討つ。

第六 鐵山の叛逆にて、今出川大納言公直卿の、北山の山莊に忍んでゐた仲秋は、今日鐵山を討つたとの丹波の知らせを喜び、公直につれられて、直に御所へ出て、御勘氣御免を願ふ。時の武將源右大將義政が、今川入道了俊の息子仲秋の不心得を詰つて、了俊の庭訓の一軸を持出して、公直に見せた折を計つて、仲秋に罪なくして、凡て鐵山の陰謀惡逆に基づくことを答へ、仲秋は元の官祿に復される。

【解説】 大道寺鐵山父子が主君仲秋をお國に迷はせ、忠臣荒川刑部父子を退けてお家を横領する。鐵山の子江平は仲秋の妹姫を手に入れんとあせつて、却つて妹姫に殺される。姫に慕はれた忠臣荒川刑部の子小六はお國と圖つて、遂に悪人大道寺を討滅し、再び仲秋を榮えしめるといふ筋で、極めて有ふれたお家騒動物に過ぎぬが、主君の戀の對

象を歌舞伎女のお國として、彼女を仇討に加勢せしめたといふこと、それが爲第五段に於て、お國歌舞伎の舞臺と踊の美しい場面を見せるといふことが、本曲の狙ひであつたと思はれる。

【原據】 趣向に於て聊か寛文三年の『今川物語』に負ふ所がある。

尙ほ姫の戀人に、關東小六郎の名が出て來るが、土佐少掾の段物集にある「關東小六風流道行」は本曲とは關係がない。又歌舞伎で有名な『關東小祿』と本曲ともあまり縁はない。

○光源氏袖鏡

【體裁】 紫蘭文庫藏本。又帝國圖書館藏本。半紙形八行四十九丁、柱には五十九丁とあれど、飛丁が多い。初行に、以上の題があり、奥にも同様「光源氏袖鏡卷終」とある。柱には「袖鏡」とあり、前附が一丁あつて、それに太夫の名が見える。卷末に別に半丁あつて、木下甚右衛門の名がある。

【太夫・刊年】 前附に土佐少掾橋正勝の名があり、それには例の「寶永五戊子初秋日」の刊記がある。

【形式・曲節付】 六段曲にて、初段は「扱も其後」で始まり、二段以下は「其後」で起され、各段尾には皆形式句がある。

曲節付の中で目立つたものは左の如くである。

リヨ、サイツメ、ツメムスヒ、イロサシ、片タフシ、早ナケ、カイドウ下リ、リウクワヤツシ、上方フシ、イロクドキ、ユリハコヒ、三ノギン、ハコヒノリ、大ノリミ、ウツムスヒ

その中にて「色クトキ」が非常に多い。

道行は第四段に、明石の前が須磨から石山寺までつく間に設けられ、而も此邊一體に紫式部と明石の前とのかけ合といふことになつてゐる。此外にも、第五段その他に濃厚な曲節が見られる場が多い。

第一「扱も其後世々の人みがく心の玉のとく、光源氏の物がたりみなもと、ふかく尋ねるに人王六十六代……」

【梗概】 第一 光源氏のものごたりのみなもとを尋ねるに、人皇六十六代の一院院のお后は上東門院と申す。「門院の御後見鬚黒の大將きんもち公、又西の宮の左大臣高明と申は和漢のさいおもければ一世の源氏を給はり世の人光源氏と申けり、容貌ゆうびにましまして色ごのみの卿なり、去によつてひげぐるも、くわしよく第一の人なれば戀の色かのあたごに、源氏と其あひ」がよくない。或時御門春日へ行幸あり（此所に此神の由來を説く）還幸の途、野邊に井戸ある中から白ふの鷹一羽がとび立つたので、現れた老翁にたづねると、その井は、野守の鏡とて有名なものと答へて去る。乃ち叡覽を仰ぐか仰かぬかについて鬚黒と源氏と争ひ、鬚黒大將が試にのぞいて見ると、此井しん動し、車輪の如き光物東をさして飛ぶ。やがて惡鬼現れて、左に鏡をもち右に鐵杖をふり、天地を動かす聲で、こゝにすむこと一千年主上の御命を失はんと企みしに、源氏が才智深くて企みも甲斐ないとて討つてかゝる、御供の民部の太夫は光が大刀をぬいて戦ふと、變化は是光をつかんで空に上る。やがて是光は雲中から鬼神を刺して落ちる。一同は鬼神の首を討落し、名高き名鏡を取る。

第二 御后の仰にて、紫式部がめづらしき草子をつくる事となる次第を先づのべる。

鬚黒大將は久しく紫式部に戀して、度々文を送るが返事なく、偶々一つの文を拾つて見ると、それは光源氏が紫式

部に送つたものである。大將は妬んで源氏を失はうとする。乃ち家臣つぐ長に圖つて、松浦の住人萩原ひでのりを召し、源氏を討つて呉れば、玉柱の内侍を盗み出してやるといふ。さて源氏は秀則に招かれて、宇治山の山莊の夕涼に赴くべく約束しながら、頭の左官義清の勸にて、代りに義清をやる。義清は酒宴の後に斬つてかゝられ、却つて郎等を斬つし、天晴の勇をふるつて歸る。

第三 ひげ黒の大將は秀則の失敗をきいて讒言によらうとする。拾ひ文その他でさまざまの讒言をすると、源氏は「一先づ播州明石へ流し入道にお預け」となる。

是光は秀則を討たうとして巧ににげられる次第が此處に述べられる。やがて秀則は北野天滿宮の前まで來ると、駒進まず、神罰を受け、馬より落ちて死ぬ。

明石の浦の源氏は旅の憂さ晴しに琴を弾いてゐると、「かの入道のひとり娘あかしの上と申せしは、いとやごなき姿」なるが、近よりて琴をきき、「時の世にかゝる人こそおわすかと焦るゝばかり戀しくて、思はず障子を引あくれば、源氏峯のあらしかと、そなたの方を見給ふに互に面を見合て、はつと斗に姫君は引たて立のき給」ふ。源氏は見えなくなつた姿のあとを追うて戀し、「寝られぬまゝに光君、便りあるこわらわに、かいたもしせさせつゝあかしのひとまへ忍ばるゝ」。そして目さめた姫に對して「源氏はいとゞこがれぶねあまの、たくものいふせくも、心に物をなやむかなびけや君とぞ仰ける、あかしのひめは聞しめし、たそやたそ、なる戸の沖におとするは、誰成らんと、のたまへば、たれとはつらき仰かな、さりにし戸ばそのかいまみより、身はうつせみのごとくにて、すゑつむ花の色にのみ物やおもふとふ人にいかが、こたへむことの葉の、野分につらくみだれつゝ、其かゞり火にむねの火のなをも

えまさりさふらふなる、源氏にて候ぞやあけさせ給へと仰ける。明石は由を聞召、こはうつゝなき御出やあからさまなる事共に、まだ打つけの御忍び、人目せきやも有物を、いとはしたなきあづまのまきのはしらによりそひて、たゞすませ給ふ事、あだな立田のみぢのがに、猶こりすまの御心ひたすら思ひ切りつぼのとのい、めぐらぬそのさきに、とく／＼歸らせ給ふべし」といふが、遂に源氏が歸らうとすると、姫はつま戸を押あけて出て「ゆるさせ給へと御たもとにすがらせ給へばさすがに、きゆる計の玉のをに若紫の色ふかく、あならす戀を打とけて、かたらひ門に入給ふ、實淺からぬ御ちぎりうれしき共申斗はなかりけり」。

第四 其後右大臣の御娘せうぎやうでんの女御の御腹に王子御誕生、東宮に立てられることとなり、攝政として源氏は召返される。是光がお迎にまゐる。源氏は姫との契りが深くなつて、別れを悲むが、またの時を期して別れ、都に歸ると、勅命によつて鬚黒大將と源氏とは、再び相したしみ睦むこととなる。

紫式部は物語の想を構へる中、「八月十五夜の月はこすいにうつりつゝ式部はしばらくすいさうぐわんに入ておもはず一つのしゆかうかみしを、わすれぬさきにはやとくと、佛前に候ひける、大はんにやのれうしを、御ぼんより申請、まづ須磨明石の兩まきを書出けるこそ有がたけれ、さればみどうも靜かにて、くまなきゆかの夜ぶかさ、そらのかぎりもみえ渡り入がたの月すこく、只是西に行なりと（明石）ひとり事にもあかしの前あまりげんじのゆかしさに、めのはぎ野を御供にてあかしの浦をほの／＼と立出給へはあさぎりに……」此邊明石の前の道行になつてゐて、紫式部との掛合になつてゐる。やがて明石の前は石山寺につく。

第五 明石の前はめのと秋野と共に觀音に參り、源氏の君にあはせ給へと祈る。そこへやはり參詣に來た紫式部が

出て、二人の間の對話となる。そして式部のはからいにて、やがて引合せるからとて暫く石山寺の山莊に姫をもすませることとなる。

さて今攝政關白となつてゐる光源氏は紫式部を思ふて文をやるが返しが無い。打しほれてゐる時、赤染衛門や泉式部等が御見舞に来て、石山寺へ源氏を案内する約束をする。

さて石山寺につき、菊の籠を土産にもちゆき、赤染や泉式部等が紫式部を訪れて、やがて酒宴の後、赤染等が月見に座を離れた後、紫式部が菊の籠に近づいた時、籠は二つに割れて、中から源氏が現れて、驚く紫式部の袖を引とらへて口説く。式部は明石の前のことをほめかして源氏をさけるが、源氏がそれは旅のすさびに過ぎず、誠は紫に心こがるゝ旨をいふと、紫は草子の出来ての後に御心に従ふことを約して、酒宴となる。(やがてしばらく曲節多きクドキの場となる、謡曲がゝつた舞もあることが曲節付によつて知られる。) やがて源氏が「足もとはよろ／＼とよろほひながらしたひ給ふに、式部はつぼに立かくれ、下成るだいをほと／＼とおとづれ給へば内よりも、明石の前はおどり出、源氏にひしといだきつき、わびしきまゝのたはむれとは、なさけなしとのたまひて、すがりついてなげかるゝ」。源氏は他の人々にすゝめられて、他を思ひ切り、明石を「二世も三世もよもつきじ萬世までの酒をのめ共かはらじ秋の夜の其さかつきも取々の手に手を取くみ夫婦の人みたちに歸らせ給ひける」。

第六 御門より紫式部へ草子の件についての使が来たのは、丁度源氏が明石と共に都へ歸らうとする時であつたので、紫式部は草子を携へて一同と都へのぼる。

やがて御前にて草子を披露され、式部は佛ぼさつのさいらいかたまでいはれる名譽をになふ。

【解説】 『源氏物語』に題材を取り、鬚黒大將は我が戀してゐる紫式部を、光源氏が戀してゐると知つて、源氏を亡ぼさんとして成らず、遂に譏奏して、源氏を明石に貶謫の身としてしまふ。源氏はその間に、入道の娘明石の前と契る。けれども源氏は其後攝政の職を與へられて都に歸り、暫く忘れかけてゐた紫式部に對する戀を再燃せしめて、赤染衛門等の取なしで、石山寺に紫式部を口説きにゆく。さて石山寺にて、源氏が紫式部に執念くまはつてゐる折しも、其處に紫式部の謀によつて、隠れてゐた明石の前は飛出して、源氏に對して妬ごとをのべる。源氏も今は人々に面目なく、いよ／＼明石の前と深き契を結ぶことになるのであるが、その間紫式部は源氏物語の草子を編むことに苦心し、久しく石山寺にかくれてゐることになつてをり、丁度源氏が明石の前をつれて都に歸る時、完成した物語を叡覽に供することになつて、いたく御感を蒙るといふのである。

袖鏡の題は、第一段に於て、御門が春日明神へ御參詣の際、變化が現れたのを、源氏の臣是光が討つて、その手から名鏡を奪ひとつたことから出てゐるのであらう。第四段に於て、明石の前が須磨から石山寺まで道行をするのはいととして、その邊りを紫式部と明石の前とが、掛合で語ることになつてゐるのは、頗る讀者の頭を混乱させるのである。混乱させるといへば、光源氏が源氏物語の中の主人公であるくせに、それが現實の人として作者たる紫式部を戀することに仕組まれてゐるので、動もすれば錯覺を起されがちであり、而もその光源氏が西宮の左大臣高明だといふのだから、頗る變な氣がするのである。それにしても第五段で菊花の籠が割れて光源氏が現れる處は、如何にも人形芝居らしい感を起さしめるが、演出上からいふと、糸操ばかりでなく機巧仕掛も用ひられてゐるやうである。そして場面の變化は頗るまづ、全く演劇的統一がないといつていゝと思ふ。

【出處・原據】 矢張『源氏物語』が原據であることは疑ないが、源氏が明石の前を口説くあたりは『十二段草子』の應用である。そしてこの曲、原據は加賀掾の正本『源氏供養』である。

○鹽 竈 大 臣

【體裁】 古綴文庫藏本。題簽も前附もなく、八行五十二丁。内題に以上の如くあり、柱に「融」、奥にも「融卷之終」とあり、奥附に木下甚右衛門刊。帝國圖書館藏本は九行本にて、前附も奥附もなく、版元太夫など一切なし。

【太夫・刊年】 奥附に土佐少掾橋正勝の名があるが、刊年は見えぬ。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句あり、第二段に「染色づくし」、第四段に道行、第六段に「塩釜名所づくし」がある。

第一「扱も其後おさまる國や四つのうみ、みつしほがまのなにしあふ、とほるのおとよと世にたかく聞えさせ給ひしは……」
曲節付の主なるものは

シナル、切ル、シツメ、色クドキ、三ツ引、サシムスビ、色詞、リヨ、サイツメ、モロナヤシ、下拍子、サバナミフシ、引取ナゲ、玉ノフシ、片タフシ、シテ、ワキ、ツレ、ツナギ

の如きで、他の曲に比して、曲節付の数が少く、割合早期の曲かと思はれる。

【梗概】 第一 河原左大臣源融は後見折風、松おさの二人をつれて、毎年の吉例として加茂に詣でる。檢非違使の一人物部宿禰春主といふは、大酒家の好色者で、上加茂の神職松葉太夫の乙姫ねのびに思ひをかけてゐるが、なか／＼離かぬ爲、種々手だてを盡してゐる。

嘗て葵祭にて、十六七の巫子姿の子の日は、融も參詣の時、大江のおんどを見そめて忘れられず心を碎いてゐる。彼女の姉は中宮に仕へてをり、融と深き譯ある仲の事として、融は大江の音人にあはせると約し、大江への文を預り歸る。先程から隠れて様子を見てゐた春主は此時飛出して子の日を口説くが、女は振切つて逃げゆく。春主は怒つて更に悪計をめぐらす。

青柳は妹子の日が融と親しむと、春主から告げられて腹を立てゐる所へ、子の日がたづねてゆく。子の日は融が案内して、今宵大江にあはせるとの事待つてゐる。青柳はかくとは知らず、子の日の心をためすべく融に扮して出かける。そして問答の後、偽つて音人をば斬つたといふと、子の日は夫の敵といつて青柳に斬つける。折柄春主が當番の事として、子の日を縛らせる。やがて融大臣と音人が車寄に近づいて見ると、青柳は子の日に斬られてゐる。そして音人と子の日の仲を知らず、春主の讒によつて、大臣と子の日が密會するときいて、疑心から飛んだ禍を作り出したと青柳は懺悔し、妹を恨まず、大臣を疑つたことを謝して死ぬ。春主は圖々しくも、子の日をわが家へ引立てようとするが、折風に打たれて逃歸る。

第二 出羽の羽黒山に、れいぜん坊とて行法尊き先達がある。法印が都の靈地を廻りて後、熊野について夢まつ夕、ある男女が互に刃で刺違へんとするを見る時、遮つて聞くと、二人は大江の音人と子の日にて、融の大臣の青柳に對する悲をいやさせようとして、似た女もがなと捜し求めたが、見當らず、氣の毒でたまらぬから死ぬのだといふ。それをきくと、法師は繪姿をかりて見て、塩釜の浦まがきの長者の一人娘うてなの姫は青柳に生寫しだとして、幸

今京に上つてゐるから、それを大臣に見せたい、乃ち一條室町染殿やの吉澤が知邊故、これを頼つて姫を見せようと約束する。

さて融が染屋にて待つてゐると、うてなの姫は来て、「忍ぶもぢずりに増る色あらばあたにかまはず」買はうといふので、娘ざかりの二人が出て、染出して京と東の色くらべをして見せる。「まづ初春の空色に咲や花色はなになく、鶯染のこゑ上て、人に春をやゆづりぞめ、風に、しなへてたよたと、めしたすがたの柳ぞめ、……」(染色づくしの節事)。見てゐると、大臣も思ひ亂れた姿にて「みちのくの忍ぶもぢずり誰ゆへにみだれそめにし我ならなくに」と詠する。姫は此歌をきくと心を引かれる。その時物部春主が二十騎ばかりで門前に来て、高位高官の大臣が、かゝる所へ來ての放埒の振舞、許しかたいとの勅を受けて、討取るべき所、都を立のかば助けてやるといふ。僞勅使用をいふかとばかり、大臣の部下折風が斬つてかゝり、雙方争つてゐる間に、うてなの前は驚いてみちのくへ逃げ歸る。融もいさめられて姿をかくす。(此間法印の活躍がめざましき。)

第三 融の大臣はうてなの前の姿が忘れられず、塩釜に來て、汐汲人に交りて、長者につかへて、名を桂と呼んでゐる。一日白河殿から姫をくれよとの使が來ると、姫の兄郡司景久は喜んで承諾するが、それをきいた姫は尼になつてもいやといつて斷はる。大臣もまた姫の心が第一ぞと、横から口を出す。やがて大臣は今日しも青柳の命日なので、濱邊へ出て繪姿を出して昔を忍び、轉寢の夢に青柳の幻に遇つて物語つてゐる處へ、うてなの前は來て、大臣に近づき、京の染屋にて見た歌の主ならずやといふ。さていよくさうとわかると、姫の結ばれた心も打とけ、互に戀する身とはなつたが、その儘此地に留まるべくもなければとて、姫の望むまゝに、漁船に乗つて都へ落ちようとす

る。

第四 長者の館では、姫の姿も桂も見えぬといふので、大捜しをすると、濱邊に姫が一人居る。白狀をせまるが、何の答もせぬので、松の木に縛りつけて桂をさがす。さて姫と大臣とは苦屋の中から此有様を見て悲しみ、縛られた女に近づいて禮をいはうとすると、それは青柳の繪像である。結ぶの佛とならうといつた夢の中の青柳の言葉を思ひ出して、感謝しつゝ、陸路を手に手を取つて逃げ出す。(道行の文)「追手ときけばつらけれど、風は追手を松が島、しまなく千鳥とりだにまで、妻よびかはす浪枕、戀せぬあまのぬれごろも、いかにほすてふ沖の石……美濃の國にぞ着給ふ」。

第五 弘仁九年の春、疫癘が流行して大赦が行はれ、大江晋人も歸京したが、融の行衛がわからぬといふので、勅命によつて晋人は心當りの奥州に向ふ。まがきの長者は姫をさがす折柄、れいぜん坊に遇つて、融の素性を聞き、恐入つて、姫の兄郡司景久が、法印と共に、大臣の後を追ふ。勅使大江と郡司景久の一行は美濃にてぶつかり、河原の左大臣の事を語り、雙方名のる。そこへ木曾路の方より大臣と姫とが春主に追かけられて來る。二人を助けて、景久法印は春主を討取らうとする。その間に春主は驛にて馬子の衣を奪取り、馬で逃げる。其後へかけつけた景久法印等との間に、一騒動あつて、馬子が融の部下折風であるとわかると、一同は春主のあとを追うて近道され遂に春主を捕へて高手こ手に縛める。

第六 弘仁十三年九月上旬、大江晋人につれられて、河原左大臣は姫と共に參内し、前官に復し、姫は正五位を授けられる。その後春主を大臣に賜ひ、やがて奥州の風景の讚美の後、「都六條河原の院に、塩釜をうつさせ、みちの

くの汐きを呼びのぼせ、なには津御津の浦よりうしほをはこばせ、しほやくあまのからきわざ叡覽に供へ奉る」とこととなり、御幸がある。「月もはや出塩になりてしほがまのうらみの袖を今こゝにきてみよかしのやさしくも、うつす名所のあま衣……」と塩釜名所物語をする。「千秋萬歳めでたしときせん上下おしなべてみなあほがぬものこそなかりけれ」。

【解説】 檢非違使の一人物部春主が、上加茂神職の娘子の日を横領せんとしたことから、其たくらみに乗せられて、子の日は姉の青柳を殺す。河原左大臣融は、戀人青柳を失ふて、嘆のあまり似た女をと願ひ、塩釜のまがきの長者の娘うてなの前に憧れて、密に汐汲となつて長者の家仕へてゐる中に、姫を奪つて都へ逃出す。その間に融は都へ迎へられる事となり、萬事が明かになり、春主は捕へられ、融は昔の榮華に歸り、六條の邸に塩釜の趣を移して叡覽に供へるといふのである。河原左大臣の驕奢な生活振を、妻さがしと結びつけ、更に春主の美人横領と組合せたもので、塩釜の名所を都に移したといふこと以外に、別に取たてていふ程のことはない。

【原據】 謡曲『融』を原據としたもので、第六段の後半には、謡曲の詞章が殆どその儘借られてゐる。近松作『融大臣』とも關係がある。

○桓 武 天 皇

【體裁】 京都帝國大學圖書館寄託古梓堂文庫藏本。小形十六行十六丁半、繪兩面六。大傳馬町正本屋喜右衛門板。柱に「安」とある。

【太夫・刊年】 江戸版で奥に天下一土佐掾とあるから、之は江戸土佐少掾の正本であり、刊記はないが、天下一の文字があり、原曲『平安城都遷』が延寶九年前のものだから、結局天和貞享頃までのものであらう。

【形式】 六段曲にて、各段首尾に形式句があり、大序は「扱も其後」で始まる。

【近松の原作】 近松の作だといはれる天和元年前の刊である加賀掾正本『平安城』の壓縮改作にて、初段及び二段目は近松の第一段を改作、三段目は近松の第二段、四段目は近松の第三段、五段目は近松の第四段をとり、六段目は最初は近松の第五段と同様だが、あとを改作し、神おろし、加持の邊りに至つて、大分文章が異つてゐる。

【梗概】 奈良の都を遷されんとするに方り、長岡に内裏が成ると、二宮には悪臣と共に内裏を擅にし給ふ。其間帝には忠臣忠國の伊吹の邸に隠れ給ふ。一日御母後の宮が一宮の御殿に臨み、和議を提案し給ふが、二宮はおきゝ入れなき爲堅牢地神の罰にて滅び給ひ、平安遷都が無事に行はれたといふ筋で、一種のお家騒動風のものである。



「桓 武 天 皇」 (藏 大 帝 都 京)

【原據・影響】 『惟喬惟仁位諍』風のもので『古淨瑠璃の新研究』延寶享保篇参照。

△寛文古書塚町葺屋町芝居の圖

此繪は、『聲曲類纂』微の卷にあり、三九一頁の『淺草觀音緣起』の條に述べた繪で、土佐少掾の操芝居である。



「圖居芝掾佐土」 戶江



(載所・纂類曲聲)

がありさうに思はれ(三九六頁)、興味をそゝる繪である。

入口の櫓幕には、「天下第一」の字を中に、右に「市之丞」、左に「虎

之助」とあり、この「虎之助」が、土佐少掾であることは、貞享二年刊『野郎三座記』(役者評判記)所載「塚町圖」によつて考へられる。

さてこの寛文の土佐少掾の芝居圖なるものをよく見ると、入口の右に「三月十八日大ま」とあり、左側には、『淺草觀音の本地』『金りう山……』『姥……』といふ三つの看板がかけてある。その『淺草觀

音の本地』が、土佐掾の『淺草觀音緣起』と關係はあらうが、同物かは明かでない。若し同物とすると、『淺草觀音緣起』の上演年代は相當に溯り、『聲曲類纂』所記の如く、寛文期のものとなるかも知れぬ。

然しさうなると之と『三世二河白道』との關係が妙になつて來るのであつて、この意味から見ると元來の『淺草觀音の本地』は古くても、

『淺草觀音緣起』はそれに、後に手を入れたものかと思はれる。兎に角看板の「姥」の字などは、「一つ家」若しくは「姥が池」などと縁

江戸土佐淨瑠璃解題 (一五)

○源氏六條通

【體裁】 帝國圖書館藏本。半紙形八行五十六丁。前附が残つて、それとにかく刊記もある。木下甚右衛門刊。『新群書類從』第五にも收む。

【太夫・刊年】 前附に土佐少掾橋正勝の名と、例の寶永五戊子初秋上旬の刊記もある。

【形式】 六段曲、各段首尾に形式句がある。

第一「扱も其後、夫天下に名を得ては、徳あれば四海にみち、あやまちあれば人こそぞつて、蝕のごとくに是を見る、さるによつてくんしはたゞ、其ひとりをつつしむとや……」

【梗概】 第一 六十六代の一條院の御時、「延喜帝の御子、前の中書王の御舍弟に、一世の源氏を賜はり光源氏と申せしは、王道ぼさの其爲に、人臣となり給ひ、西の宮の左大臣、高明公と申しつゝ、才智すぐれて美男なれば官女も下女も慕ふ。又「右近衛の大將藤原の道包公」は、關白の子にて、髭黒の大將といひ、逆心の企深く、光源氏とはあはぬ。

永延元年十二月、左近の櫻が咲乱れたので、主上が諸卿と御評定の折、攝州住吉の神職津守の太夫國夏は、姫松の

下に石の唐櫃があり、其上に「二人一ト、一人入王」の八字があつたと奏する。髭黒大將は、之を「天下大全」と讀んで、寶祚長久のしるしだといふと、光源氏は之を判じて、「二人下つて一人、王に入と考へ候、二人とは仙洞と當ぎんの御事、一人とは逆臣なり、王に入とは王城へ、皇宮に攻入る大凶事……朝敵間近に候はん」といふ。みかどは御心配の餘り、高明、道包に頼光を具して調べしめられる。

住吉姫松の下には、賤の男が姉と共に居て、高砂の尾上松と此松とは相生のやうだと、貫之が古今の序に述べてから、一本でも相生の松といふ云はれなどを語つてゐる所へ、高明道包頼光等がつく。

やがて頼光が石の唐櫃に近づいて、蓋をあけさせようとする、賤の姉弟は、力を見て頂いて仕へたいとて、持たる物の具を花やかに着し、唐櫃の蓋を開かうとするが、此時頼光は、「あの鎧は平親王が重寶、天地くやうにおどし立て、ばらもんと名つけ祕藏」せしもの、屹度一類だらうから白状せよといふと、姉は「妾は平親王正門が娘、加藏の尼と云者なり、是なるわつばは、正門が子」で弟だと云つて、自分が生きて居ては弟の邪魔ならんと叫んで、九萬八千の軍神の血祭になるべく、懐劍で自害する。と弟は此時始めて自分の素性を知り、平太郎良門と名乗つて、父の願を達せんと志し、頼光を眼前の姉の仇として討たうとする。其處へ九尺計の童形で、市原にすむ鬼同丸が来て、良門に力を添へようとする。其時四天王第一番の坂田公時が飛來つて、大松をぬいて振廻すと、良門鬼同丸は後をも見ず逃る。

第二 頼光は、一同が無事に都に歸れたのは、公時が功なりとて喜び、四天王をして、鬼同丸良門をさがさせる。その反對に髭黒大將は、公時を恨み、無三坊、荒波入道、雲龍軒、雪道齋の四天王を召して相談し、先づ頼光を招い

て毒酒で斃し、ついで四天王を失はふと圖る。

かくて明後日を期して頼光を招き、入海と云ふ大盃に毒酒をついで馳走せんとすると、「白ふのたか舞ひ來りて」妨げ、自ら酒をのんで死ぬ。此時縁下から敵二人が飛出すが、叩きつぶされる。渡邊綱は頼光をつれて悠々と歸る。後から髭黒の四天王等は追かけて来て、雙方の四天王の戦となり、公時は捕へられて敵陣に引かれるが、其途中に、あばれて敵の四天王を滅す。此時、關白の使が来て兩軍を和睦せしめる。

第三 光源氏が川邊の樓臺にて雪見をしてゐると、六條の遊女明石が小舟に乗つて側に来り、源氏を舟に乗せて六條の色里につき、揚屋あづま屋に入る。そこへまた明石と肩をならべる名に高き須磨浦が近づいて、源氏の美しさに見とれてゐる。やがて「兩君は左右により、盃數も重なりて、明石は連理須磨浦は、比翼の中と御たはぶれ、共に身請と宜へば茶屋も悦びめでたしと、尙波かはす盃に時をうつしておはします」折、平良門は人形廻しに扮して来て、「げにや日にそひ月にまし里ははんじやう君たちもなを全盛のいやましに……」と、暫く歌ふ中に、遂に逆心を忘れて、須磨浦の美に迷ひ、左の手の小指を切つて須磨浦に投げつけ、我が心の底を見せた爲に、折柄遊びに来て、源氏を警護してゐた四天王の二人貞光末武が良門を妨げる。乃ち良門は自己の失敗を白状し、陰謀を物語りつゝ、締められた大門を飛越えて行衛をくらます。(人形廻しの處は節事になつてゐる。)

第四 源氏の君高明は日夜酒色に耽つてゐると悪評が立つと、以ての外の事と逆鱗を蒙り、太宰權帥として九州へ流される。

之を知ると髭黒大將は大に喜び、我大望を遂ぐるは此時と喜んでゐる折、黒雲の中より市原の強童鬼同丸が来て、

大將に味方するから來れといつて、不思議の車をおいて去る。

明石須磨浦の二女は、光源氏戀しさに狂氣となり、「明石は上衣のすそをおり羽織にまなぶ立姿戀しき殿の、歩みぶり、とふみこうふみふり出す其御姿みるやうの、風情に須磨浦うれしげに吸出す煙草あかし手に取顔と顔互に見合こはいかになふうつゝなやうつゝなき我がのけしきはかなやな爰はいづくぞ戀の山、ふもとにつゞく市原や……」と迷ひ出て、不思議の車に乗つて走りゆく髭黒大將に出遇ひ、とがめられて、戀しき人の物語をすると、大將は忽ち色に迷ふて、二女を車に乗せて行かうとする。此時坂田會同丸公時が武者修行の途中、此様を見つけて、大將をからかひ、頼光の館へ車を引いてゆかうとする。そこへ鬼同丸が飛來つて妨げようとするが、公時は鬼同丸を叩き殺して其首を取る。その間に大將も遊女達も姿を消す。

第五 柏木屋の長順が須磨浦明石の二遊君をさがし歩いて、やつと連れ歸ると、再び「三千の遊君色を失ふ計」に繁昌する。その中に段と云ふ大臣が遊びに來る。(彼は「平親王將門の子平太郎良門のことで、名を改めて段の一條軒といつて六條の色里に入つてゐる)。一日彼が來て酒事(廓の趣が盛に描き出されてゐる)の後に、酔うて寝につくと、頼光の四天王綱等は、「源家の御あだ、王道の大敵」として、良門を夜討にせんとして入込む。須磨浦明石の二遊君も、勢を描へて、光源氏の仇良門を、四天王より先に討つてかゝる。「父將門が軍法にて我に似たる若者を六人迄一やうにかけもはなさず召つれ」た良門を、遊君達は一人々々討つて、四番まで片づけた時、公時が飛出して良門と組んで首を討落し、四人の女郎をつれて頼光の館に引上げる。

第六 其後髭黒の右大將道包が大軍を以て丹後笹山にこもるときいて、頼光は三萬騎を以て追討を命ぜられる。戰

の後、髭黒を引捕へ、頼光は歸洛する。諸卿の訴にて、光源氏は召還される。髭黒は日向のあがたへ流され、上總介頼光は河内國を、平井保正は丹波を、其他の四天王も夫々賞せられる。

【解説】 元祿頃でも割合に古いものか、外題に似ず、時代味の可なり多いものである。第一段は、平親王の子良門を住吉に發見して、公時が追拂ふ場。第二段は、逆心ある髭黒右大將が頼光を招いて、毒殺せんとして失敗する場。第三段は、光源氏が遊君明石に誘はれて、六條の色里に遊んでゐる所へ、良門が光源氏を討たうとして、人形廻として來て、四天王に討たれんとする所。第四段は、髭黒大將が市原にて須磨浦明石の二遊君に戯れんとする時、公時に見つけられて惱まされる場。第五段は、良門が六條にて、明石須磨浦を招いて遊び、四天王及び遊君に討滅される場。第六段は笹山城にて髭黒大將が叛逆して討破られる場。

要するに一種の叛逆物的勢力争物とでもいふべきものであつて、割合に筋の明かな、而も統一のない、外題に似合はず面白味の少い曲である。成程、現實味も廓情調も相當に挿入されてはゐるが、光源氏中心とは思へぬほど、源氏のこととは描かれてをらぬものである。その爲か『續源氏』の方には源氏五十四帖の名でもあげられてゐる。

【原據】 第三段の、頼光を招いて毒酒を以て討たうとするとか、公時が出て頼光をつれ歸るとか、あとで公時が敵を平げる趣向などは、寛文期の作に於て屢々繰返されたものである。又髭黒大將は、清原右大將を思はせるものがあるが、光源氏と須磨浦明石の二遊君との關係とか、彼が美男であつたなどといふ點をのぞいては、『源氏物語』との關係は薄いものである。

○六條 續源氏

【體裁】 帝國圖書館藏本。並に古鞞文庫藏。後者には、上記の如き題簽外題があり、内題は唯『續源氏』とある。半紙形八行三十八丁。別に前附及奥附がある。奥に木下甚右衛門板。

【太夫・刊年】 前附に土佐少掾橋正勝と、例の寶永五戊子初秋上旬の二行はあるが、實際の刊年は明かでない。

【形式・曲節付】 四段曲。帝國圖書館本も古鞞本も凡て四段曲である。普通の六段曲に比べて珍らしいともいへるが、實は下らぬことを書疲れて止めたといふ位の曲である。つまり前篇があるから四段で止めたのであらう。

源氏五十四帖の卷名づくしが節事位で、他にこれぞといふ節事はなく。

第一「扱も其後、抑一條の院のこうぐうをば上東門院ほうしと申奉り……」

曲尾「ぜんだいまもんの次第やと貴せん上下安詫皆かんせぬ者社無覺」

曲節付の主なるものをあげる

スエムスビ、アゲムスビ、サツマウツリ、ギン上ゲ、ギンノリ、サシ、下ノリ、アミト、ユリモトシ、イロ三ツ引、キンヒロイ、下セメ、タマノ、ヘイケギン、アイノテ、間、ハヤ三重、一ツ三重、イロシナリ、サイツメ、イロツメ、片ヲロシ、フシウツリ、レイセイ三重ハル、クドキ、ナヤシ、トナセ、本地、本フシヤツシ、ウタウツリ、二ツ三重、サバナミ、本フシ引取、片タ、タイナイ、ハコビ、ウタヤツシ、アフミギン、二上リ、カンゴトメ、平詞、トメ、ギン引取、ハヤメ、ホウカツウ、ノリミ、ウタイクル、シツメテ、チクラウタ、

ヲドリ、小ムスビ、カ、ル、マイ地、ナガシ、ユリステ、ツキカヘシ

の如く、非常に數が多く、此外にも、之等の變化は随分あり、曲節上に様々工夫をこらしたものと思はれる。

【梗概】 第一 一條院の皇后を上東門院と申奉り、道長の姫君にて、赤染等あまたの官女かしづくが、當今の御めのと式部の前といふを紫式部として召され、珍らしき草子を作れと仰せあると、紫式部は石山寺に引籠りて創作し、草子が出来上つて献上すると、御ほめあつて源氏物語と名づけられる。

頼光が相馬の良門を討つて後、一國を三つに切つて、其一を手に入れた夢を見たといふ。保昌は占ふて、刀の字を三つ書くと劔といふ字になる。三つに切つて一を得るはめでたしといふので、三條小鍛冶宗近に命じて刀を打たしめる。宗近は稻荷山に仕事場を設けて、劍の徳をたへ、懸命に細工をし、出来上ると、小狐丸と銘を打つ。其時天が曇つて、忽然女性が現れ、平親王の娘の靈魂だといひ、今劍が成就せば我本懐の妨だから劍を渡せといふ。そして劍製作の奉行の渡邊綱を捕へて空に上る。渡邊は雲中にて鬼女の腕を切つて追拂ふ。

第二 九州に流された髭黒大將は一日漁翁に遇つて、其後の都の有様や、遊君明石は功によつて明石郡を、須磨浦は須磨を給はつた話まで聞き、通力をもどせとて、返魄香を與へられる。その香を焚くと、明石須磨浦の姿が現はれる。大將は二女に取つき、逃げるを追つて都に上り、光源氏が物語五十四帖をながめ、須磨浦が琴をひき、明石が一節切を吹くのをちつと聞いてゐる。かくて「いづれ戀路はいな物よあふて思ひのはれはせで、なを立かゝる桐つぼをたれ清めよとはゝき木や、ちり／＼草のつゆの間も忘れず思ふやつがれが心は君にうつせみのうきなを人は夕がほ……みじろき夢の浮橋を渡らぬ程こそ命なれ」と、五十四帖の卷名づくしが終つて、源氏は燈籠を見てゐると、落雷が

あつて庭前の大木に髭黒大將が落ち、二女を強ひて引立てようとする。此時保昌が近づいて、大將は眞二つに切られると思つて、夢がさめる。漁翁はやがて大將を頼親に案内すると、良門の亡魂と共に舟にのせて尼ヶ崎に送る。

第三 名劍が成ると、頼光はそれを八幡山に奉納し、稻荷の加護を謝してゐると、其實稻荷の神體である揚由の娘樹花女といふものが天降り、弓矢の謂れを説いて、揚由の矢を與へる。

其頃宋英宗皇帝の使司馬公孫義が來朝し、頼親が警護の役となる。宋使は大象二匹と、李方君といふ宋朝第一の美人である名醫を奉る。乃ち大内の智恵ある官女を李方君と對談せしめる事となり、紫式部がそれに撰ばれる。兩人の間に、支那の故事について色々對談があつた後、曲馬が行はれ、大象が引出され、時を見て、宋使は頼親と示し合せて、象を驅りたてる。此時公時が飛びついて鼻骨を打つけると、象は目をむいて死ぬ。残る一匹の象も力まかせに二つに引裂く。

第四 丹波の國司の一人姫小式部が小倉山にて紅葉狩をしてゐる所へ、三條の小鍛冶宗近が近づいてうつとりとなる時、頼親は狐狩の一行にはぐれて此處に來り、日比戀する小式部を見ると、厚かましく濡れかけて手なづけ酔ふてしまふ。そこへ丹波守保正が近よつて見ると、宗近が出て來て、頼親の陰謀を物語る。陰謀といふのは、頼親が宋使と一味し、名醫李方君の指圖にて毒藥を調合し、頼光始め四天王を毒殺するに方つて、自分も毒酒の爲に斃れてはと、毒消として白狐の膽を得ようとして、今狐狩をさせてゐる最中だと語り、頼光四天王に用心をすゝめ、白狐を助けよといつて、自分が實は追はれてゐる牡の白狐たることを證明し、再び宗近の姿に戻り、保正に導かれて我が故里に歸る。さて牡狐が浮田の森へ歸つた時、頼親は姫を負うて其處まで來るが、其時姫は牝の白狐となり、頼親が小式

部を戀してゐるを幸ひ、化けて我夫の牡狐を助けたのだといふ。そこへ頼親の叔父平井保正が來て頼親の狐狩をとめようとする、頼親はこれも狐の化けたのかといつて、郎等に討つてかゝらせる。けれども遂に眞の保正の爲に散々に討拂はれる。

【解説】 頗る煩雜な筋であるが、今一度略述すると、第一段は紫式部が源氏物語を創作すること、頼光が夢によつて三條小鍛冶宗近に名劍小狐丸を作らせると、平良門の娘の亡魂が奪ひに來て渡邊綱に滅される事。第二段は前篇にあつた明石須磨浦二女との源氏の生活を、髭黒大將が夢に見る所で、此處に源氏五十四帖の卷名づくしがある。第三段は宋使の來朝、それと同時に名女醫の献納、ついで頼親が宋使と組んで象をあげさせるが、公時が象を打殺すこと。第四段は狐が頼親の陰謀を暴露し、保昌に討たしめる趣。かうあげて見ると、如何にも無統一な、聯絡のない、雜然として取締もない、叛逆物の堆積で、前編に比べて一層愚曲であることが明瞭であらうと思はれる。而もその愚曲を面白く見せようとして、わざ／＼不明瞭な文章で書かれてゐることは、愛想がつきるほどである。

尙『續源氏』といつても、源氏物語とも、又内容的に前篇とも、それほど密接な關係はない。

【原據】 紫式部が源氏物語創作のことは、既に加賀掾正本『源氏供養』などに前例があり、源氏五十四帖の卷名をあげた位が『源氏物語』によつたと見得るのみで、他はたあいのない仕組である。尤も象の献納と、象引のことは元祿十三年三月江戸山村座興行の狂言『薄雪今中將姫』を最初に、ついで元祿十四年正月興行の狂言『傾城王昭君』など先例がある。従て本曲は寶永頃のものか。

○風流和田酒盛

【體裁】 帝國圖書館藏本。半紙形八行五十一丁。奥附に木下甚右衛門刊とある。柱には「和田風流」と記す。
【太夫・刊年】 奥附にも前附にも、土佐少掾橋正勝の名が記されてゐるが、刊年は見えぬ。けれども延寶八年刊にて、繪入十五行の半紙形本に和田酒盛があるといはれてゐるから、それが本曲の原本かも知れぬ。
【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句あり、

- 第一「扱も其後、桓武平氏の累葉、和田左衛門吉盛とて、相模の國に名を得たる弓とり一人おはします……」
- 第二「そのうち梶原源太かけすゑはあまりむねんにおもひつゝ、新左衛門つねもりに、つかひを立てせうじつ……」
- 第三「其後大磯の長者は、すけなりの思ひもの、とらごぜんの母なるが、しよきふらひのもてなしに、色よき女數十人、花の如くにかざりたてとひの心をなぐさめて……」
- 第四「其後かくて時刻もほどふれば、よしもりいよ／＼まちなね、あさいなをめて、いかに吉ひで……」
- 第五「其後そがの里にゐたりける弟の五郎時宗は、古井といひし所に、矢のねみがいて居たりしが、あまりねむきに碁はん引よせまくらとして、ゆたかにこそはふしにけれ、かゝる所にしやきやう祐成のおもかげがまくら神に立よと思ひて……」
- 第六「其後あさいなの三郎、引ちぎりたる草摺を、父の前にもちて出、あれに時宗ましますゆへ、御出あれとて引ければ草ずりたまらずきて後……」

曲尾「……兄弟の人々は過し昔の物がたり聞につけても口おしく、長者の坐敷をたちたまひ、ふじ野へ打立給ひけり、千秋萬

歳めでたしときせん上下おしたべてみな、かんぜぬものこそなかりけれ」

【解説】 以上の各段首を引用したことによつても推定出来る如く、全く寛文四年の天下一さつま太夫正本『和田酒盛』を、今少しく修飾したもので、段分の如きも同様である。

和田義盛が大磯の遊女虎を呼んで遊ぼうとするが、曾我十郎を戀人としてゐる虎は和田に近づかぬ。遂に母の長者に強ひられて宴席へ出て、盃を和田にはさゝす十郎にさす。危険を感じた五郎は隣座敷で警戒してゐると、和田の三男朝比奈は、強ひて、五郎を招き入れて、無事に終るといふ大筋であるが、瞬間の劇的興味をねらつたもので、『曾我物語』の一場面である。

【原據】 元來『曾我物語』卷六により、幸若舞曲『和田酒盛』を殆どその儘とつたのが、さつま太夫の正本である。

【影響】 元祿七年頃大阪村山平十郎座で、『和田風流兄弟鑑』が上演されてゐる外の事は、拙著『古淨瑠璃新研究 慶長寛文篇』参照。

○中 將 姫

【體裁】 東京帝大舊圖書館藏本にて表紙に土佐節の語あり、八行六段曲、各段首に形式句があつた。

【梗概】 内容は寛文期の『中將姫御本地』と同様に、繼母の繼子虐待であつたことと思はれる。

古淨瑠璃の新研究完成の所感

まだ中學生になるやならずの頃から、一般社會生活の裏面に目がつき出し、人間の社會的地位といふものや、人間の眞のゑらさといふものが如何なるものであり、眞實の生活、人間の本質的なものといふやうなことに心を付け出した私は、何も分らないくせに、社會的公的生活に向つて突進することをさせて、何時か正しく自由な生活の出来る文學の道に歩みを運んでゐた。

そして最初に私が飛込んだのが外國文學の研究であつた。その中に近代劇の研究へと歩みを進めて行つた。それは私をして遂に新劇の研究所を設立せしめる事となつた。と同時に私は戯曲の創作に心を傾けたのであつたが、其處に自己の能力の貧弱といふこと、作品發表の方法の困難といふ二大障害を發見した私は、ふとした機會から、久しい間の憧れと謎であつた近松の研究に専心することゝなつた。かうして私は、長い間かゝつて集めた横文字の本の大部分を賣拂つて、翻然轉向して國文學界に入門し、全く小學の一年から繰返すつもりで、有ゆる恥も辞せず、如何なる誹謗罵言にも眼を閉ぢ耳をふたいで、門外漢の盲の垣のぞきを續けた。そして八年ばかりかゝつて纏めあげたのが前著『近松人形淨瑠璃の研究』であつた。

けれども近松を知る爲に、近松だけのぞいたのでは眞の近松はわからない。あの近松といふ大きな山が成るには、何かの筋路がなければならぬ。一日にして近松が出来る筈はない。けれども誰しもまだ其筋路を順序を追うて、根氣よく研究した人は一人もない。それでゐる近松といふ大きな山は色々云々されてゐる。自分で近松をのぞいて見て、不可解を感じ、世間がその不可解を解かうとしないと、幾らその仕事がつまらぬ仕事でも、下らぬ仕事でもいゝから、山を移さうとする愚公のつもりで、自分から局にあたることにしよう。愈々荊蕀を開いて進む羊飼となつて見よう。斯う決心して、國文學史上の空隙である古淨瑠璃の研究に志したのは、前著近松研究の成つた春のことであつた。

最初の私の目的は五六百頁のものとして、古淨瑠璃の全貌を描き出さうとすることであつた。各正本の研究の如きは、極めて大體に片づけ、殘存全正本で百頁も充せば満足するつもりであつた。ところが實際に取かゝつて見ると、それでは書誌學的記述も充分にすることが出来ず、再び他の人が同じ事を繰返さなければなくなる損がある。かう思ふと、次第に考が變つて、せめて次の研究者の爲に、無駄な勞力でも省かうとして、正本研究も出来るだけ精しくすることに途中から方針をかへた。かうして段々手は廣がる、慾は出る。あの風本といはれる細字の假名書の本に對して、廓大鏡をもつて、かすれた文字を判讀しつゝ、どんなにか苦闘を續けたことであらう。圖書館などでは、閉館の時間は迫る、字はわからない、怪しげな文章なるが爲に筋は理解出来ない、のぼせ上つて眼は見えなくなる、涙がたら／＼と流れる、卒倒でもしさうな氣持になつたことが幾度あつたか知れない。かうして私は昭和九年の春以來滿五年といふもの、夜も晝も文字通りに古淨瑠璃と戦ひつゝけた。教職に費す時間以外は、睡眠時間をのぞいては、そ

の全部を古淨瑠璃の爲に費した。これだけの努力を、若い時に何かの研究に費してゐたとすれば、自分のやうなものでも、もつとくゝゑらくなつてゐるだらうと思ふほど努力した。普通なら、少くも十年はかゝるだらうと思ふほどの事を、四五年で片付けようとして、全精力を傾注した。一日も早く之を完成して、生きてゐる間に本にまとめあげたい。途中で倒れてしまつては、こんな一向に榮えない分野に、二度と手を出す馬鹿者はないかも知れぬ。兎に角大急ぎで纏めてしまいたい、此考を以てひた押しに押し進んで行つた。

二

近親のものはいつた、そんなに勉強して、體をいためては何の役にも立たぬではないか、何も命あつてのことだ、いくら勉強々々といつたとて、體があり命あつての事ではないかと。或知人はいつた、そんな本をこしらへて一體金にでもなるのか、金にも成らぬものをこしらへて、體まで悪くしてどうするといふのだと。けれども私にはこんな言葉は殆ど意味をなさなかつた。私は少しでも長生したいから勉強してゐるのだ、よし自分が死んでも、十年二十年は文化の爲に少しでも盡したいから、命をすて體をすてゝ戦つてゐるのだ。今の私には之を完成することが寧ろ眞に生きる事である、信仰であり、與へられた務であるのだ。兎に角只完成さへすればよいのだ。體なんかどうなつたつていゝのだ。先づ體が、健康が第一といふ理窟も成立つかも知らぬが、今の自分にはこの仕事が第一だ。かう思ふと體が悪くなれば、益々勉強した。かうした態度は果して昨年二月一日の胃潰瘍突發を惹起した。私は直ちに印刷屋にはがきを出して、印刷の取急ぎを依頼した。そして出来上りかけた本の顔をよし見るに至らないで死んだとしても、

働くだけ働いたのだから、喜んで落着いて、安心して眼をつぶらうとした。けれども愈々入院するとなると、私は後の原稿を入れた大鞆を病院に持運ばせた。それを抱いて死ぬつもりであつたのだ。そして三日目には金澤の本屋に向つて、木活字版の『しんらん記』を注文させた。死ぬ前に本の顔でも見たかつたからである。ところが十日もたつと或は直ぐには死なぬかも知れぬといふ氣がして來た。私は乃ち「慶長寛文篇」の序文の校正を急がせた。

その中に主治醫は胃痛だらうといふ疑をもつて、頻りに切開手術の機をねらつてゐた。もし胃痛ときまれば、手術よりも切開よりも、私は先づ仕事を片づけたかつた。私は醫師の目をぬすんでは、こそゝと研究を始めた。けれどもレントゲン検査と、更に胃液検査の結果、幸にして胃痛でないときまると、私は即日退院を願つて歸宅した。それは入院後三十三日目であつた。入院早々に注文した『しんらん記』はやつと二三日後に到着した。愈々休戦期限が切れたので、再び古淨瑠璃との戦闘開始といふ形だ。

三

さうしてゐる中に「慶長寛文篇」は遂に本となつて私の病床に姿を現した。私の血と涙の塊であり、生命の姿であるのだ。私は無言の儘じつと之を見つめた。私の心は幽かに微笑すると同時に、私の慾望は勃然として沸き立つた。今一冊の「延寶享保篇」を何とかして本にしよう、八分がたは既に研究が進んでゐるのだ、あとの二分は印刷をつゞけてゐる中にまとめることにしよう、私はかう決心すると床をぬけ出して、翌日からポツ／＼と机にすがり出した。それから後私は、健康が恢復するにつれて、またしても狂人になつた。人の遊ぶ時期には益々奮闘した。以後退院

してから正に一年、私は其間に、一方に印刷をすゝめつゝ、すつかり後の原稿の片をつけてしまった。夏頃までには「延寶享保篇」も兎に角本になるだらう。

これで私はいつ死んでもいゝと思ふ。生きんが爲の努力といふよりは、むしろ安心して死ねる爲に、人生に對する小さな務を盡したのだ。やつとこれだけでも務を果し得たのは、鈍才の自分にとつては満足である。歡喜である。失つた自分の獨り子との二人前の務としては、あまりにも輕少な仕事であるが、鈍物の老いての後の努力としては精一杯である。これだけ出来れば上等である。今の私にとつて、これだけ纏められただけでも寧ろ不思議である。他人から見ると、あんな下らない仕事をと思はれても、下らない仕事だから自分には出来もし、下らない仕事だから自分がやつたのである。さうさう立派な仕事私などに出来もせぬし、世間からやらせても貰へぬ筈である。

本當に私は名の爲でも利の爲でもなく、只自分に與へられた最後の唯一つの務として、小さな墓を立てるつもりで黙々として努力しただけである。思へばつまらないこの小さな仕事！これが私の最後の唯一つの仕事の成績であるかもしれない。だが私は喜ばしい。喜んで死ねるのだ。私がこれだけ喜んで死ねることを眞に心から喜んでくれるものは、妻乙女があるのみだ。絶えず私を刺戟し、私の爲に努力し、私の健康を憂ひつゝ私の努力を抑制し、私の行く所何處にでも従つて、共にペンをとつて私を助け、校正を續けて私の仕事の進捗を喜んでくれたのだ。

四

私の周囲の人達は「慶長寛文篇」が出来た時にだつて、誰一人慶賀の詞を寄せた者はなかつた。彼等は家を建てた

とか、昇給したとか卒業したとかいふと、わい／＼と騒ぎ立てゝゐるが、私が命がけの仕事が完成しても見も向きもしないのだ。私はハマーントンが『人間交際論』に述べてゐる事を思ひ出さずにはをられぬ。

「知識ある人々は一層他の人々よりも、其縁者の人々に對して不満の感を抱きがちである。知識ある人々は縁者の人々が知的同情と興味をもつてゐてくれたらばと思ふに係らず、縁者にはそれを與へるものが殆んどないからである。……時あつて著者は其近親が、我が著述を讀まないのみか、本を書いたことさへ知らないことに、聊か不快を感じるのである。けれども彼等は他の作者の書いたものでも、同様のものを讀むのであらうか、……彼等は自分達の知つてゐる人間といふ汝と、本の著者たる汝とを差別してゐるのだ、そして本に關しては少しの好奇心も感じないのだ、著書を見なくとも充分汝を知つてゐる、著書は汝が外出の際の晴れ著に過ぎないものだ」と考へてゐるのだ。」

日本の一般人は著書を其人の晴着と考へるよりも、其著述を研究を、食ふための手段か、道樂位にしか考へてゐないのが普通であり、命がけで著述し研究してるといつても、それは嘲笑か罵詈を買ふに過ぎないのである。只金を儲けて贅澤に日常を生活する、それが本當に思想——思想といふほどの價値は勿論ないのだが、實にそれが一般の人々の思想なのである——の全部である人々から、同情と興味を求めようとするのは、無謀なる希望である。充分にそれを心得てゐる私は、近親に向つても、世間に向つても何の求める所はないのである。まして私の仕事の結果に對する毀譽褒貶などは、私にとつては何でもないことである。況んや的外れの批評などに於てをやである。かう考へると私はまた十八世紀の英國の散文作者、詩人、批評家として有名なサミュエル・ジョンソンが始めて完成した辞典『ジョンソン辞典』に於ける序文を思ひ出さずにはゐられない。

「此著述に於て脱瀧の深山があることが發見されたとすれば、反對に之と同時に、同様な深山のこと立派に成就されてゐることを忘れて貰ひたくない。……若し此處に英語が充分に陳列されて居ないとしても、これまで如何なる人力によつても完成されなかつた企圖に失敗したに過ぎないとわかれば、惡意ある批評をして勝誇らしめることはないであらう、……私の仕事は延び／＼になつて、完成を喜ばせてやりたいと思ふ人々の多くは墓に隠れてしまつた。其人々にとつては成功も失敗も今は空虚な音であるに過ぎない。されば私は今冷かなる平靜な心持で此仕事を解散する、毀譽褒貶に對しては何の恐るゝ所も何の希望ももないで」。

素より私の仕事は、始めてジョンソンが作りあげたといふ英語辞典ほど、素晴しく見事なものではない。仕事そのものも、つまらない事であり、又私自分ですら、誠に不満の點の多いものであり、不完全な研究であることを信じてゐるのであるから、頭のいゝ人や、見識の高い人や、優れた知識をもつた若い人々などから見れば、全く物にならないものであるかも知れない。けれども私の鈍才と老年と、健康とを以てし、門外漢としての盲の垣のぞきとしては、今の處で、此二冊を完成したといふことは、私にとつての成功であるといはねばならぬ。徒らに人の後のみを追かけまいとし、單なる羊として黙々として瞑せんよりも、向ふ見すの小さな羊飼たらんとした鈍才としては、これ位の事で蓋し満足して瞑目すべきであらう。それにしてもその成果の如何にも貧弱なるを顧みる時に、さすがに慚愧にたへないのである。

二五九九年三月十二日最も痛ましき憶出の朝

紫 蘭 生

藤十郎と瀧口狂言

古淨瑠璃と歌舞伎劇との關係について調べて見ると、伊原青々園博士編の『京阪歌舞伎年代記』には、延寶四年の條に

今年、京都の繩手芝居にて、角太夫の淨瑠璃をとりて「瀧口」の狂言、藤十郎、半左衛門はきらびやかなる若者にて、齋藤の瀧口には藤十郎、山下（半左衛門）は越中の次郎兵衛、双方互角の狂言、末たのもしき役者と京中の評判。（役者五所世體）と記されてゐる。けれども同記事所載の『歌舞伎』第二年第三號の文には、大分の誤植があるやうであるし、角太夫の『瀧口横笛紅葉之遊覽』といふ正本は、その刊記によると、延寶四年霜月の刊行である。それでゐて藤十郎が同じ延寶四年に『瀧口』の狂言を上演したとすると、それは正本の刊行前に上演されたのであらうか。其頃の淨瑠璃は、操芝居が好評であつた後に、正本として刊行されるのが普通であつたやうであるから、正本刊行前に、歌舞伎劇として上演されたといつたところでは、一向に不都合なことではない。淨瑠璃の操芝居上演が、少くとも正本刊行の一二月前であるべき事が想像されるからである。けれども之に關して『京阪歌舞伎年代記』の編者たる伊原青々園博士は如何なる見解をもつてゐられるであらうか。延寶四年は延寶五年の誤植でもありはせぬかと思つて、改めて伊原博士の示教を仰いだのであつた。それに對して博士が寄せられた回答は誠に親切を極めたものであり、参考になることが多いから、之を轉載させて頂いて、お互に恩恵を蒙ることにならうと思ふ。

拜復 延寶四年に京の繩手芝居にて角太夫の淨るりを取つて瀧口の狂言、阪田藤十郎の瀧口、山下半左衛門の越中の次郎兵衛なりし事は評判記「五所世體」に見え候。

右の繩手芝居が布袋屋座なる事は、同年六月の日附ある例の祇園の繪馬額にて分り候。然る處、藤十郎は同年は萬太夫座（嵐三右衛門座本）にありしこと、評判記「可盃」に有之候。さすれば、同人が布袋屋座即ち繩手芝居へ出てたりとすれば、年度替りの十一月ならねばならず。故に右の瀧口の狂言は、淨るり正本の刊行と同じく、同年十一月と推定仕り候。

右御返事申上候。先月より拙稿の年表を整理中にて、速かに御答への出来る事を悦び候。尙ほ御高著一日も早く出版のほど鶴首仕り居候。早々

三月五日 夜

青々々 園

若月大兄

序に申上候、右に申候繩手芝居は後に宇治加賀掾の芝居となりしを、寶永二年、坂田藤十郎の倅、坂田兵七郎が借りて座本となり、加賀掾の「源氏供養」をカブキの三番つゞきに演じ、その中の卷（夢中の須磨明石の二まきの段）に加賀掾が淨瑠璃を語つて居り候。

かうして藤十郎が『瀧口』の狂言を、京の繩手芝居、即ち布袋屋座で上演したのは、淨瑠璃正本刊行後の延寶五年でなくて、正本刊行と同時の、延寶四年十一月の事と、伊原博士が推定されて見れば、之に對して云々する資格も材料ももつてゐない私は、唯博士の考證を信じて、『瀧口』の淨瑠璃は、それでは正本刊行前に、操芝居に上演され、そ

の興行の成功であつたことを見て、藤十郎は續いて歌舞伎に上演したものと推察するのである。

それから序に博士が追記として述べられてゐるのは、『聲曲類纂』宮下の卷に「源氏供養といへる加賀掾上るり本の口繪」としてあげて、下段に太夫口上の繪があつて、上段に太夫口上の文句としてあげてある次の文、即ち――

▲宇治嘉太夫口上 中の中入より出る

扱和のくさまへお断を申上ます。これにおりますのはかゞのせうでござります。此度坂田兵七郎座本を仕りますに付、此方のしばるを、かしまする様にと、申されましたゆへ、則兵七おや、坂田藤十郎とは、まへよりかゞのせうも、心やすふかたります中、ともかくもと申で、しばるをかしましてござります所に、御ひいきつよふ、はんじやういたし、一入忝なふぞんじます。其お禮のため延引ながら、是迄罷出ましてござります。扱わけて申上ますは、此度の狂言は、源氏くやうを、三ばんつぎにとりくみ、水がらくりに仕ります。此げんじくやうの義へ、かゞのせういぜん、あやつりに仕り、いゑの上るりでござりますゆへ、此所でげんじくやうの、夢中のすまあかしの、二まきの段をかたります……」

の中に見えると同じことを指されてゐるのであると思はれる。

それはそれとして、『瀧口』について思ひ出されるのは『尾陽戲場事始』の寛文八年の條に見られる

尾頭町にて説經操芝居興行

太夫 天満十太夫

ワキ 都右京

小歌 宮屋四郎左衛門

横笛瀧口 善光寺開帳

の記述中の、説経芝居で上演した『横笛瀧口』と、角太夫の曲及び、藤十郎が上演した『瀧口』の狂言との関係である。角太夫はこの説経の曲に影響を受けてゐるとしても、藤十郎の狂言が、角太夫の曲に負うた影響と、此説経に影響された程度とが、明かにされたら面白からうと思ふのである。

近頃の近松物の上演

近松門左衛門といふ日本最大の劇作者、正確にいへば、最大の淨瑠璃作者が、此一二年どんな待遇を受けたかを知りたくて、至極便利に出来てゐる寶塚文藝圖書館の月報の中、昭和十三年二月號と昭和十四年二月號の年表を繰つて見た。そして我劇界に於て、大近松が如何に虐待されてゐるかに驚くと同時に、右の年表乃至月報に、あまりにも誤りが多いので、それを訂正しておく爲と、近松の虐待されぶりを見る爲に、この二年間に上演された近松物と、近松の改作物などをまづ表示して見よう。

△昭和十二度の上演

- 近松物
- | | | | |
|---------|----|---------------|-------|
| 一、傾城反魂香 | 一月 | 新宿第一劇場 | 我當、勘彌 |
| 二、平家女護島 | 四月 | 東京歌舞伎座 | 吉右衛門 |
| 三、出世景清 | 四月 | AK放送 | 幸四郎等 |
| 四、日本振袖始 | 五月 | 帝國ホテル、新義座人形芝居 | |

- 改作物
- | | | | |
|--------------|-----|-----------|-------|
| 五、冥途の飛脚 | 十一月 | 新町演舞場、文樂座 | |
| 一、戀飛脚大和往來 | 一月 | 神戸松竹劇場 | |
| 二、時雨の炬燵 | 二月 | 中座 | 我當、勘彌 |
| 三、夕霧伊左衛門曲輪文章 | 二月 | 文樂座 | |
| 四、會我物語 | 三月 | 御園座 | |
| 五、心中天網島 | 四月 | 東京劇場 | |
| 六、戀女房染分手綱 | 四月 | 文樂座 | |
| 七、戀湊博多諷 | 七月 | 東京歌舞伎座 | 吉右衛門 |

以上を見ても、十二年度に放ける近松物の上演は四五に過ぎず、あとは普通に近松物といはれたり、記されたりしてゐるが、皆改作物で、殊に『天の網島』の如きは原作の名をかりた改作物も改作、最も呪はしい愚作である。そして『時雨の炬燵』と同物なのであり、本當は『天網島時雨炬燵』といふのである。さういへば文樂座で上演する『冥途の飛脚』だとして、下巻は其改作たる『戀飛脚大和往來』からとつたものであるが、まだこれなどは改作物でも上の部である。又『夕霧伊左衛門曲輪文章』の吉田屋の場にしても、近松の『夕霧阿波鳴渡』の改作物であり、『戀女房染分手綱』といつても、よく上演される重の井子別れの場は『丹波興作』の上巻を借りたものであるが、これは原作に最も近いものであるから喜んでいゝ方である。『會我物語』といふのは近松の何をとつたものか知らぬが、五月に菊五郎等が歌舞伎座でやつたといふ『小室節』といふのも、近松の原作では勿論なかつたと思ふ。この外、上記の寶塚

月報には、『傾城阿波鳴門』を近松物としてあるが「傾城」の二字を冠したのは近松の作ではなく、近松のは『夕霧阿波鳴渡』である。勿論『傾城阿波の鳴門』といふ近松の歌舞伎もあるが、それではなからう。又『艶容女舞衣』も近松物としてあるが、あれは近松の知らぬもので、竹本三郎兵衛等の作である。その他『吾妻與五郎壽門松』は近松の『壽門松』とは別物である。けれども『戀湊博多謡』は近松の『博多小女郎浪枕』の改作である。

△昭和十三年度の上演

- | | | | | |
|-------|--------------|-----|---------|-------|
| 一、近松物 | 一、傾城反魂香 | 一月 | 北陽演舞場 | 人形芝居 |
| | 二、輝虎配膳 | 七月 | 名古屋歌舞伎座 | 實川延蔵 |
| | 三、姫山姥 | 七月 | 同右 | |
| | 四、女殺油地獄 | 七月 | 飛行館 | 若草座 |
| | 五、平家女護島 | 八月 | 東京劇場 | 我當、勘彌 |
| 二、改作物 | 一、天網島時雨炬燵 | 一月 | 北陽演舞場 | 文樂人形 |
| | 二、夕霧伊左衛門曲輪文章 | 一月 | 新町演舞場 | 人形芝居 |
| | 三、戀女房染分手綱 | 九月 | 南座 | 菊五郎一座 |
| | 四、戀飛脚大和往來 | 十一月 | 國際劇場 | 猿之助一座 |

今日人形淨瑠璃で上演する『傾城反魂香』といつても、結局之を改作して『名筆傾城鑑』に取入れられた「吃又平」の一節を上演するに過ぎず、「名筆吃又平」又は「吃又」といふのと同じことである。『輝虎配膳』は『川中島

合戦』の一節で、『姫山姥』といふのは、八重桐の喋りの場のことである。『平家女護島』といふのは、鬼界が島の俊寛の場のことで、『女殺油地獄』が若草座なるものによつて上演されたとしても、それは恐らく改作に過ぎぬものであらう。あれを原作に近く上演するやうな殊勝なものは、今日の日本に夢想だも出来ぬことである。

かうして年々改作物か、特殊な場面をとつて、四五篇づゝ上演したといつても、大抵同じやうな繰返に過ぎず、眞に近松物の傑れたものを取つて、作者の眞の力を追憶するとか、忘れられるといふよりも、知られてゐない、眞の近松を知るに足るやうな名篇をかつぎ出して、日本の名戯曲を味はふといふやうな上演は、商賣主義のみ幅をきかしてゐる今日、思ひもよらぬことである。外國で沙翁劇などがいつまでも繰返されてゐることなどを思ひ合せると、嘆ずべきよりも恥づべき事である。

序に、この稿の校正中に、私は今春明治座に興行された文樂座人形淨瑠璃の二の替を見物に出かけた。それは『姫山姥』の上演を見るためであつた。その以前『姫山姥』の八重桐喋りの場を、人形で見たことがあつたかどうか記憶せぬが、昭和五年の十月本所の壽座で、久米三郎が歌舞伎に上演してゐるのを、態々見に行つて、其技巧に相當感心したことがあつた。その記憶を今喚起して、改めて人形の上演が見たかつたからである。

淨瑠璃は源太夫、八重桐の人形は紋十郎であつた。實は私はあの喋り場こそ、「あんまりしやべつて息切れた、お茶一つ下さんせ」とあるからには、もつとテンボの早い、本當の喋り場にするのかと思つてゐたに、源太夫のは寧ろ遅過ぎる程のテンボで、一寸も原作の味が出てをらず、人形の振も如何にも硬過ぎて、私は聊か二人の技巧に幻滅を感じたのであつた。昔の上演が果してあんなだつたらうか。

江戸土佐浄瑠璃解題 (二六)

○末廣昌源氏

【体裁】 東洋文庫蔵本。八行六十二丁本。版元の記載なく、有ふれた木下版とは聊か異なるやうに思はれる。

【大夫・刊年】 刊年不明ながら、八百屋お七の事があるから、想ふに寶永元年豊竹座上演説、實は享保二年頃の紀海音作『八百屋お七歌祭文』より後のものであらう。奥に「内匠虎之助改正、内匠六之丞章指」の句があるは注意すべきである。題簽には土佐少掾直傳とあり、前付にも土佐少掾橋正勝の文字がある。

【形式・曲節付】 六段曲にて各段首尾に形式句がある。道行も節事も多い。曲節付中主なるは次の如くである。

ツナキ、サツマウツリ、イロツメ、本三重、モロヲロシ、ウタウツリ、マイハリ、アミトヤツシ、サナイ、ユリヲトリ、ユリモトシ、マイハコヒ、ハルハコヒ、ウツムスヒ、サイツメ、キンサツマ、片ヲロシ、ヘイケ、一ジノミ、ユリステ、イロシナリ、本フシ引取、ハヤ三重、片ナヤシ、レイセイ、リウクワ、本地、アタル、三ツユリ、イロサシ、本フシトル、キンノリ、サバナミ、一ジ上ケ、本地カ、リ、カイドウ、玉ノフシ、アミトマツシ、フシウツリ、ウタトメ、マイキン、キンセメ、キンツナキ地、トル、ホチカサウ、

ツキカヘシ、二上リキン、シグレカ、ル、ナス、キンカン

「戀路を人とはどあのやむかふの遠山に……」

【前附・奥附】 前附に次の文がある。

音曲は治れる世のもてあそびなり、花にさへづる鳥、草にすだくむしの言、風聲水音まで和歌にもるゝ事なしとや、かけまくもかしこき君の御みくみをあらはし、道をまもる臣下の智勇をしるし、神祇釋教戀無常父子夫婦兄弟朋友のまじはり五常五倫の道を耳ちかくしらしむる事は文章音曲の徳とかや、たゞひとへに人の心を慰むるなぐさめ草のたねともなりなしかしと、はゞかりながら序となすのみツテント

土佐少掾 橋 正 勝

又奥附には左の文がある。

右此本者土佐少掾橋正勝章句以直傳節章今正改令開版者也

内匠虎之助改正

内匠六之丞章指

【梗概】 初段 「扱も其後文は天地を感じせしめ武はぎやく敵を退らぐる、道のみちたるめぐみ社、げに君が代のしるしなれ、爰に清和の嫡流多田の朝臣源の満仲公」が榮えてゐる天延元年睦月初、嫡子頼光の臣源五綱が初春の御禮とて、蓬萊をかざつて君の前に出る。やがて頼光は末竹をつれて戸隠へ参る。(こゝで舞樂を奏せしめる處が節事になつてゐる。)

舞樂が終り、神主が蓬萊山をおめにかけるといつて、大地を打つと、「不思議成かなかう／＼とそびへし松やみどり成竹おいしげる大ばんじやく、こけむしたりほうらひ山神前に涌出したりしは盤石からの須彌せんのあらはれ出たる如く也」。そして鶴と龜との舞姫は「我々は持國増長の二天王、おことは日本無双なる、めい將にて有ければ、よき郎等をえさせんと是迄出現なしたる也」といふ。更に盤石が二つに割れて老女が出て「我こそ忝龍が妻あがら山の山神也」、怪同丸を汝に得させん爲つて來た、彼を公時と名つけよといふ。

渡邊綱は武藏三田の八幡に社參して、歸りに碓氷峠にて鬼人の如き荒童丸を従へ、丁度此處なる鬼を平げんとて來た頼光と末竹公時に遇ふ。一同喜ぶ時廣目多門の二天王が出現し、「よき郎等を得させたり、今より四天をかた取て四天王とな付べし猶々しゆごしゑさせんと光りを放て飛給ふ」。乃ち荒童を定光と名付け、こゝに四天王が成る。

其時惡鬼が二匹現はれ、「我等はらんば惣王といふ大魔王のけんぞく、火こくすいぎうどうやしやといふ鬼なり」、源氏の四天王を引さかんが爲に來たとて飛かゝるを公時がみちんにする。其時「持國増長廣目多門」が出現して、猶守護を誓ふ。一同は喜んで都に上る。「天晴源氏の四天王惡魔がうぶく國家の守護、太平の印やと貴賤上下押なべて皆かんげぬ者社なかりけれ」。

第二 其後一條院の御宇「浮舟の、内親王と申せしハ村上天皇の姫宮にて、當さん一條院の、おば御子にて渡らせ給ふ」、御うしろ見として源の滿仲公乃ち滿慶の次男大和守頼親、三男美女丸等がついてゐる。處が頼親は姫と美女丸との間に戀ありと讒して、美女丸を陥れる。滿慶は乳人仲光に美女丸を討てといふと、仲光は身替に我子香壽丸（十六歳）の首を討つて差出す。

村雲の王子といふは、流刑に遇ひ給うた内親王のをとみこにて、頼親にお親しみがあるので、頼親は王子に叛逆をすすめて兵をあげるが、頼光軍の四天王等が攻めて之に勝つ。

第三 「其後御よの恵みはつくばねのかけより猶もしげかれと影そふ木々の上野山麓の宮居しのばすの神の御前の橋の上しばしたゝすむ美少人」がある。それは谷中吉祥院の美小姓吉三である。（此邊節事。）お七をつれた腰元お杉は煙草をたねにして吉三に近づき、お七をそばへよらせる。そして強ひて茶屋へ吉三をつれゆかうとする。其時藤原仲光が來て、吉三郎の名に隠れてゐる美女御前をつれて歸る。（此あとに又節事。）やがてお七はさうし賣になつて吉三に近づくのであるが、その邊「其水ぐきの跡とをく、つたへて源氏物語てる月なみをかぞふれば、いざよいのきも有物をれんぼの、やみのくらがりは、なんとせうがのしよがいの、あふを限りに迷ふ身の、思ひは同じよるの鶴なくね比べしさ衣に……」とさうしづくしになつてゐるあたりは『出世太平記』の趣向に似る。

お吉は「……いろ／＼にかき集めたるもしほぐさ當世本も候ぞ、さうしめせ／＼ものゝ本めさせ給へ」と賣つて、吉三の住家に近づき呼入れられ、やがて頼冠をとつて吉三を驚かし、此程より送る文に對して返事をせぬことをうらむ。口説の後、互に忍び遇ふ約束を得て、お七が歸らうとする時、當寺の旦那武兵衛太左衛門の兩人が參詣する。戀人二人はそれを見ると驚いて身を隠すが、其時落した起請を拾ひ取られる。元來お七を貰ふ積りの武兵衛は、拾つた起請を見ると、和尚に向つて、吉三郎がお七に戀してゐては困るから、早速お七を貰ひ受けて歸るといつて怒る。此時和尚は起請文を見せつけられると、お七の戀の相手の吉様とは自分のことだから、怒るなら我が首を切れといつて吉三郎をかばうので、二人は乃ち、その吉三こそは村雲王子方だがす美女丸にちがいないといつて、吉三を捕へよう

とする。そこへ仲光が歸つて来て、二人のあはれ者を追ちらす。和尚は此時お七の上衣を吉三に着せて忍び去らしめ、お七は髪を切られて、吉三の身替として寺に残る。そこへ村雲王子の軍が攻入るが、やがて吉三の美女御前後を追ふ。

第四 美女丸とお七をつれて、仲光は比叡山にかくれるべく上洛する。

道行 「うてやはやせや獅子かしら、きつれてつれてみよしの、田のものかりのつてにても、浮な、もらすな打渡す、おちこち人のあしなみはとん／＼とどろと……かけもくもらぬ望月の里にぞつかせ給ひけり」(此間に獅子頭の由来などの節事がある)。

此處には關所が設けられて、村雲王子方で通行人を調べてゐる。仲光は一行を獅子舞の姿にして通らうとするが、老女になつた浮舟の内親王が出て来て、お七と美女丸とを看破して通すまいとする。乃ち巧に戦つて三人は落ち行くが、お七はあとに残されて處刑せようとする。(此處にお七の惱みの節事がある。)——「あだし情にあいそめて色と誠のふた道をわけまよふ身は淺ぢふのをが願にくらべては、人をつらしと恨みけん……」。かうしてお七は馬に乗せられて、刑場に引かれて、釜いりにされようとする時、釜の中から公時の母山姥が仙術を以て飛出し、浮舟の臣等を叩き殺し、やがて因果のめぐるを見せるといつて、浮舟を釜の中へなげ込む。そこへお七は美女丸や、あじやりの坊、仲光をつれ來り、公時に引渡す。其時お七は「我は東に隅田川、待乳山の宮どころ、誠は大聖觀喜天、かりに淫女とあらはれて、末世の衆生に男女の道、みさをしめし本地は又、あい別りく會者定離のはかなき道理をみせたるも美女丸出家とくだつを、すゝめん爲の方便ぞや、是も氏神正八まん、まろに神ちよく有所、いよくきうそく、

上天の、佛者しゆのゑんと成ならば、ます／＼源家を守護せん」といふ。

第五 村雲王子と頼親とが江州伊吹山にこもり、帝都へ討つて上ると報ぜられ、御評定の處へ、阿部晴明が参内して、都丑寅みぞろが池に住むらんば惡王といふ鬼神が、村雲の王子に謀叛をすゝめる故、自分が加持をもつて封じておいたから、朝敵退治も安からうと奏する。頼光は勅命を蒙つて伊吹山征伐に向ふ。

村雲王子は唐崎の宮にて、臨時の祭禮を催して神をすゝめられる。(此處に神樂があり節事がある。)王子が舞樂御らんの後、舞姫に扮した美女丸が、飛出した末竹定光と共に王子を生捕にする。その時始めて、最初仲光に殺させた筈の美女丸が生きてゐて、香壽丸が身替になつたのだと分ると、末竹定光等も驚き喜び、頼光と共に都へ上る。

此時阿部晴明は山城みぞろが池にて、惡魔降服の祈をしてゐる。(こゝに神そろへの節事がある。)やがて綱公時が來て、三石三斗三升の大豆を二つに分けて豆撒をなし、福内鬼外と呼ぶ。と岩窟から「いるいゐぎやうのきちくのせい形を現はし飛出」る。晴明が此時祈をこらすと、やがて三面六臂のらんば惣王も出るが、綱公時が之を平げる。

第六 村雲王子は出雲に流され、美女丸は大内に近侍することゝなり、頼光は更に頼親討伐の爲に、二萬餘騎をもつて伊吹山に向ふが、やがて矢文を送つて和を結ぶ。「千秋萬歳めでたし迎貴賤上下押なべて皆かんぜぬものこそなかりけれ」。

【解説】 第一段は頼光が四天王を得るに至るまでの次第、第二段は頼親が村雲王子を載いて叛逆することゝ、頼親に讒せられた美女丸を、滿仲の命で仲光が討つことゝから成り、第三四段には、お七吉三の戀物語を取入れ、お七の戀人吉三は、仲光が我子を身替にして隠した美女丸であることゝし、美女丸は村雲王子を唐崎にて生捕にした功によ

つて、大内の近侍となる。第五段は阿部晴明の悪魔退治の祈禱、第六段は再び逆もどりして頼光の頼親討伐といふ順序で、頼親の叛逆と身替物語と、お七吉三の戀物語とをつなぎ合せた、統一なき、不自然至極なものである。

普通の土佐物ほど筋が不明瞭ではないが、脈絡なほ漠然たる所があり、徒らに話を面白くしようとして、却つて勞して甲斐ないものとなつてゐる。さるにもお七吉三の戀をからませたあたりは、やゝ柔か味をそへてゐる上に、節事を屢々用ひ、殊に舞樂の如きは、第一段と第五段と二度までも用ひて興をそへ、第四段には獅子舞を加へて、道行の趣を見せなどして、全體を興味深からしめてゐる。そしてお七を用ひたのは、待乳山の聖天が假りに潘女と現はれて、男女の道に於ける操を示し、會者定離のはかなき道理をみせ、美女丸に出家得脱をすゝめん爲といつて、説教臭いものたらしめてあるが、結局源氏の繁昌を謳歌する事に其曲旨のあることは、度々段尾に於て之を繰返してゐることでも明かである。従つて之を八百屋お七の戀物語の一つと見るよりも、身替物、四天王物と見た方が穩當と思はれる。

【原據】 頼光の四天王物語は『清原右大將』の後半の四天王を得る話などにより、身替物語は謡曲『仲光』を経て『公平法門評』等の身替物語により、お七吉三の戀物語は海音の『八百屋お七』による。(別項お七正本研究参照)

○現在 松 風

【體裁】 古綴文庫藏本。帝國圖書館にも藏む。共に半紙型九行三十九丁。古綴文庫本には題簽があり、それには唯「松風、土佐少掾直傳」とあるが、内題は「現在松風」、柱には「松風」とされ、終行には文字なく、別に後附に、

「土佐少掾橋正勝直之以章句……、大傳馬三丁目鱗形屋三左衛門」とある。これも木下版でなくて、鱗形屋版であるが、見た處版式に大して差は認められぬ。

【太夫・刊年】 上述の如くで太夫は明かだが、刊年はない。

【形式・曲節付】 六段、各段首尾に形式句がある。

第一「扱も其後仁明天皇の御時平城の御孫阿保親王の御二男ありはらのなりひらとて、わかのさいにちやうじたるくぎやう一人おはします……」

第四段に汐波、第五段に狂女の物狂、の二節事がある、段物集にもこれが入れてある。

曲節付中、變つたものには次の如きがある。

中ギン序ツナギ、テンノウグチ三重上、切ル、早三重、モツ、持合、ツメ、ユリヤツシ、ユリヲシ、七ツユリ、三ツユリ、ハヤマ、ウタイ、ヨセテ、本ブシナゲ

又「切ル」といふのは文章の切れてゐない所のみあり、〇〇〇の印も多い。

【梗概】 第一 仁明天皇の御時、平城帝の御孫、阿保親王の御二男を在原行平といひ、其後見に文屋の康豊がゐる。又檜垣の右大辨定顯といふは「てんそうのきり人」であるが「武勇を好み、かさかけ犬道物などもあそび」、中宮に仕へてゐる紅葉の内侍といふ美人を戀してゐる。

彌生下の十日、御門には暮れゆく春の名残を惜ませ給ひ「左近の陣」に出御あつて、暮春の一興を求め給ふ折柄、行平は一首をよんで叡感を蒙るが、定顯のは紅葉の内侍によつて難ぜられる。かくて行平は紅葉の内侍を給はる事と

なる。

定顯は和歌の争には負ける、戀する紅葉の内侍は行平にとられる、生きても甲斐なしとして死なうとしたが、郎等に救へられて、紅葉の内侍の中宮からの歸途を襲ふて奪取らせる。けれどもその時行平の後見康豊が現れて、敵を追拂つて内侍を奪還す。

第二 その後行平は國司として、因幡國に下る事となると、定顯は從弟の定雄をして、遂に行平を襲はしめ、播磨と備前の境、舟坂山にて討たせようとする。思ひ掛けぬ事として、行平方には一寸當惑するが、康豊が奮戦して、敵を追拂ひ、無事國入をする。

第三 定顯は度々の失敗に愈々悪計をめぐらす。乃ち從弟定雄は郎等兵藤重年一人をつれて室津の色里に入込み、中納言黃門行平になりすまして、土地第一の太夫錦木を招き、宿の亭主には自筆の短冊を與へて、敵を陥れる種を時く。やがて錦木が来る。定雄は此時盃を錦木にさすが、錦木はそつけなく盃をつきかへす。定雄は中納言に向つて何するぞと、太夫の無禮を怒る。かくて錦木が立去らうとすると、定雄は錦木を押へつけて「兩の耳をおしそいでかしこへかつばとつきたをす」。遂に大騒となつて、所の者が集り来るが、定雄重年はそれを散々に討拂ひ、首尾能く、行平を陥れるべく、不行跡を重ねた積りで喜んで都に歸る。

第四 室の泊の者共は都に上つて、行平の悪行を檢非違使に訴へる。定顯は待つてゐたとばかり、喜んで讒奏する。御門には逆鱗あり、取敢ず行平を須磨に流せと勅命がある。よしみね朝臣が勅命を傳へて、行平を須磨の浦へつれてゆく。

須磨にて行平は、所の長者兵庫之助に預けられ、一夜月明に乗じて、長者と共に海士の汐波を見る。「げにやうき世のわざながら、ことにつたなきあまを舟わたりかねたる世の中を、うしとやいはんうたかたのあはれはかなきあまごろも、すそをむすんでかたにかけ月の出しほをくみつれし、かけはづかしき我姿……」（此邊が節事）。やがて行平は二人の海女に近づいて素性をたづねると、嘗ては都高橋殿に仕へたものといふ。行平は二人の姉妹を松風村雨と呼んで、我が家へつれゆきて召仕ふ。

第五 行平の北の方紅葉の内侍が、父后宮の太夫道房に、右大辨定顯の事を物語ると、道房は怒つて、融の大臣と共に奏して、定顯と行平を對決させる事を願ひ、行平は須磨に迎へられる。

行平が出發せんとすると、松風村雨の二女は行平を慕ふて、別れを悲しみ、袂にまつはつて離れようとせぬ。乃ち行平は「まづあふ迄のかたみとて、御たてをばしかりぎぬを、磯馴松にかけおき」袂をふり切つて別れる。悲みの果に、二女は狂氣となつてしまふ。浦人共が行平の風を語れといふと、二人の海女は「かしこの松にかけられし、かたみのかむりかりぎぬを、やがて其身に着しつゝ、さても都の行平は、こともおろかやあぼしんわうの御子にて……」と身振のまねなどをして泣く。

第六 さて對決となると、定顯定雄の罪惡は悉くばれて、藤摩と隱岐へ流される。行平は再び富貴となる。

【解説】 御前にて歌比べに負けて、戀する紅葉の内侍を行平にさらはれた右大辨定顯が、從弟定雄と共に、計畫し讒奏して、行平を配流の身とならしめるが、其罪惡がばれて、却つて定顯等は遠流の身となるといふ有ふれた戀争、勢力争物である。松風村雨の二女が行平になれ親しんで、別れにのぞんで悲の果に狂女となつたといふ所に興味がある。

たれたものと見える。最初の邊では小野小町と黒主の歌争が思ひ出され、後半では謡曲『松風』が思ひ出される。それにして仁明帝の御時に、「かさかけ犬追物などもあそぶ」は、ちと時代錯誤が過ぎるやうである。

【原據】 謡曲『松風』によつたものであるが、行平配流の事は『古今集』雜下に

わくらにとふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつゝわぶと答へよ

在原行平朝臣

とあり、又『源平物語』源氏の須磨配流の事についての「おはすべき所は行平の中納言のもしほたれつゝわびける家居近きわたりなりけり……」や、海女のことは、『撰集抄』第八の「公任進位並行平遷流事」の一節などに出了たものと思はれる。

又未見のお伽草子、萬治二年極月、野田彌兵衛板『松風村雨』によつたらうし、近松の『松風村雨東帶鑑』とも關係がある。

ところで謡曲に於ては、松風村雨の事柄を、一種の昔物語を追憶する風にかゝれてゐるに反して、本曲では、之を現實の物語として取扱つたので『現在松風』といつたものと思はれる。従つて「今様松風」といふのは少しちがつてゐる。

敵役定顯の従弟が行平になりすまして、偽筆の短冊を悪用し、室の津の色里にて、遊女の耳を切つたりして、其罪を行平になすりつける構想は、貞享二年の西鶴作『曆』の第二段にて、虎若と戸無瀬とが、安倍川の揚屋にて、相手の色紙を悪用して、遊女に負傷させる趣向をかりたものである。

【影響】 文化十二年文庫陳人作『松風村雨物語』五卷がある。

吉右衛門の碁盤太平記

願れば久しい間新劇の研究に従事して後、大正大地震の前年には、新劇研究所を設立し、その爲に家を建て、二階を舞臺にまでして、爾來十年の間に研究生を手にかけること實に五百餘人、東儀鐵笛氏も我が二階の舞臺で倒れるなど色々の事のあつた果に、遂に所謂新劇研究者の不眞面目に愛想をつかして、舞臺も打壊し家も再び建て直してからは、歌舞伎好きの妻を叱りつゝも、毎月引ずられては二三の舊劇を缺かさず見続け来り、而も滅多に心を擱まれるやうな出し物に廻り合せる事もなく、頭に残つたものといへば、數へる程しかもたない私も、この九月の歌舞伎座では、珍らしく久しい間の怨を晴らすことが出来た。第二第四は大衆向であるとしても、『身替音頭』と『碁盤太平記』の二つは素晴らしい見ものであつたからである。

『身替音頭』は、松田和吉が竹田出雲と連名で、近松の添削の名の下に、享保八年竹本座で上演させた『大塔宮贖鑑』の第三段である。常盤駿河守は若御臺を戀して、思ふにまかせぬ怨の果に、其子の若君を殺せようとする、預り主である右馬頭は我が子を若君の身替に立てようとする。殺し役の齋藤太郎左衛門は右馬頭の子を殺すのかと思

ふと、子供達の踊つてゐる間に、人々の驚を餘所に、己が孫を殺して身替にするのである。四十人ばかりの無邪氣な子役の踊子達は櫻の花笠をかぶり、揃の水色の衣を着て無心に踊つてゐる。踊の輪はゆるやかな音頭の節につれて、心地よく、廻るともなく廻つてゐる。太郎左衛門はあつちへ廻り、こつちへ廻り、虎視眈々として、身替の犠牲を見出さうとして悪魔の目をみはつてゐる。右馬頭の妻は寂しい聲で歌つてゐる。(二度目にはこれが下座の歌にかへられてゐたが、これはやはり、前の方がいゝ) 何といふ懐しい、而も何といふ美しい繪であらう。此間に於ける太郎左衛門の苦衷と、我が孫を殺した後の懺悔と、孫に對する謝罪、これが此場の血を吐くやうな狙であるのである。此一幕二場に於ける太郎左衛門の痛ましい懺悔、最後まで誰にも秘した堪えがたき思ひの節々、それ等が吉右衛門によつて何と素晴らしく表現されたことだ。殊に前場の幕切近くで、踊の太鼓に耳をそばだてながら、花道までよぼ／＼と進んだ後の「あれや、何だ」といふ絶叫と、之に伴ふ動作は、誠に津々たる味に充ちたものである。又踊の場の終の、孫に對する悲痛な懺悔と謝罪、それらがやがて「今の音頭を引導にて、魂冥途の鳥となり、父よ母よと呼ぶついで、祖父をも呼んでくれよ」といふ悲痛な哀願となるのである。全く天下一品の太郎左衛門である。吉右衛門なればこそあの意氣と力と情熱と味とを表し得るのである。あの一瞬満座の心は融け合つて一塊となつて、いつか地上を離れてしまふ。歌舞伎の妙味は遺憾なく發揮されてゐる。

二

次の『茶盤太平記』は私の最も期待したものであつたのだ。所謂赤穂義士事件を最初に扱つたものだからである。

時事にわたる當時まだ生々しい悲劇を、近松がびく／＼遠慮しながら、最初に扱つた名作であるからである。而も昭和八年二月には歌舞伎座で故鴈次郎によつて、全十一年の十一月には東劇で延若によつて演ぜられたものである。けれども此兩度とも、近松の作と銘を打ちながら、その實は後半を改作し、あくまで感傷的に、わかり易く俗向に工夫して、由良之助が女房と母とを離縁すると、二人はあとですぐ歸つて来て、密に裏庭に隠れてゐて、仇討に出かける由良之助父子を見送るといふ風にしたもので、俗受はしても、折角の近松の狙は打壊され、迫力は全く失はれてしまつてゐたのである。一體かうした氣の利いたらしい脚色は全く唾棄すべきもので、原作者を蔑視し藝術を冒瀆する無禮千萬なものである。私は脚色者や上演者や俳優の藝術的良心を、呪ふよりも寧ろ憐んだものである。ところが今度の上演は、飽くまで原作に忠實に、始めて由良之助に扮する吉右衛門は其藝術的良心を養ふべく、文樂の津太夫と人形遣の榮三とについて、熱心に研究をつんで、熱演をしてゐるといふのである。私は非常な期待を以て、國劇の爲にも一見せずばあるべからずと、例によつて、今一度原作を丹念に熟讀した。原作に漲つてゐる香味と狙とを再吟味し、感銘を新にし、あの一編に流れてゐる緊張力と大きな迫力と、全篇の興味とを、私の最も好きな俳優の一人である吉右衛門が如何に表現せんとし、またどの程度にそれに成功するだらうかを知りたかつたからである。勿論吉右衛門といふ人は、平生の行き方とは相當距離のあるあの高濱虚子氏の「一茶」を、嘗てあれほど面白く興味深く演じ得た人である。一茶とは反對の、むしろ吉右衛門畑の由良之助である。例へ初演ではあつても、どんなにか興味深く演出してくれることであらうと、私は多大の期待をもつてゐた。

私は全く非常に大きな期待と喜とをもつて九月八日の夜出かけて行つた。そして殆ど原作其儘といはれる脚色の態

度には、大きな喜と感謝を感じたのであつたが、あまりに寫實張な吉右衛門の態度が前半を支配し過ぎて、原作に流れてゐる迫力と興味とが頗る失はれてゐたことを聊か残念に思つて歸つて來たのであつた。或は吉右衛門は病氣でもあるのではないかしらと、私は怪しみさへしたのであつた。ところがその後偶然にも、近松研究者としての立場から、一見して寸評を書けといふ意味の手紙を歌舞伎座から送られて、十三日に再び觀劇の機會を與へられる事となつた。あの吉右衛門の演出を、改めて今一度見るか、再演を希望してゐた折のことゝて、私は喜んで招きに應じて行つた。そして再度の觀劇をしたことを私は非常に喜んだのである。前回よりも色々な點が改められたり、熱練が積み重ね工夫が凝されたりしてゐて、前とは見違へるほどの演出となつてゐたからである。私は即ち二回目の觀覽を中心として、初回のそれと比較もし、原作讀破の興味を基礎として、思ひのまゝに自由に筆をとつて見たい。素より徒らに媚んが爲でもなければ、強ひて人を中傷せんとするが爲でもない。わが藝術的鑑賞を基礎として、誰に遠慮するでもなく述べるのが、私の本來の態度でもあり、かくてこそ之を私が書残して一冊の中にまとめておく意義もあるからである。

三

元來あの作は、由良之助が使つてゐた岡平といふ人物が、無筆文盲かと思ひの外、目明きの而も立派な有筆であり、間喋どころか無二の味方であるといふ意外から展開して行くのであり、而もその意外が、意外外に早くわかるのであるから、前半の興味は由良之助よりも岡平（友右衛門）の方にかゝつてをり、岡平こそ却つて甚だ重要な人物である。

あるのである。従つて由良之助は殆ど大した働をしないうらに出來てをり、むしろ淋しい役であるのである。それだけに由良之助の所作は六ヶ敷いと同時に、うつかりすると仕甲斐のないことになるのである。それは元來が淨瑠璃であるからでもある。淨瑠璃に於ては元々一人の太夫が全曲を語るものであるから、岡平の役も由良之助の役も、手際よく順々に片づけてゆけば、太夫としての役は立派に果されるのである。處が歌舞伎では、別々の役を其人々が分けて受持つことになるのである。そこに淨瑠璃殊に近松の淨瑠璃を直ちに歌舞伎に上演して、演し悪い原因もあるのである。役の上に働きが足りない、言葉が足りない。間があいてくる。所謂改作の行はれる理由がそこにあるのである。上演者なり俳優は、此點を大に考慮して、何とか補をし工夫を凝らさねばならぬことになるのである。従つて、出来るだけ寫實的な自然な演法をとるよりも、不自然であつても、相當に誇張して、浪漫的な演法をとり、大に腹藝でも用ひて、そこに生ずる寂しさを巧につくろひ補はねばならぬのである。ここに私が吉右衛門に向つて、演出上大に求むる所があると同時に、力の藝術家である彼にして、始めて眞に近松物、殊に、近松の由良之助を上演し得る能力がありはせぬかと、平常から期待し、今度の演出にも期する所があつた理由があるのである。處が彼はこの前半に於ては、彼の得意とする所謂腹藝的演法を出来るだけ避け、むしろ成るべく誇張を排して、自然な寫實的な演法をとらうとしたが如くである。つまり力を抑へ、熱情を殺して、丁度小説脚色物か何かをやる時に、菊五郎と對する場合のやうな態度をとつたらしい。かくして最初には、原作に狙はれた力と情熱をうまく表はさうとしたものと思はれるが、八日には彼はまだそれに充分成功してゐなかつた。處が二度目に見た時には、工夫が加へられたのか、熱練の結果によるものか、力と情熱とが非常に加はつてゐた。最初には氣の抜けたやうな、淋しさを感ぜしめられたに反して、二

度目には、其欠點がすつと補はれてゐたやうである。だが要所々々をもつと誇張して、一層の熱情をこめて、一段の迫力を見せたらどんなものであらう。成程由良之助は、最初から圓平の態度について薄々感付いてゐたとしても、圓平の懺悔をきいてゐる間、時々背きを見せるとか、せめてその後では、もつとく大きな喜を見せるとかしたらどうであらう、それによつても、あの前半の舞臺効果は、もつと補はれはしなかつたらうか。二度目の觀覽に於ても、尙幾分此氣持のつき纏ふのをどうすることも出来なかつたのである。實際見物はもつと締付けてくれるやうな一聲が、どこかで由良之助の口から出て來ないものかと、片唾をのんで待つてゐたのである。

四

それから由良之助の女房（時藏）と母（梅玉）の雜言も態度も、あんな弱いものでいゝものであらうか。原作には女房は力彌を罵つて、「何の因果に腰拔を手に持ったぞと聲をあげ前後不覺に泣き給ふ」とあり、母の態度は「碁筈なる石を引摺み搔つかみ、目鼻も分かすばらりと投付けく、散々に投付けてわつと泣き出す」と記されてゐる。これでこそわざ／＼父子を勇めに出て來て、死を以て勵ませる母子なのである。處が、時藏の女房の言葉に於ける多少の省略は許すとしても、由良之助に對する白と、力彌（男女藏）に吐く白との間に、何程の差別があつたらうか。唯徒らに女らしく見せようとすることにのみ努め過ぎたやうである。「前後不覺に泣く」どころではなかつた。母の態度に至つては一層腰拔である。碁石をつかみはしたが、足もとへ二度ばかり、投げるところか、ばら／＼とこぼしただけである。あれではあとで死ぬ程の女とは思はれぬ。男が女になつたのだからとて、あんなにぐにや／＼せんでもよくはなからうか。

後半に於て、隣座敷といふのが離座敷にされてゐるのは許し得るとしても、座敷が餘りに大き過ぎたが爲に、寂しがるべき、又それこそ禮當でもあり、適當でもあるのが、寂し過ぎるといふ損を生ずる。殊に嫁姑が打重つて臥した爲に、一層座敷をがらんとした見せたのである。

それは兎に角、そこへ駈つけてからの由良之助にも、言葉は僅かしか原作にはいはせてないのである。こゝには前半よりも一層の力と熱情の必要がある。吉右衛門は此處に至つて、始めて獨特の白を吐いた。「是でこそ我が女房、是でこそ我母なれ……嬉しうないか、嬉しうござる」、この數語こそは此曲に於て父子を生かすものであり、父子の生命である。見物は頗る昂奮させられた。「由良之助足が軽い」と附加へられた。百尺竿頭一步を進めた、悲痛極りなき一語である。常人の常の場合ならば、唯泣く外はないのである。けれども今の由良之助にとつては、始めて安んじて大義が果せるのである。大義の前には私情は一顧の價もない。吉右衛門は暫く淋しく笑つた。而もその笑を繰返した。面白い笑である。「流石恩愛骨肉の、變れる容に氣後れして、父には包む力彌が涙、父は我が子を勇めの笑ひ泣くも笑ふも武士の道」と、作者は述べてゐる。だが此笑こそはまことに六ヶ敷い笑で、かうした際に何氣なく笑へば、却つて悲痛氣にも見えるかもしれぬが、輕卒な笑は打壞しになる。かくて自然と悲痛な味を見せて、見物の心をしめつけるやうに工夫される必要がありはせぬかと思はれるのである。而もそれは歌舞伎にふさはしかるべき笑でなければならぬ。吉右衛門の笑は相當に苦心されたものではあつたが、もつと悲痛味を出せないものだらうか。尙此場合の幕の引き方には、今少し時間をおくことによつて、見物の心を引しめる結果は得られなかつたらうか。

かういつて細かい處まで述べて來ると、今一步を進めて、最初からの氣附きを述べて見たい。幕明きの當座には、まだ見物は三分の一は歸つて來てをらぬ。従つて頗るさわつきもする爲でもあるが、仲藏の三味線は故なくパチ／＼と打たれる、米太夫の音聲は鼠の聲のやうに小さい。あれでは折角見物の心を引くべき工夫が何の役にもたぬ。岡平の聲はあまりに低い。幾人も來る使の白は何もきこえぬ。馬方順禮高野聖と、原作通りに澤山の使が來たか知らぬが、何の功果も收められてをらぬ。

一體大根役者なら兎も角、本當に立派な役者であれば、見物がさわめればそれを靜める心得が必要であり、見物にきこえぬほど劇場が大きいと思へば、必要なだけの聲を張り聲を高くして、我が藝術を見てもらはふ、味はせてやるといふ心掛が必要である。それを何の見境もなく、いつも自分の地聲だけでやるのは、新舊を問はず、演劇が元來の誇張を本位とすることを理解せぬ大根役者のことである。兎角新劇の俳優は、自然でなければならぬといつて、わざと地聲以上に聲を出すことを嫌ふが、これは大なる誤である。それならば最初から、四疊半か六疊でやるがよい。歌舞伎俳優にも折々そんなことを主張してゐるものがあるときくが、それは演劇の本質を解せぬ愚物か、偏見の徒である。従つて時には三階の隅までもきこえるやうに心掛ける必要がある。此意味に於て、場面に應じて、三味線も軽く弾く必要がある。現に岡平の懺悔あたりの處では、仲藏は軽く弾いてゐた。それだのに何故か、最初の邊りではバン／＼と弾きたてゝ、俳優を殺し、調和を破つてゐる。演出者の注意が必要である。またあんな力の必要な曲の太夫

は、もつと力と聲のある太夫によるべきだ。せめて鏡太夫の力と落着とがほしかつた。又由良之助の最初の出の言葉「やれをいつに止めさすな」の前にも、「力彌待て／＼」とでも入れて、もつと力あり、はつきりした聲を出してほしかつた。それでないと、折角の瞬間の白が一般にきこえぬ。恐らく三階などには何にもきこえなかつたかも知れぬ。三階といへば、其處にだつて見物はゐるのだ。此曲のやうに屢々立つてゐることの多い曲では、許し得る際には出来るだけ體を舞臺の前の方へ出して、何をしてゐるのかを成るべく三階の客にも味はせるべきである。二階にゐてさへ時には怪しく思はれた體は、三階では腰の下からしか見えぬかも知れぬ。安價な座席に對しては仕方がないなどいふのは、己れの藝術を味はせる道、味つて貰ふ道を知らぬ云ひ分である。

それは兎に角由良之助父子が母と妻に他所ながら暇乞に出る前の姿勢、最後の幕切の息づまるやうな瞬間の態度、それらにはまことに感心すべき巧妙な工夫が凝らされてゐた。その他にも數へれば澤山の長所はあつた。誠に面白い芝居であつた。思へば矢張あの國民的大劇詩人たる近松の由良之助を、あれほどに生かし、あれほどに作者の心を表現し得るものが、今の歌舞伎の畑に、吉右衛門を置いて誰があるだらう。何人も側へも寄付けようとも思はれぬ。殆ど原作の儘に、唯歌舞伎として演し得る程度に脚色するに止めた川尻氏の原作尊重の態度に對しても私は大いに賛意を表すると同時に、中村吉右衛門氏の技巧に對しては、衷心から敬意を表して一層の奮勵を望まざるを得ないのである。のみならず、『身替音頭』と『碁盤太平記』のやうな、立派な古典を二つも並べて見せて貰つたことに對しても、私は曲目の選擇者に對して、感謝の意を白状せねばならぬ。絶えず劇界の趨勢を知ること怠るまいとして、而もいつも二三の劇場に失望させられる私達夫妻は、久し振りに救はれたのである。蓋し見物といふものは導くべきものであ

る。一般大衆といふものは何を見せられてもいゝのである。之に對して媚びたり、機嫌をとつたりすべきではない。高い藝術的立場から之をぐいぐいと引ずるべきである。そこに劇の一つの使命があり、殊に今日のやうな非常時に於ては、一層の意義があるのである。苟も經濟的觀點のみから、上演物を選択するが如き卑怯な立場に立てば、演劇は立所に滅亡のどん底に追込まれてしまふことであらう。

若し今度のやうな上演で客が引けぬとすれば、それは時勢の勢である。一般大衆が如何に愚かであるかといふことの明證ともなるのである。願くは近松の名作の如きをどんくく上演して、歌舞伎の世界には、如何に立派なものが埋れてゐるかを一般に見せてやつて貰ひたいものである。

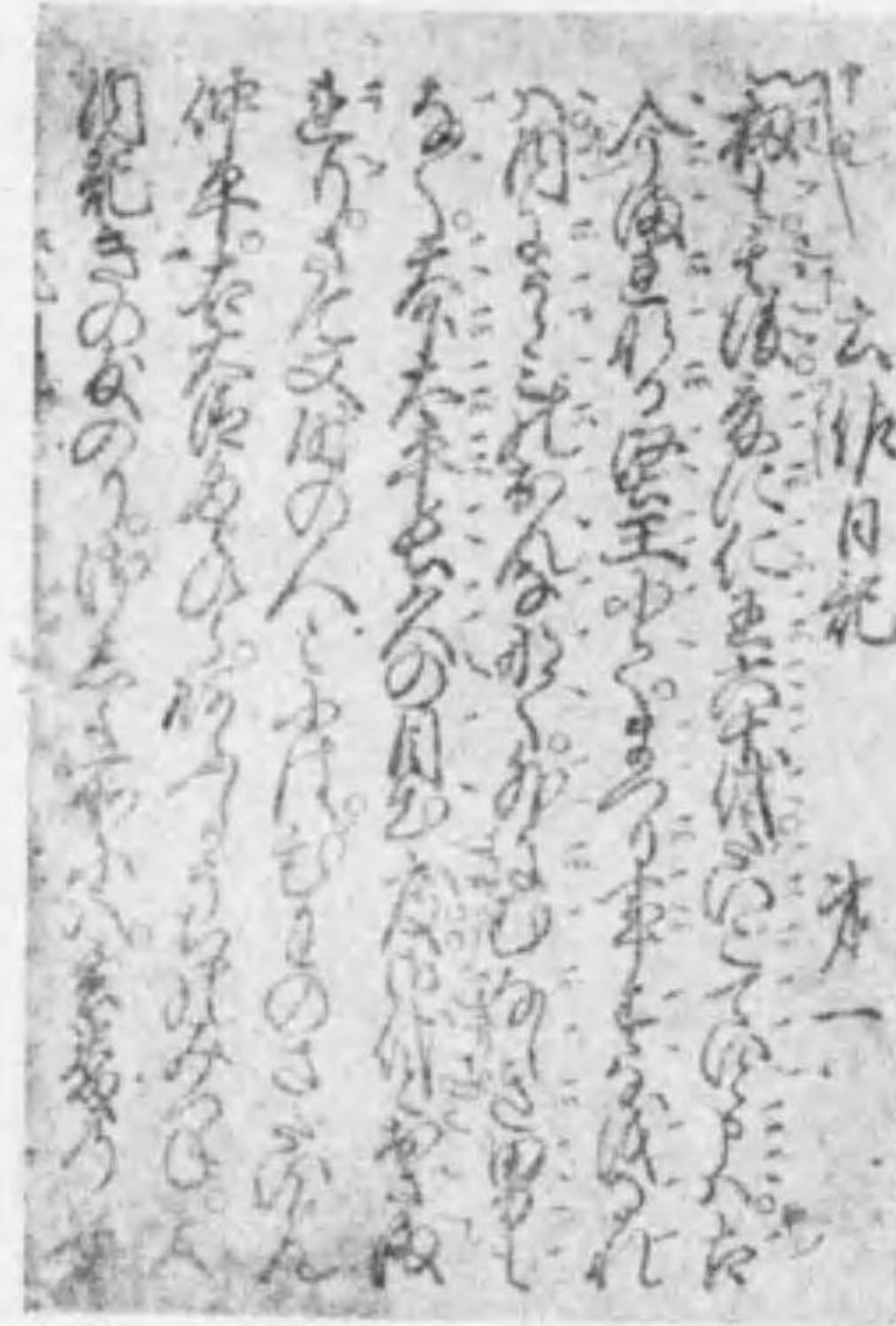
序に明治座の『義時の最後』、新國劇の『ナリント殿下』などについては、もう書く勇氣がない。

(昭和十四年九月十六日)

江戸土佐浄瑠璃解題(一七)

○土佐日記

【體裁】紫蘭文庫藏本。半紙形八行五十八丁。柱に「土佐日記」、卷末にも「土佐日記終」とある。前附に例の如く、木下甚右衛門の名が見え、「新群書類從」第五にも收む。



(藏庫文蘭紫)

【太夫・刊年】前附に「寶永五戊子初秋上旬、土佐少掾橋正勝」とあるが、貞享頃の作か。

【形式・曲節付】六段曲、各段首尾に形式句があり、四段の終と五段とに、多少濃厚な曲節がある。

第一「扱も其後、愛に仁王六十代、だいでいと申は、古今まれなる堅王にて、まつり事すなをなれば、内にうらみの女子なく、外にむなしき男もなく……」

第四段に住吉參詣の舞樂、第五段に業平の幽霊出現の所に節事がある外、貫之の船の上の土佐下りには、道行文はない。目立つた曲節付には、左の如きがある。

クリキン、イルマフシ、舟哥、ノリミ、ウタヒヤツシ、二上リ、本地、近江ウツリ、ウタナヤシ、
イルマフシ「身はならはしのうき世にて……」(第四段)

【梗概】 第一 六十代醍醐天皇の御時、大和宇陀郡の領主、村島のちかぬが、五色の錦鶏を献すると、瑞鳥だとあつて、紀貫之をして熱田八剣宮へ献納せしめられ、序でに村島に向つて都鳥のことを尋ね給ふ。

勢州桑名の木工之丞藤原繼景は、もと禁裏に仕へた身ながら、今落ぶれて生活にも困つてゐる折柄、貫之が勅使として熱田宮へ諸鳥を放ち、都鳥の事を尋ねるとき、八重垣(十六歳)、多門丸(十一歳)及び郎等民部清秀と女房濱萩等を招いて、業平以來知る人なき都鳥のことを知つてゐるを幸、歌道の秘密日本の寶なる都鳥の事を注進し、花咲く春に遇はうと語つて、多門丸を清秀夫婦に託し、姫をつれ、秘傳の一卷を携へて出發する。

やがて繼景が途中にて病になやみ、八重垣姫が當惑して、折柄邊りに釣を垂れてゐる北面の武士貞沖に藥を求めると、貞沖は姫の姿を見て忽ち心を奪はれ、欺いて姫を我家へ連れゆかうとする。繼景が驚いて斬つてかゝり、却つて氣絶させられた所へ、貞沖と云ひ合せた村島が来て、藥をのませ、繼景を蘇生させる。繼景は謝辭をのべて、都鳥の秘傳の一卷をわたして、勅使にとりもつてくれといふ。村島はこれ幸と、繼景を海中に押落し、姫の後を追うて去る。繼景は仕合せと其邊にあつた小舟にとりつく。

やがて姫を連れ去つた貞沖が、熱田の森蔭にて頻に口説いてゐる時、貫之の代參忠勝が通りかゝつて様子をきき、姫を助けて貞沖を追拂ふ。

第二 貫之は奉幣使の役を果して參内し、副使として連れしめられた貞沖が、旅の女を苦しめて姿を隠したことを

奏した後、功によつて土佐國守を命ぜられる。出發に際して八重垣姫をつれてゆくが、姫は父を思ふて歎くのみ。折柄一隻の小舟に乗つて漂ふ老人がゐる。貫之が近づいて調べると、姫の父繼景である。即ちいたはつて土佐に連れてゆく。

村島ちかぬは都鳥の一卷を奪つて、褒美に伊勢あさげ郡を賜はり、任地に赴くと、賞をかけて繼景のゆかりを捜し出さうとする。繼景の郎等近藤清秀は、主人の子多門丸の身替に、我子松若をたて、自分も共に死んで、妻濱萩をして主君の敵を討たしめようと圖る。

第三 村島ちかぬは繼景の一族をさがしてをれど、なか／＼わからぬ時、清秀の妻濱萩は近づいて、我子を手助けくれ、ばとて、清秀の鈴鹿山の隠れ場を教へる。さて愈々貞沖は五十人を連れ濱萩を案内として鈴鹿山に至り、多門丸になりすました松若と清秀を討つ。やがて濱萩は油断をしてゐる村島に近づいて、多門丸と共に彼を討つて忠義の誠を盡す。

第四 貫之は任期充ちて、八重垣姫等をつれて都に上る。途中住吉の浦について、住吉社へ參詣し、村島を討つて隠れてゐた濱萩と多門丸に會する。多門丸姉弟は「はなにこてうのまひのそで、はらからゑもんつくろひて、たまかつら打かづく、まゆのにほひやらんじやのけふり……」と神慮を鎮めるべく舞を奏する。

第五 貫之は參内して任地の事、繼景親子の事、貞沖のことなど奏上し、一々始末を命ぜられ、また「任國歸京の憂苦勞」日記につけて土佐日記と呼ぶ。八重垣姫も過去の経歴を草子に書きたいといつてゐる時、美しき若き男の姿が忽然と現れて姫に向つて戀をさゝやく。貫之が怪しみながら見てみると、それは昔の業平の幽霊である。幽霊は苛

責の責を受くるゆかりの數々の玉章を取出して姫に與へ、之をかき集めて草子として、跡を弔つてくれといつて姿を消す。

第六 其後延喜七年八月七日左大臣仲平は、貫之八重垣姉弟を伴うて參内し、業平の幽霊が、姫にまみゑた事などを書記した草子を献じ、紀友則が之を読む、「むかしおとこうのかうむりしてならの京、春日の里にしるよししてかりにいにけり……」。即ち八重垣は伊勢の内侍の名を給はり、著書は『伊勢物語』と名づけられ、多聞丸は伊勢を賜はり、捕へられて來た貞沖は首を討たれる。濱荻には一寺建立の資を下される。

【解説】 都鳥の巻物を盗んで榮えた村鳥を、忠臣夫婦が我が子を身替にまでして敵を討ち、主君の遺児をして榮華に榮えしめるといふ一種の仇討物であるが、三段目の仇討の場が、最も劇的に、巧妙な戯曲に書かれてゐる以外は、あまりにも敘述の文が多く、殊に五段目の如きは、頗る不明の文から成つてゐる。土佐日記の外題は、主人公父子を貫之が助けて、土佐日記を書いたといふことから來てゐるのであるが、それよりも主人公の遺児が、業平の幽霊にまみえて、伊勢物語を書いたといふ方に、むしろ遙に力が入れられてゐる。全體は加賀掾の正本『伊勢物語』の改作である。

【原據】 加賀掾正本『伊勢物語』を改作したものであることは既述の如くであるが、その他に物語『伊勢物語』に詞章をかることが多く、『土佐日記』にもより、又敵討の點では『會我物語』から、引いては、正保頃の『小篋』にもより、業平の幽霊の出現の點では謡曲『井筒』に負ふ所がある。

○世 繼 會 我

【體裁】 古綴文庫藏本。頗る珍本にて、他に別に所藏を見ぬ。半紙形九行三十六丁。

前附も奥附もないから版元も不明で、例の如く木下甚右衛門板かは不明である。極めて類似の版式で鱗形屋三左衛門板などもあるからである。

唯柱に「太平」の二字が見られるのは、如何に解すべきか、初行に「天下太平」の二字がある故とは思はれぬ。「太平記」の一種のつもりか。

【太夫・刊年】 木下甚右衛門刊土佐少掾正本『養老』の見返にある「六段物板行出來合目錄」中の五十四番目に本曲の名を見る。この正本が同曲であることは土佐の段物集中に、「虎少將道行」と「十番斬」の二節が含まれてゐることも裏書出来る。

原曲たる近松の『世繼會我』が天和三年九月（九兵衛版）の刊行であり、貞享三年五月刊鱗形屋版土佐段物集『色竹』（？）に其一部が載つてゐるから、本曲は貞享三年五月前のもと思はれる。

【形式・曲節付】 原曲に、別に第二段を新作して挿入し、六段としたもので、各段首尾に形式句がある。上述の如く、道行と十番斬の節事がある。

曲節付には次の如きが目立つ。殊にキリストが多い。

イロツナギ、キリスト、ヒヤ下、イロノル、イロノルヒロヒ、中キンコトハイロ、本ユリ、

片引ヲトシ、片ヤツシ、シヲル、モロナヤシ、七ツユリ、レイセイ、ヲシツケテ、
上サシムスヒ、引取本フシ、三字引、下ギンステヤツシ、ツノ地ハツミ中セメ、モツハルモツ

【原曲との差】近松作『世繼會我』の改作であるが、如何に變改されてゐるかは、大凡下に記す如くである。

第一段「扱も其後それ天下太平國家長久安全におさまる富士の山なれば、裾野の草の葉末まで……」

段尾「初は詞善四郎、後はわな／＼ふるひつゝ、行きき中々きづかはしく、見かへり／＼退出す、あさいなをも、かりをなし、時日は少のぶるともおのれら二人のやつばらな、いかでか助けおくべきと、しよふんじんのいかりをなす、かの朝いなが詞の末尤かうこそ有べけれどとて上下おしなべて皆かんせぬものこそなかりけれ」。その他は殆同文。

第二段 新作。

第三段 最初の鬼王團三郎兄弟が、互に會我へ歸ることを避け合つて物別をする所が、本曲では、兩人三浦へ行つて、朝比奈を頼み仇討を志し、形見は虎少將を頼んで送らうとて、化粧坂へいそぐことにしてある。そして「けに受けがたき人の胎」の前が「是はさておき大いそのとら御前つく／＼ものをあんするに



「我 會 繼 世」 本正操少佐土戸江

けにうけかたき人界の此しやうをうけながら」とされてゐる。やがてその節事がすむと、虎少將は互に思を語るといふことだけにして、物語はやめ、鬼王兄弟がそこへ来て、夜討の次第や、討死の有様を一の巻物に認め、虎少將に見せる。虎少將は何事も知らずに、會我兄弟の來ぬを恨んだことを後悔する。そして仇討の様を知つて直に自害せんとするを見ると、鬼王がとめて、菩提を弔ふことをすゝめ、新開荒四郎や五郎丸を討たんとしてゐることを物語る。そして馬と形見とを會我へ送ることをたのみ、自分達は鎌倉へ引返すといふ風に、非常に簡略にされ、すぐに原曲第三段の序、「さりとは戀は曲物……」の道行につゞけ、虎少將會我の里につく所で、三段目が終られてゐる。

第四 「そのうち物のあはれをとどめしは、そがの里におはします兄弟の母うへにて……」から始め、「虎少將十番斬」は其儘残し、其終を少しく詳しくして「一夜をへだてふじのすその露ときえ、名を萬天に上たりしを、いま見るやうに物がたる、とら少將がその有様、きせん上下おしなべてみなかんせぬものこそなかりけれ」と結ぶ。

第五 「そのうち二の宮のあね御前母上に近づき、あまり兄弟を、まぢわび給ふお姿、見申もいたはしく候へばつゆのまなりとも御心を……」(原曲第三段終近にあり)から始めて、原曲第三の終に及び、更に原曲第四段の序、鬼王團三郎の對話の邊四五十行を省き、荒四郎五郎丸が、虎少將を訪れて祐若を奪ひにゆく所へ、すぐつゞく。そのあとで朝比奈が来て一同で荒四郎五郎丸を捕へる。(原曲では一人は死ぬことになつてゐる。)

第六 原曲の第五段を大體採り、風流の舞の文はのぞいてあるが、原曲通りに、「あまたの遊女をめしあつめ、すでに用意をしたりけり」とあつて、そのあと、原曲の終まで飛び、「いさ／＼名残のちやうしをと……」以下大體同じく、結句は「貴賤上下おしなべてみな感ぜぬものこそなかりけれ」としてある。

更に梗概を記せば次の如くである。

【梗概】 第一 曾我兄弟が祐経を討つて後、五郎が頼朝の前にひかれて、頼朝から彼をねらふ故をたづねられる間答、許したくても、事情已むを得ず頼朝が首を討たせる次第を述べ、ついで曾我の敵を五郎丸新開として、朝比奈が曾我の遺族に再度の仇討をさせようと決心する場。

第二 新開荒四郎が朝比奈に散々悪口され、五郎丸と談合し、朝比奈の家を夜討にして、二人が富士野の悪口を返しに來たといふと、晴わざの合戦など汝等にはやれぬから、陣を退けと朝比奈がのゝしる。暫く戦つた後、新開も五郎丸もかなはぬと見て逃げてしまふ。

第三 朝比奈が鬼王團三郎に荒四郎五郎丸を討たせん計畫、鬼王兄弟が主人の形見を曾我の母へ届けるについての談合、ついで二人が虎少將を訪れ、主人が仇討をした様を知らせる場。虎少將の曾我への道行まで含む。

第四 虎少將が曾我の母を訪れて、十番斬を物語り、十郎五郎の仇討の様を語る場。

第五 荒四郎五郎丸が虎少將を奪はうとして、朝比奈等に生捕にされる場。

第六 頼朝が新開等の態度を責めて殺さうとするが、虎少將が助命を乞ふ場。

【解説】 曾我兄弟が仇討後の二度の仇討物語で、十郎を討つた新開と、五郎を捕へた五郎丸とを、朝比奈が加勢して、鬼王團三郎や虎少將等に討たしめるにある。従つてその意を徹底させようとして、江戸淨瑠璃の形式によつて六段曲として、新開と五郎丸に朝比奈を討たせることにしたのである。第三段及び第五段には、原曲との出入が多くなつてゐるが、要するに、原曲と大差はないといへるものである。原曲にある終の風流舞の詞章は省かれてゐるが、舞

そのものは行はれたことになつてゐる。結句原曲よりはわかり易くされ、文章も平易化されてゐる所は多いが、大切な所は大抵原曲をその儘残してゐるから、盗用改作の罪は許すべきであらう。

【原據】 「曾我物語」第十卷によつたもので、虎少將の「十番斬」は舞曲「八島」に於ける繼信、忠信の二人の妻が、父庄司の臨終に際して、二子が歸つたまねをして見せることに據つてゐるかもしれない。

○塩屋文正物語

【體裁】 帝國圖書館藏本。半紙形九行三十五丁。柱に「文正」とあるのみにて、前附も奥附も失はれてゐる。東京帝國大學國語研究室藏本も、古鞆文庫藏本も、共に木下甚右衛門刊にて、八行五十丁。いずれも内題は上の如くで、卷末に「文正物語卷之終」とある。

【太夫・刊年】 他の土佐少掾物の目録によつて見ても、土佐少掾の正本であることに疑はない。刊年不明。古鞆文庫本にも、東大本にも土佐少掾橋正勝の文字が前附にあり、又古鞆文庫本には、例の如く寶永五戊子初秋上旬の刊年がある。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句がある。

第一「扱も其後されは俗にいひならはす、ししやうつたなきしづのめも、其よそほひのとくにより、玉の御駕に至るとはまことなるかな其ためし……」

三段目に文正の道行、五段目に調度づくし、小鳥づくし、名香づくし、の節事があるが、凡て段物集に載つてゐ

る。

曲節付中、特に珍らしいものといへは、次の如きがある。

モロナヤシ、ヲイ上ハル、イロコトバ、イヤノリ、イロクドキ、カイトウ下リ、ホウカソウ、
サマナミフシ、一字ノミ、早色ナゲ、イヤハア、リウカヤツシ、下呂、ヤヨムメヤツシ、シヲル、

【梗概】 第一 何れの時か、阪東鹿島の大宮司に、占部の宿禰定光とて、祿徳兼備の長官がゐた。執事には木母之介宗次、と宮内三郎森近がゐる。嘗て木母之介の女房が病重き時、一醫師は、さほしかの生肝を一七日用ふれば本復するといふ。乃ち宗次は鹿を得んとして山に入る。

大宮司の領内に津の岡の文太といふ正直者があり、鹽を焼いて渡世してゐた。文太四十歳にして子なく、鹿島に申子をして歸る途中、宗次が鹿を驅出したのを見て、鹿は當社のお使だといつて、其鹿を逃がす、宗次が怒つて文太を殺さうとする時、森近が助けて、一先づ事はすむ。

やがて文太の女房は孕む。偶々文正の前へ滿珠干珠の二玉を守る龍宮の使といふ二人が現れて、「それ滿珠はしほをみつ、干珠はしほをほす玉也……」と長々と物語をして「龍王五ぎやう五色の龍神悉くつきそい、しほ木をまもりなば大福長者と名をあらはしめて慶祝をなさしむべし」といつて彼に姿を消す。

第二、其後天の恵あり、夜鹽をくみ晝木をこり、文太夫婦はいつか長者となり、名を改めてぶんしやうつねをかといふ。十五と十四の姫を二人もつ。姉を蓮華御前、妹をはちすの前と呼び、美しいので八ヶ國の諸大名は心をかけて文を送るが、姉妹はそれを顧みず、人と生れたからは都の人と交りたいと祈る。

處が坂東の國司、ゑふの藏人道重は此姫の事を噂にきいて、大宮司に頼むべく定光を招く。けれども娘が父の不興を蒙つてもとて承諾せぬから仕方がない。此事ばかりはと大宮司は國司の頼を斷はる。木母之介宗次は嘗て文正を讒言し、今は浪々の身であつたが、國司の望をきくと、我身の立身を考へ、藏人を訪れて、大宮司が御望の話を承引せぬのは、自分の嫁にせん悪心がある故だ、彼を夜討にして望を達せられよと告げる。國司は喜んで、其夜兵三百騎にて大宮司を夜討にする。寄せ手の大法師の爲に、大宮司は大分の勢を討たれるが、宮内の三郎森近が大力を以て法師を討殺し、敵を追拂ふ。

第三 藏人は敗北して愈々胸をこがし、更に定光文正二人を滅さうとし、先づ都に上つて大宮司を讒奏する。處が關白は今迄「じゆんしよく第一の神主」と都まできこゑたに、彼が大悪人とは怪しいとて勅使を以て定光を招く。定光が如何程辯じて木母之介が裏をかく時、明神の罰があたつて、木母之介は忽然血を吐いて死ぬ。國司は引立てられる。

關白の子中將年道は文正の娘の事を噂にきいて戀慕ひ、兵衛介吉勝につれられて、ともかくも東に下る。(こゝに道行)戀の重荷を身においし、しな商人のなりすがた心かろしや我ながら思ひにやせしおもかげのうつるもつらし鏡山……たびのやどりをかしまなる津の國にこそつかれけれ……」。

第四 睦月の初の常陸國の神事のあるといふ前夜、文正の姉姫蓮華御前は父母の命にそむいてばかりゐるも心苦しめて、心に望む縁を求めべく、鹿島明神に詣り、はなだの帯を神前かけると、丁度關白の息中將も來て、同じ願をかけてゐたが、美しい一つの帯に書いてある歌をよむと、「おなじ世をかけてたのまんひたちおびむすぶかいある

ちぎりなりせば」とある。中將は我と同じ望をもつ人の歌らしいと思つてゐると、神主が出て来て、人の歌を最初に讀んだ者との間に縁が結ばれるのだといつて慶賀し、側にあつた姫こそ中將の妻だといふ。蓮華御前は神主の言葉を



「風道野小」と「集今古」 本正縁少佐士戸江

疑ふが、此時神主は此神の由来を語つて、少しも疑のないことを證明し、神によつて二人の間に縁が結ばれたことを祝うて姿を消す。

第五 中將はやがて二人の従者をつれて、色々の品物を携へ、商人の體にて文正の家に至り、「調度つくし」、「小鳥づくし」、「名香づくし」にて、品物をかぞへあげて文正を喜ばせ、一切の品物を買取られ、姉姫の望にて二三日滯留する事となり、遂にめのとの導にて、姉姫と深く契る事となる。

第六 その中に中將夫婦を迎への勅使が来る。商人の妻になつたとて心配してゐた文正の妻も、大官司も、商人こそは中將とわかつて、大に喜び低頭し、都に上つて一同榮えることとなる。

【解説】 正直者の文正が富貴になり、申子をして二人の娘をもつ、共一人を國司が強奪せんとして失敗する。又關白の息中將が商人に扮して来て、鹿島大明神の引合にて、姫を手に入れる。都人と望んだ姫も望がかなふ。妹姫は入内する。萬事かめでたし／＼に終るといふ、所謂妻女横領物語と成金物語とを組合せたものである。

冒頭にもある如くに、富貴の徳によつて、玉の輿に乗るといふ物語であり、徳川時代には原作を正月の讀物としたといはれるほどよく知れてゐたので、之を脚色したものであると思はれる。

【原據】 お伽草子「文正草子」を脚色したものである。又「常陸帯」の段は、謡曲「常陸帯」を殆んどその儘取入れてある。

○鎌倉勇將 立石源氏 萬代水鏡

【體裁】 帝國圖書館寫本。八行四十四丁。版元も不明。

【太夫・刊年】 卷末に「此一冊は土佐一流趣考古今著聞集白鷹記東鑑此系一本より／＼鑿て作者也、享保辛亥盛夏尙友齋尙水子」と記す。参考とするに足らん。尤も享保辛亥は十六年であるが、もつと前の寶永正徳頃のものか。結構から見ると明かに元禄以後の物らしい處がある。

【形式・曲節付】 六段曲。形式句は大體にある。

第一「扱も其後夫柔は徳剛は賊威多き時はつまつくとは、是三略の詞なり、まことなるかや人の世のためし多かるいくとせ、さかへをつくる鶴がおか、かまくら山の將軍……」

寫本主の道樂か巻初に次の句がある。

- 第一 池の立石はち、ぶの勇力
- 第二 隅田川野伏は本多半澤働
- 第三 淺草戀慕は年來敵討
- 第四 順禮道行もかけの橋の一念

第五 入間野追鳥狩は大舟の引合

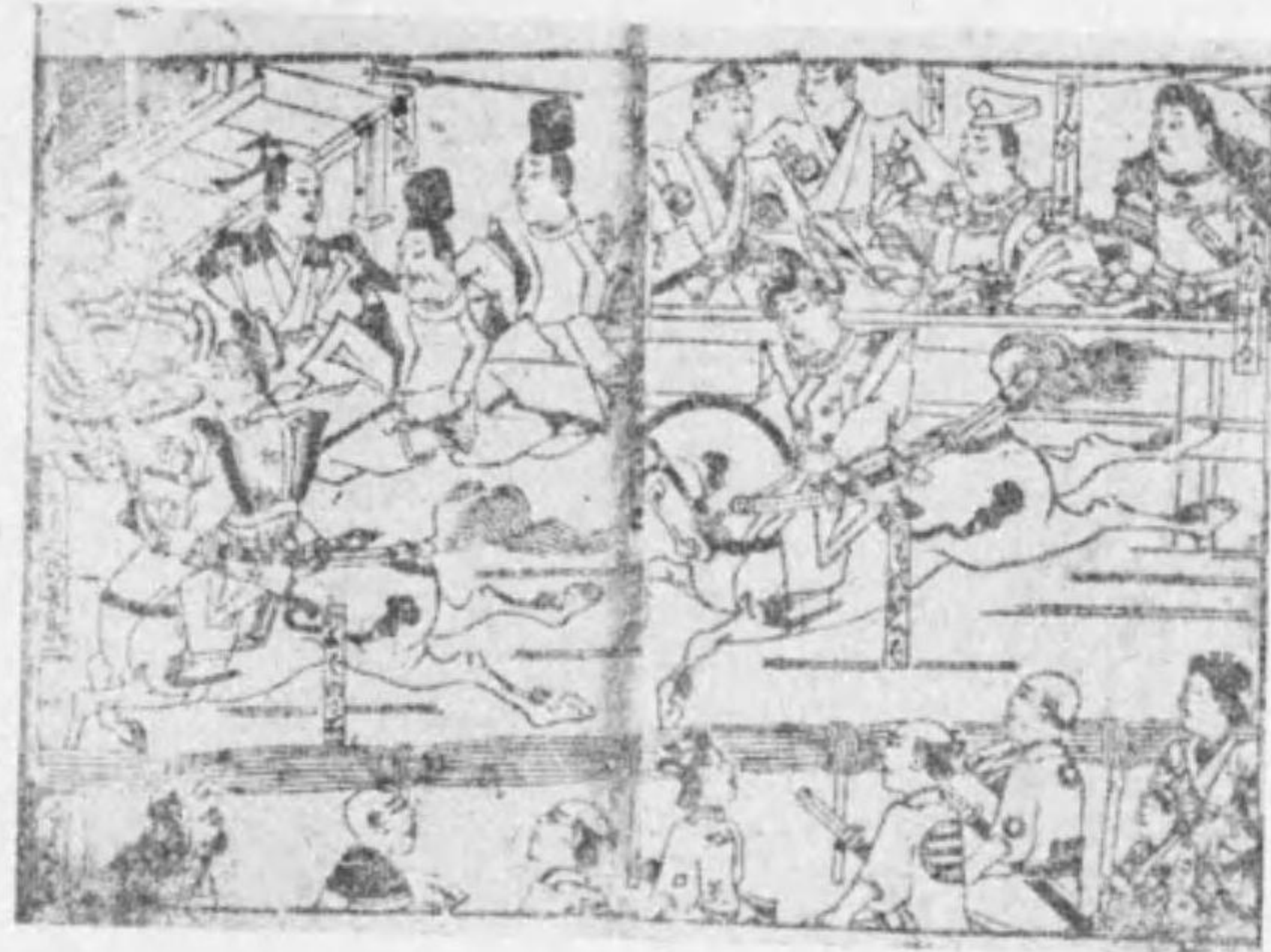
曲節付は省かれてゐる、四段に姫の巡禮の道行がある。

第六 白澤待ぶせは古郡朝比奈力

【梗概】 第一 頼朝が二階堂に池を堀らせ、見物に出た時、梶原は或大石を見て武藏の住人長井秀虎が、日本一の大力士だといふので、それに石を立てさせようとするが、動かし得ずして池に落しかける。此時畠山重忠が命ぜられて何の苦もなく水石を立てる。すると頼朝は秀虎と相撲を一つとつて見よと重忠に命ずる。辭することが出来ずして、とつて見ると、秀虎は苦もなく倒されて悶絶する。

やがて例の庭石が二つに割れて中から鬼形が現れ「我こそ平家のおんねん、つもりて石と成、折をうかこふ源氏のうん、今こそかぎりと鐵杖ふり上げとんでかゝる」を、重忠が太刀ふりあげて追ひまくり、阿闍梨靜空が、五大尊五大力の呪をとなへて退散さす。

第二 平家の殘黨で、山木判官兼隆の甥、半藏兼氏といつて、奥州に隠れてゐたのが出て来て、戸塚源太と共に、頼朝の遊園に乗し



（談館書圖國帝） 圖一第「攻城山立房安東阪」 操少佐土

て、仇を報ぜんとして長井秀虎と謀る。

又淡路の重國の子三くさ丸は父を長井に討たれたので、靜空阿闍梨を頼つて仇を討たうとする。けれども靜空が三

くさ丸の微弱を心配してゐると、三くさ丸はいつの間にか、逃出して秩父に歸る途中の重忠にたよる。其時、長井秀虎や山木兼氏等は重忠に襲ひかゝるが、重忠は難なく敵を蹴散らす。

第三 入間の郡司の娘藤の前は寺まゐりをしての歸るさを、道中の景色を見ながらあるく。（こゝが道行風の文）。藤の前が淺草で茶屋に入つた時、山科三郎と共に三草丸は隣の茶屋にゐたが、風の爲に姫の手拭が三草丸の膝にとんだのが縁で、姫は三草丸に近づく。それを見ると山科は二人をつれて茶屋の二階へ上り、歌女を招いて流行唄を歌はせる。「花かほんの匂ひならば、色にあいてはめかれぬはづを、色にあいてはよそにちり行戀衣、きて見よ今のうきよ人……」。

丁度その頃長井秀虎は、淺草觀音別當坊で養生してゐたが、日頃から思ひをかけてゐる藤の前の姿を見ると、茶屋の二階へ押上つて、亂暴にも三草丸を罵つて姫を引立てようとする。戦の後三草丸は「親の仇」といつて、秀虎に斬つてかゝる。三草丸が危い時、暫く戦を見てゐた群集の中から八尺ばかりの小林の朝比奈三郎が飛出して、秀虎を押へつけて、三草丸に首尾能く父の仇を討たせる。

第四 建久四年の春、頼朝は武藏野に追鳥狩、ついで那須野に狩をすることになり、入間の郡司は用意を命ぜられる。

此時、武藏中野の朝日長者玉川昌運は入間の郡司に金が入れば貸す。正觀寺の藥師堂の藤の木の下に金千兩錢十六貫かくしてあるからと語り、一子忠太の爲に藤の前を貰ふ約束をする。その話を立聞した昌運の下部は、いつか千兩箱をぬすんで逃亡する。それを知ると昌運は驚いて下部雪五郎の行衛をさがさせる。永井秀虎の郎等忍之丞は、今盜

賊仲間に入つてゐるが、千兩箱を盗んだ雪五郎は彼の處へかけつけ、酒宴を始める。

丁度そこを通りかゝつたのは巡禮中の藤の前である。忍之丞と雪五郎とは乳女小萩と藤の前とを強奪して去らうとする。そこへ来たのが玉川昌運である。彼は雪五郎を見ると捕つて押へ、姫を郡司の娘藤の前と知ると、強ひて我が家へつれ歸る。乳女をつれて逃げた忍之丞は、淀橋邊にて乳女を口説き、反抗されて刺殺した時、昌運が姫をつれて來るに遇ふ。忍之丞が逃げんとする時、車輪の如き火焔が飛來つて悶絶する。と見ると橋の上には、殺された筈の乳女の姿が現れ、姫を秩父へ送るといつて火焔となつて姿を消す。忽ち黒雲が下り、姫の姿を隠す。折柄本多親常が、重忠の命を受けて、狩の場所檢分に通るかゝり、姫を見つけて秩父へ送り届ける。

第五 其後山木兼氏は重忠を討もらし奥州へ逃歸りゐる中、平家の侍越中次郎盛繼が信州にゐるときいて使をたて頼朝の狩の折を見て、共に忍んで頼朝を討たうとする。

やがて三月には、頼朝が入間に狩を備し、暫く狩があつて後、酒宴の最中櫻井五郎は、本朝鷹狩の初を語らしめられる。「夫本朝に放鷹の初といふは難波津に、さくやこの花冬こもり、仁徳帝の御時三宅のあに古と云ける人、異なる鳥を奉る……」と語り終つて後、再び狩となり、三くさ丸は頼朝に紹介され、人間の郡司の姫との結婚を許される。やがて頼朝の歸途、隅田川にて、次郎兵衛盛次は、小舟に隠れて頼朝を討たんとして果さず、朝比奈三郎と共に小舟引をなして舟をつぶし、遂に朝比奈に討たれて捕はれる。

第六 頼朝は更に那須野に向ひ、宇都宮を過ぎて白澤にかゝると、山木軍が攻寄せるが、兼氏は戦の後遂に捕はれる。

【解説】 頗るごた／＼と込入つた筋であるが、要するに平家の殘黨山木兼氏が源氏を討たうとして却つて討滅される物語に、その敵の一人に父を殺され、今また戀人藤の前を奪はれようとしてゐる三草丸が、朝比奈三郎の助によつて首尾能く仇を討ち、三草丸は頼朝に許されて戀人を手に入るといふ物語を結びつけ、その間に盜賊物語や怨靈物語などをはさんだものである。

○寛 潤 洛 陽 壽

【體裁】 帝國圖書館藏本。半紙形八行、四十八丁。前附も奥附もあり、内題に上記の如くあり、奥に「寛潤洛陽壽卷之終」、「木下甚右衛門刊」。柱に「洛陽」と見ゆ。

【太夫・刊年】 前附に寶永五戊子初秋上旬、土佐少掾橋正勝とある。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句あり。

第一「さても其後、神代の風の吹傳ふ仁王既に五十代、桓武天皇の御時、名に負ふ不破の内親王と申せしは、聖武天わう女三のみや……」

第三段に、京名所物語、第四段に道行、第五段に人形埋めの節事がある。

【梗概】 第一 桓武天皇の時、不破の内親王は御つれ合の君が御謀叛あつた爲に、別れて九重に歸らせ給ふ。嘗て文子姫と共に比叡山に御通夜あると、姫は供奉の菅原左中將道長を口説かれる。そして「わが母上の内親王、何とぞ父の大君のあたまを報せん」とし給ふ故、味方になれ、兄氷上の大貳川繼は民間にて、機を待つてゐるとて、大事を語

られるが、道長が従はぬのを見ると、母の内親王は従はぬ道長を引捕へさせる。道長の後見ばんせい太郎でるとしが遮るが、此時の將軍田村利仁が来て、密に太郎をなだめ、時をまてといふ。内親王は道長を都へ引立てる。

第二 内親王が道長を讒奏されると、心の儘に計らへとの論旨が下る。「いたわしや道長はもみぢのこすへにからめられ、きゆる斗を松かけの雪にひとしき御手足……」をくるしめられてゐると、文子姫が来て、自分故にかくなるかとわびつゝ、一先づ此處を落ちて、行末は我と二世の契を結べ母上の前はよきにはかるといふ。そして丁度道長を逃した處へ、内親王は道長を殺さうとして来て、其姿なきを見ると、田村利仁の裁きが悪かつた故ならんとて、我陰謀の露見を恐れて、利仁の邸を攻める。萬歳太郎が代つて防ぐ中、勅使が来て、内親王を叛逆者として、都を追出せとの論旨を傳へる。その中に内親王軍は逃げ去る。

第三 「其後名にし負たる洛陽の清水へんのかくれがに男さかりの音羽の小さく、ゆめはさめすや一つさし……皆喜の色みせてひらくや梅が小路よりかぞへていざや柳さくらをこぎまぜて……清水のしるべの茶やにいすだれあけてうちにぞ入にける。」(京名所の節事)。

田村丸の一人娘みちよ姫は、今日清水に詣で、男姿の品定めをする。折柄觀音に祈る道長の姿を見て、日頃の戀を今日こそとけばやと、侍女をして道長に酒をすゝめしめ、やがてわが幕の内に案内して口説き落す。そこへ「かよふ心の物いはぬ思ひを人に見せばやな小島のあまの濡衣かはくまなき涙を思はぬ人に見るめこそ……」(節事)と、我一身の思ひにたへかねた賤の女らしきが瀧の水を汲みに来て、道長を見つけて寄り添うて泣く。これこそ文子姫のなれの果である。文子姫は思をかき口説いて道長を連れ去らうとすると、みちよの姫が遮る。争の最中へ酔つて歸

つた音羽の小作が来て、道長に味方し、みちよの姫を背負つて逃げさせる。文子姫が怒つてもがく時、小作は遂に文子姫を刺す、そして死ぬに先立つて、身の零落をなけいた詞によつて、妹の文子姫だとわかると、小作は驚いて、自分が兄の川繼であることを語り、道長を敵として追かける。

第四 道長はみちよの姫の父の下館へと、鳥さしに姿をやつして嵯峨へいそぐ。「ひとつ鶴ひよくの中のさい鳥さいたさしはうき名をいとふ風俗の殿ににせてもなよ竹の、さし竿……大井川きしのかたにつき給ふ」(道行)。そこに鶴飼の女によつて鶴遣の有様を見る(節事)。やがてその鶴飼の女は文子姫の怨靈となつて、道長等を襲はんとするが、道長は名劍青龍を揮つて追拂ふ。そこへ川繼が手下をつれて道長を追かけ来る。かくて道長が危い時、稻村から萬歳太郎が出て来て加勢し、遂に川繼を討滅す。

第五 不破の内親王が、戸無瀬の瀧にて御門を調伏されてゐる時、傳教大師は側を通りかゝつて、不心得をさとし遂に教化して、大内へ申直しをはかる。

桓武天皇には、不思議の靈夢を見させられ、八尺の人形に甲冑をもたせ、將軍號を賜ひ、東の方に埋めよとあつたといふので、今その儀式を行はせられる。「まれなる時にあをによしならの都を山城のけふ九重にうつされて……都は八千代萬代の壽〇きぬ御有様……」(節事)やがて王城の地を永く鎮護あれと御祈がある。(こが東山將軍塚である)お悦の所へ、傳教は内親王の罪御許を願出るが、内親王は御門に近づいて暴舉を取てせんとし給ふと見ると、將軍塚の蔭から田村利仁が出て妨げる。内親王は已むなく再舉を目論んで姿を隠される。

第六 田村利仁は道長の罪なきを奏して、みちよの姫とめあはせる。そこへ左中辨公綱が不破内親王を仰いで、鈴

鹿山に立て籠ると報じ來り、田村利仁が命ぜられて討伐に向ふと、内親王は嘗て討たれた立えぼしの靈が乗移つたものだ。秋津島根を魔國とせんとして、又失敗したは残念だといつて、大魔王と姿をかへ、數千騎に身を變じて戦ふが、その時千手觀音が光を放つて千の矢先を雨あられと降らせると、魔王の姿は消えうせる。

【解説】 珍らしくも不破の内親王の叛逆物語で、その間に内親王の妹君文子姫の菅原道長に對するはかなき戀と、みちよの姫の戀の勝利とを纏ひませたもので、最後に、内親王を鈴鹿山の立烏帽子の怨靈の乗移つたものとしてある處に、内親王の叛逆もさこそうなづかれる。

【原據】 鈴鹿山の魔を題材とした土佐物に、別に「鈴鹿山大獄丸」といふがある、それと多少の関係がある。其他の田村丸関係の古淨瑠璃に多少の関係はあるが、それらに直接深い縁があるとは思はれぬ。

○頼朝遊覽捕

【體裁】 古鞞文庫藏本。帝國圖書館其他にもあり。題簽に「ゆふらん捕」とある。半紙形八行四十八丁。奥附に木下其右衛門刊。

【太夫・刊年】 奥附に土佐少掾橋正勝の名があるが、前附がないから刊年は何もわからぬ。けれども、結構の拙さからはあまり後のもではなさうに思はれる。

【形式・曲節付】 六段曲。各段首尾に形式句がある。第三段に「金澤八景」、第四段に、「遊屋萬壽の道行」、第五段に、「鎌倉名所の舞」の節事がある。

曲節付では次の如きが珍らしい方である。

玉野フシ、シカフシ、片ヲロシ、片タヤツシ、引取本フシ、本地、色三ツ引、片ナヤシ、
中ギン、リウクワフシ、ギンガハリ

第一「扱も其後右大將頼朝と申はそも、ちうこうのとくふたいにして、弓箭のこうれんめんたり……」

【梗概】 第一 頼朝征夷將軍となつて、時政の女朝日の前を室とし盛へてゐる時、女房の中に唐糸といふがあつた。かれは木曾の郎等手塚の別當の女にて、太郎光盛の姉である。嘗て義仲の妾であつたが、くり蠣の功にて海野七郎に與へられ、萬壽姫を生み、其後娘を光盛に預けて、朝日の前に仕へ、木曾の孝養に頼朝を狙ふ。即ち光盛と密に心を協せ、他の木曾の餘類、伊賀の齋藤五國遠、同齋藤六國武と共に圖る。丁度唐糸から招の狀が來ると、國武は先づ鎌倉に向ふが、途中箱根山にて、朝比奈三郎に遇ふと、兩者の間に争が起り、馬を投げてとりやりするなどの事あつて、遂に國武は朝比奈に首を討たれる。

第二 國武は死ぬまで名乗らなかつたので、朝比奈は其首を鎌倉に持歸り、事情を述べると、時政はその首を見て齋藤六の首と判定し、木曾の陰謀あるに相違なしとて、首をさらして餘黨詮議をする。

頼朝の御臺が庭の花見をしてゐる時、數多の女郎の間に、一種の花争が起り、花戦となるが、唐糸はその戦をとめて御臺からほめられる。

やがて御臺一同風呂に入る事となり、唐糸も湯からあがつた時、三十二歳なれども猶艶なる姿であるのを、風呂奉行、梶原景時が垣間見ると、野心を起して口説き立てるが、唐糸はなか／＼離かぬ。そこへこれも風呂奉行の土肥實

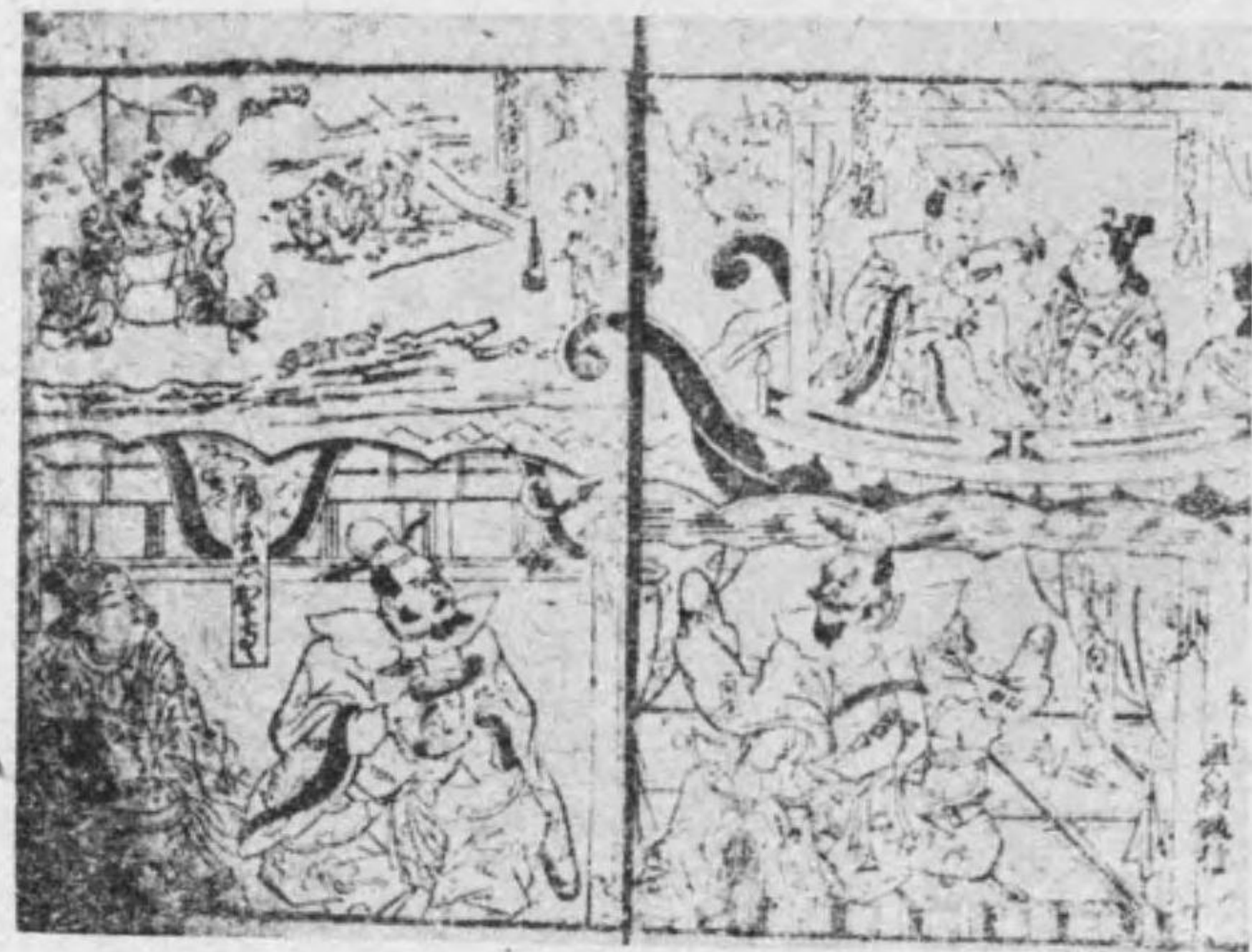
平が来て、唐糸の着物に懐剣がそへてあるを見て怪しみ、人々を呼んで唐糸を捕へしめようとする、唐糸は梶原の刀をぬいて切つてかゝるが、遂に實平の爲に生捕にされる。梶原は氣まづくその間に姿をかくす。

第三 後にて頼朝が太刀を調べて、唐糸を木曾の餘類の曲者とにらみ、かの介宗持に預けて牢に入れる。頼朝は風呂騒の時、江の島の別當が来てゐて、難を逃れたからとて、やがて江の島辨天に参詣する。

頼朝は江の島へ参詣して後、三浦の館に寄り、三日を遊び、その間に金澤八景の物語をきく。「三浦みさきの入鹽に月はいらねどたごへ川さすて引てにかけさしてしろく見ゆる城が島、さをして爰にあそびかさき……」。そのあとで酒宴となり、朝比奈は舞ふ。「それふねのおこりを尋ねるに水上皇帝の御宇より起つて、ながれくわてきはかりごとによれり、こゝにしゆうといへるげきしんあり……」。舞が終つた時、遠州濱名の三郎が来て、小舟を御座舟に近づけ、手塚太郎光盛が、落人を集めて岡崎城に據つてゐると告げる。畠山重忠が直に討伐を命ぜられて立つ。

第四 遠州池田宿の長者を遊屋の侍従といふ。嘗て宗盛につかへてゐた白拍子で、今家にあつて大に繁昌し、唐糸の娘萬壽姫を子として養ふ。處が萬壽が母唐糸を慕ふので、遊屋は鎌倉に萬壽をつれてゆく。(こゝに道行)唐糸に深くそみにし中なれば、しんくになき初旅の、梅の花がさ投入れて、池田の宿を立出てこがれゆくこそわりなけれ……鎌倉山にぞ着給ふ。

唐糸の牢は石にて疊まれてあるが、萬壽は牢の前にて酒を賣り、番人に酌をして酔はせ、牢の鍵をぬすんで、母を引出し代つて自分が牢の中に入り、母を逃れしめようとする。此様を見ると、牢守宗持は萬壽の孝行に感心して頼朝に訴へる。



唐 玄 宗 「唐 玄 宗」 奥村政信 畫 (藏大帝京東)

第五 宗持が三人のことを頼朝に訴へると、頼朝は喜んで三人を迎へ、唐糸の罪をゆるす。唐糸は頼朝の恩を感謝

し寛仁の態度を喜び、遠江より兄手塚太郎の處へ「かゝるゆかしき大將へ、弓引たまはゞ天罰にて本望はとげらるまじ、然るべくは腹切つて姉が御恩を報じてたべ」と云ひやる。

やがて唐糸萬壽遊屋の三人は舞はしめられる。(こゝに鎌倉名所の舞がある)「時もやよひの末つかた、やみはあやなし夜さくらや、おにはの花の枝ごとに、御所の御紋のあかりを立……四せつの四きはまの前に八つ七ごうにわけられたり、春の初のながめには霞の衣花のかさ、きつゝなれきて遊ぶ成、其竹しなふ藤がやつ……」。終つて又萬壽が舞ふ。

第六 畠山重忠は命によつて手塚の城をせめたが、なか／＼落ちぬ。そこへ唐糸の手紙をもつて朝比奈が到着する。やがて戦の後、手塚は姉唐糸の手紙を見て、腹かききつて死ぬ。

【解説】 外題は頼朝中心になつてをるが、其實は木曾義仲の遺

類唐糸と其弟手塚太郎が、頼朝を恨み狙ふて、遂に敗北する物語である。頗る結構のまづい、全く断片的なスケッチのつなぎ合に過ぎぬが、中でも唐糸が捕はれる場と、唐糸の娘萬壽が牢にある母をすくひ出す場は頗る興味がある。

そして唐糸が罪や許されるのも愉快だが、之について唐糸母子と遊屋三人の舞はされるのはのんびりしてゐて面白

【原據】第二段の花戦、舟の物語は萬治三年の『くわてき舟軍』によつたもので、『遊屋物語』の遊屋をかつぎ出して、唐糸を救出す爲に、娘萬壽を活躍させる處は『小袖賣』の女主人公をまねさせたものである。

全曲はお伽草子『唐絲草子』を脚色したものであるが、遊屋を萬壽の乳母の代りにもち出したり、唐糸が罪をゆるされるあたりは、草子の方が遙に自然に行つてゐる。

○京 太 郎 (参考)

土佐少掾橋正勝の物語にて、木下甚右衛門が刊行した八行本乃至九行本の表紙見返に、(四十九)「今川かつら」(五十)「京太郎」といふのが見られることがあるが、共に今日まで正本を發見し得ないものである。従つて此二曲の内容が如何なるものであるかを知ることが出来ぬが、お伽草子の一つに「京太郎」といふのがある。土佐物の『京太郎』は或はお伽草子の『京太郎』と關係がありはせぬだらうか、かうした想像に立つて、お伽草子『京太郎』の内容を見ると次の如くである。

【梗概】「用明天皇記白神武天皇三十代欽明天皇第四皇子橋豊日尊東宮におはしましける頃」、筑紫より宮仕へに參れるものどもの話をきいて、太宰大貳のおと姫の美しさを思ひ、見ぬ戀に憧れて、遂に忍び出で、筑紫通ひの船に乗つて西に向ひ給ふ。けれども船賃などもたずして、船の仕事をしつゝの乗船なれば、手などもあれて勞にたへず

船中に臥したまふと、船主は「わが身は京者といふが、ふつうのものよりもけたかく、大きに顔色も人々しく尋常なれば、ただことをばよもせじとて、のせたてまつりたれば、極めて不當人にありけり」とて、擢をもつて打擲する。かくて苦みの旅を、やつと太宰府について、京太郎と名のつて、ある伏屋に入給ふ。

皇子その家にまします中に、笛を取出して吹給ふと、かの姫君いかなる風のためたよりに聞きしものか、笛の音をたよりに賤が垣根に來りて之を聞き、感に入つて、遂に隣の家にて琴をひく。「おもひかけける琴のをによりあはせぬる笛竹のよゝの契もくちすして、王事もろき事なきうへしたかひ給ふ、御めくみためしふかくそおほしめす」(すぐ次へつゞく)「さて皇子都を御出ののちは一天のなけき九重のさはぎとなり、廿四社の大神一百八十餘社の神祇に御願圓滿とそ祈申させ給ける、すなはち宇佐宮にて廿番の矢房馬いたてまつるべきよし勅使をくださる、太宰大貳勅をうけ相觸ければ、九州國役の輩われおとらしと出立けり、都督長吏も御願に應じて役をつとめむと擬する處に、さりぬへき射手なかりければ、とかく沙汰しけるを聞食、京太郎いてを望申されければ、あるはわらひあるはよろこぶやからも有けり、所望おさまりにければ、其日に至てこと調て出給ふ、器躰ことから乗馬のすかた弓のもちやうゆゝしきけいきなり、京太郎棧敷の前をうちとほり見參かまへてのち、すてに馬場にうちいてたりけるに、竹笠のを俄に風に吹き上られて龍顔もあらはに見え給ふ、勅使以下官人等おとろきさはきことくさしきをこほれおちて恐怖する事限りなし」。

太宰の大貳は此二三年の間、皇子とも知らで、ゆるかせに扱つたことを謝じ、「一天の君のわが掣君にておはしましけるかたしけなさとて先非を後悔」する。勅使は直ちに皇子と后をおつれ申して都にかへり、龍田山をこえ、二

上の邊にて、后には産氣づきて、皇子御誕生あらせられる。鷹子親王と申す。此皇子御成長の後、舍兄聖徳太子に申させ給ひて、御産所にお寺建立あり。禪琳寺とて當麻寺の内にあり。この妃三人の王子ましまし、二十八歳にておかくれある。

【琉球の京太郎】 折口信夫氏の論文「偶人信仰の民俗化並びに傳説化せる道」(『民俗藝術』第二卷第四號昭和四年四月號に所載)によると、沖縄では、内地から流れて行つた繼母繼子を主人公とした、人形芝居を京太郎といつて、後には人形舞はしのことを京太郎といふやうになつたものらしい。つまり繼母繼子の話を京太郎といふやうになつたといふのだが、それと此京太郎物語とは、何んだか聊か差があるやうに思はれる。「京太郎」はむしろ用明天皇の山路物語に近いものである。用明天皇物語だとて、繼母が繼子をいぢめる物語であるといへばいへるから、琉球の京太郎物語と差はないといへるかも知れないが、琉球物語の内容が明かでないから、此「京太郎」と同様のものであるかは不詳である。(古淨瑠璃新研究、延寶篇参照)

【所在】 それは兎に角此京太郎物語は、笹野堅氏編『室町時代短篇集』(昭和十年十一月刊)に載つてゐるもので、元來二三丁の短篇かと思はれる。そして此「京太郎」の終には

右原書二條家爲右卿之御筆二十四物かたりの中用明天皇御事京太郎物語と有之

明治二十二年八月寫

中山鹿山

と記され、此處にも『京太郎』が、舞曲『烏ぼし折』の山路の草刈笛の話と同物であることが暗示されてゐる。

○なよせ色竹(参考)

【體裁】 京都帝國大學國文研究室藏本。半紙形八行、九行、十行、十一行混合の四十六丁。前附に「通油町佐藤四郎右衛門梓」と版元が記されてゐる。本文の丁附は皆一二三を繰返されてゐる。

【刊年】 前附終行に「元祿六年酉初春吉日」と版元の上に記し、太夫名は見えぬが、内容の外題は全く江戸土佐少掾の語物に模してある。曲節も大體似せてあるから土佐少掾的のものか。

【内容】 前附に「なよせ色竹目録」なるものが一丁半あつて、二丁目の裏に半丁ほど序文がついてゐる。目録の題の下には、「讀茶屋不殘」なる文字があり、又各題目の下には吉原茶屋の名が連ねてある。これは目録そのものに於ても、本文の外題下にも同様に行はれてゐる。

内容全體が、茶屋の内の女郎の名寄で、標題からが一種の廣告とも見るべきものである。本文の文章は大體土佐の段物集の原文に似せようとしてある。

序文に「先書色竹に少しも相違の處なし」とあることから、所謂「色竹」と外題する土佐の段物集がこの原本で、それが可成り早く出たものである事を知り得る。(「色竹」参照)

次に参考の爲に目録及び序文を載せておく。尤も目録中、各題名の上に註した括弧の中の文字は原本になく、便宜上、柱の文字から推定して、段名の所屬外題を明かにする爲、特に記した曲名である。又茶屋の名で、二三づゝ一緒にかためてあるのも見えるが、それは原本のまゝである。つまり、同一の段に、二三軒遊女の名を讀込んだものであ

る。

なほ重ねていふが、本文の内題も、その下にある茶屋の名も、目録と同様であるが、その中最初の「祝言上るり」は本文では「しうけんほうらい」とあり、「浅草うき世ひやうし」といふのは、本文では「名よせ浅草浮世ひやうし」となつてをり、「後深草院梅見車」は本文では「難波物語」と冠され、又「花世舞の段」は本文では「關東小六」の前へ入つてゐる。製本の際に動いたものか。

なよせ色竹目録 三十九間 不残

△曲名

○段名

- (吳越軍談) 一 しうげん上るり 二丁目松屋次兵衛内
- (鹽屋文正) 一 てうどつくし 同丁いせや茂兵衛内
- (現在松風) 一 松風鹽くみの段 同丁花や長次郎内
- 柱(大全) 一 うらづくし 角丁つたや市左右衛門内
- (和田酒盛) 一 虎御前待宵の恨 同町卍や庄三郎内
- (世繼會我) 一 虎少將仕方十はん切 二丁目巴や、、内
- (融大臣) 一 そめいろつくし 角丁菱や六兵衛内
- (融大臣) 一 とをるの道行 同丁まんしや庄右衛門内
- (源氏十二段) 一 四季のてう 角丁孔雀や庄右衛門内

○柱(市のや)

一 三十三所順禮道行

二丁目つの國や内

○柱(市のや)

一 浅草うき世ひやうし

同丁四つめや内

○柱(大全)

一 風流茶の湯

角丁鶉や宇兵衛内

(つれく草)

一 兼好花うりの段

同丁越前や三太夫内

(難波物語)

一 後深草院梅見車

二丁目いせや伊左衛門
をもたかや喜三郎内
平のや伊兵衛

(難波物語)

一 あしやの里名所道行

同丁ひしや藤十郎
永らくや惣左衛門内
まつや吉兵衛

○柱(花世)

一 花よ舞のたん

角丁ふじや八左衛門内

(上洛義経記)

一 しづかすかたみのたん

同丁加賀や市左衛門内

(上洛義経記)

一 よしつね忍物がたり

角丁山屋傳兵衛内

(巴太鼓)

一 ともゑたいこ道行

二丁目むかてや次郎右衛門
かりかねや三左衛門内
すゝきや平兵衛

(巴太鼓)

一 同たいこのきよく

同丁兵庫や左次兵衛
かきや市郎兵衛内

(あたか高館)

一 あたかくわんじん帳

同丁中村屋十右衛門内

(あたか高館)

一 高たち辨慶舞のだん

同丁佐渡や六兵衛内

(一心二河白道) 一 さくらひめの道行

角丁めうかや吉右衛門内

(大織冠二代玉とり) 一 大しよくわん田うへのだん

二丁目 あつまや七兵衛
まんしや五兵衛内
あふきや忠兵衛

(色欲三世相) 一 三世相洛陽名所物かたり

二丁目 きりや半左衛門内
ひやうこや庄衛門内

(關東小六) 一 關東小六風流道行

同丁やまたや内

或人懐中して是をあたふ自是するに家々の女郎を評判し秋の月のくまなきになをひかりをまし青柳のたをやかなるに言葉の花をさかせ名をかきあつめて上りとなし章をさしそれ／＼の名題を付たりふし拍子清濁等微塵のあやまりなく先青色竹にすこしも相違の所なし予ひとりたのしみにせんもほいにあらず世の人のもてあそびともならんかしと名よせ色竹となりのりて是をひろむるおもしろしとも中々申斗はなかりけり

通油町

元祿六年酉初春吉日

佐藤 四郎 右衛門 梓

【解説】 本書は曲節付はつけてあるが、本當の淨瑠璃ではなく、又淨瑠璃の段物集でもないが、淨瑠璃殊に土佐淨瑠璃が、如何に江戸に於て流行したかを知るに足る材料としては好個のものである。

要するに、吉原の遊女屋三十六軒の、各遊女の名を取つて、一軒若しくは二三軒毎に、淨瑠璃の段物風にまとめた宣傳文ともいふべきもので、その文章はそれに都合よき江戸土佐淨瑠璃の段物を求めて、之に模倣し、之をつくりかへ、段名も原曲の段名その儘をかりたものである。

されは之によりて刊年若しくは上演年代を知りがたき土佐淨瑠璃の相當多數が、元祿六年には、否もつと／＼以前に既に上演刊行されて、廣く世にもてはやされてゐたものであることを知り得る上にも、貴重な資料となるものである。

○出世義政

【解題】 原本未見なれども、京大國文學研究室藏、段物寄せ本の一にて、かゝる外題のものがあつたと思はれる。本文九行、木下甚右衛門板。

【内容】 その一節をぬいて聊か面影をしのぶ事とする。

大 黒 舞

まづ初夢の寶舟。さんごの。らん玉の梶波靜なるうなばらや、聲も。のどかにうたふたり。長きよの、とをのねふりのみなめざめ。波のり船の音のよき。一にあいきやうゑ顔よく。寶の山へほを上て。つみくる。玉の。二につことゑみのまゆ。あかきは。三に酒のとが。四つ世の中にぎはしく。五こく成就。ほにほがさいて。ひつちやおくていやましに。八方にやつくら。四方に四めんの藏を立て。おさめしよねは。壹萬壹千百石。みくらのうちにつみをけば。家もさかへそふよの。榮ひさしき。松と竹。いもせのちぎり。しげりあふ中においたつ。子寶に。世をゆづりは。友しらが。ところゑひの相生や。けに高砂の尉とうば。落ばかくまでなからへて。めでたきおいのことふきに。すゑ

の世くふるとしごと。春のはしめの。かざりもの。あらたまりぬる。かどくは。人も若やく徳若や長生殿の
うちには。梅さくら菊かゝる。不老門のまへには。ゆゑたるはるの日の。ひかりかゝやくのきの月かけ。めぐれさか
土佐少掾正本題簽

づきめぐれさかづき。年のはじめの盃はとそに。よわひをのへの松。
子の日はわかなもてあそび。つきせぬはるのやゑかすみ。ちよよろ
づよの時をえて。めでたき福の神あそび。ひやうしとりくまふた
りしはおもしろかりける次第也。

出世よしまさ道行

雲のみの。梢はるかに霧こめて。たかしのやまに鹿ぞなくさかの、
おくの。さがなくも。人のうたはん戀ゆへに。かくおちうどの御身
にも乗ゑし。駒のゆかりにぞ紫たつな引とめて。跡みかへれば俤に
立顔ばせの。しほみ坂引かへ。さるゝごとくにて。手にふるくらのつぼむ村。馬よりおりさせ給ひつゝ。ゑきろの鈴
のいさきよく。すわの明神ふしおがみ。源家に。すめる白鳩と今はかくるゝ高塚やたれにすがらん。ふじかづらなよ
りの杖のしの塚にげに春ごとの詠めとて。めぐめる枝の若林。是やりうさもかく計。きさごにいたむそうあひの。あ
ゆめど跡へもどかしき。しどろもとろの足なみも。うんにまかする。てんりうや。野がいのくさのみじかくて。露た
におけぬまごめ川。きよきながれのみなもとも。にごりの水に打ひたし。駒もろ。ともにむすぶ水むかしはきんばん



ぎんとうの。雪のあしたのおりくは待哥よせいになぐさみも、たれにみよとてうへまつのしげる。はしばやしん
くくと。森の下風はださむく。こゝにもすめるあんま村。正八幡に我ねがひ。かけてぞたのむゆふしでの民もるかみ
の御めぐみの印や。白はたの。むれいる鳥やさぎさかの。はらの道芝駒のあと。をくのしたゑにかんむりを。いれ
ぬおしゑのかしこくも。それにことなるおちうどの。くはげんにいれぬくれぬくつべむら。よこしまゆくな人はたゞ。
仁義を守るしんでんの。人のことの葉。人の爲。なき世なりせばかく斗。月もおぼろのいわがねの。とこに。嵐をか
たしきて。ひとりやねなん。さよふけて。さよの中山なかくゝに。しばらく足を。やめ給ふ。まだ時ならぬ鐘の音の
こたまに。ひゞけ聞ゆるは。いつくの寺の。鐘やらん。あやしと。立住給ひけり。

○山門風流艶讚(参考)

【解題】 原本未見。京大國文研究室藏、寄せ本中の一種。かゝる外題のものがあつたか疑はしいやうでもあるが、参
考の爲に、その一節を抜萃する。原文は凡て九行、木下甚右衛門板。

さんもんふうりう

其時女。あれ御らんせ。なみ木につくはなの見せ。にぎわひひらく。しなくの。ゆきかふなんによきせんとひ色
めく。そでのとりくゝにいろふくまぬも。なき物と。おしへ申せばよしすみは。中にも色の。めたつなるふる人もな
き。ちやせんかみぎんもとゆひのはてすかた。ねんじゆ。とる手もいろめかし女はわるふてひと花のそのうつりきの

にくらしやよしすみは聞召花あれば。すなはちいかきせんとしてをろんぜすとやゆるし給へよまたあれに。見へしすかたのふりそては。まだその。としも二八ころ。いつれ娘のよききりやうそと。おらせければあれこそは。すいとそのなのいとたかき。ことうらといふまひ子なり。こなたにみゆる御所風は下町へんのやぶいりおんな。こなたのみこは。さていかに。あれこそちはやふり袖のなき井と申すかぐらみこ。そのあとよりもすげかさの。しろくめたちてふたりつれ身せばに戀をふくませし。あさきづきんのひたいきわ。おなしなかれの浮ふねのかぢを。たへにしすかたなりこなたにあゆむふり袖は扱もゆかしき。とりなりのかほがみたやとのそめはおんな手をほとほとと打ければ。ふりあをのひたるかさのうちさんへいじまんが上下とわらひ。きやうして。なをつくく。くんじゆの中を見たまへば。こうゑんふかきせんさうのたなにひいでしくれなむはさすか。かくせとかくされぬ。としのよはいは。いざよひを。おしくはすぎじ。ひとふたつ。見へし人のかほすがた。それかあらぬかおぼつかたとよくくみればおしかなり。よしすみはつと思召。おんなをともしさんもの。うちにそかくれ入たまふ。

〇一 心御伽倅子 (参考)

【解題】 原本未見。京大國文研究室藏、寄せ本中にあるものにて、その中の目黒詣、團扇賣といふ二節は、その題簽側に記された「一心御伽倅子」といふのを、外題とするものと思はれる。今参考に取り入れる。原本は九行、木下甚右衛門版。

目黒もふで

戀と。いふ字を。さふねに。のせてうかりし。いにしゑの。人にすかたはかはれども。戀をする身はつゞみかな。



鑑徳武—「郎太幡入」 本正操少佐士

君に打こむまどのふみ。ひらいてつぼめて。はなのかさほこ。かざりたて。おもふ。ねがひを。いのるには。みたびめぐるか目ぐるのやまを。とろくたらく。おりのぼり。爰にやすろふこしかけ松のまつは久しやいとやく。君をみたきの。白糸ちすし。よれて手ぼその。しごきおび。かぜにくのちと。うちなびく。尾ばなが袖の。つゆもよう。きりのまがきのくまくそめて。すゝきをわくるたび人の。すけのおがさが。みへつかくれつ。月やいづるとおどろきて。ちよこくばしりみちいそく。おともさゝめくさゝんざの。こゑふき。たへぬまつばらや。手ことに持て花もちぬかさしに。さしてとりくに参り。下向も立泊り。このまにみゆるうみおもて。しろきをみれば。帆をかけて。きりかくれゆくふねおしぞ思ふ心の。數々を。守らせ給へときせいを。しかしこの茶やの。みせさきに。しばしやすらひおはします。

昔國のはじまりは。しゆんとや申奉る。めでたきみよにつくりそめ。九か三ふくのしよをしのぎ此國までも吹つたふ。風すめらきの。ことふきも。ながへの團さしかざし御世を。おさめてものふの。くんばいうちわ女郎は。ぬりゑの團。色く／＼のふさをかさりしじやかうぼね。風も。聲あるおぎのはや。夕暮ごとのおとづれは。戀する人の。爲なれや。戀せぬ人の。爲なれや。今の浮世の。色ふくむ。貌にそむけた。しぶ團。とる手かわゆく。あいらしき。この手かしわのならうちわ。風もそよ／＼さら／＼と。さらさ團の物すきは。丸きつかうやかうじなり。かす／＼持て候と。いとおもしろふぞかたりける。

○今川かづら

【解題】 原本未見。木下甚右衛門版本の、表紙見返しに、名だけを見る珍物なれど、其中の「與作うかれ馬方」と「猿廻し」の二節が、京大國文研究室藏、寄せ本中にあるから、参考に引用して、その内容を窺ふよすがとする。原本は九行、木下甚右衛門版。

丹波與作うかれ馬かた

千兩とるとも。馬かたいやよこしにわらくつ手にや又たづな坂はてる／＼なるすよの。りん／＼／＼と。松むしの。ねをくらへてそ。金杉とをり。うきよはうしのくるま坂。くるはたれゆへ。そさまゆへ。うへの／＼かねのみ／＼にふれ

諸ぎやう。むしやうな。身のうへを。よしそれとてもひろかうじかいた。せいしのくろもんに。しばしやすらひ。ながむれは。ゆき／＼の袖のふうりうも。みな色からのとりなりにわが身はつらや。あさきぬの。むねあはぬよをいつまでか。かわれはかはるふうぞくの。たんばよさくとたか名をつけた。こまをはやめて。いそぐにぞ。くつわとすどが。りん／＼から／＼りんから／＼。むちふりあげてうつ／＼にも。ゆめにもきみを。みしめなは見ゆるとりゐのいろにいで。うき名かまはぬきみとわが。中はれんりのふたはしら。むすぶちぎりの。そこふかく。しむるかいあるいけのはた。かしこの。とりゐに。こまつなぎ。たるやの見せにこしかくる。

同 さるまはし

見るたひに。まさるめでたきしあはせよしや。よしやよしの／＼。花さかり。きそみよかしの。へきそみよ。かしの。おどりふり。はは玉さくらの。こすへゆく。花になれたるましのふり。いつかあをはの。ほと／＼ぎす。みやこ人よりさきにき／＼。くもらぬあめか。せみのこへ。秋はもみちのゑだうつり。さはべの月を。うきな。うす水のうへゆく。らくやうの。さむけきころはふゆの山。ゆきをしのぎて十八公。このしたかげによぶこ鳥。まさるかしこき。きみかよに。すめはたみとてゆたかなる。しげれ松山。こへて色こきたかをもみぢ。たつた川にはしきをさらす。よしの川にはさくらをなから。あられみぞれのふれやふれ。われふるつまは。なをいと。し／＼と申はすみ。すみ／＼／＼すみよしやはたふげんもんじゆのめされたり。まさるめでたきおどるか年ととたつみむまや。はるのこんまが。まいりたり。てんちやうちきううこきなきよこそめてたけれ。つきぬかことそひさしき。

○逸名土佐少掾段物集

【體裁】 紫蘭文庫藏本。或は脱落の爲か、別記家藏『蘭曲文音大林集』とは稍内容及び順序を異にし、後半は「色竹」と大體同様にて、「しうげん」「しうげんほうらい」「同吳越四季のたん」等から始めて、「虎少將しかた十番斬」に至る五十四段を含めども、その前に次の如き多數の段が附加されてゐる。或は「千代竹」とか「和歌竹」とでもいふ題名か。試に前半にある段名を列記すると――

- | | | | |
|--------------|------------|------------|------------|
| 一 紅葉狩舞の段 | 二 黒木賣 | 三 狂女道行 | 四 三井寺鐘の段 |
| 四 瀧の景 | 六 山居ほうし | 七 大婦坊道行 | 八 當世薄雪清水詣 |
| 九 いさめの官女 | 一〇 薄雪都廻 | 一一 當世薄雪こかう | 一二 老松 |
| 一三 大和廿四孝道行 | 一四 染小袖模様の段 | 一五 名女鑑數へ歌 | 一六 泉式部道行 |
| 一七 さらしの歌 | 一八 紫式部湖水月見 | 一九 袖鑑菊の盃 | 二〇 遊覽揃金澤八景 |
| 二一 遊覽揃ゆや萬壽道行 | 二二 遊覽揃鎌倉名所 | 二三 蓮華御前道行 | 二四 名將傳みち行 |
| 二五 篠塚五郎物語 | 二六 大職冠道行 | 二七 同田植の段 | 二八 大職冠後の道行 |
| 二九 大職冠玉取の段 | 三〇 文正のみち行 | 三一 てうどつくし | 三二 小鳥つくし |
| 三三 めいかうつくし | | | |

○貞享版土佐段物集——(色竹?)

【體裁】 斑山文庫藏本。土佐掾の段物集にて、九篇の中、八篇は九行、最後の「世繼會我」の道行だけ十行。惜むらくは書名を逸し、或は零本かと思はれるが、巻末に「大傳馬三丁目うろこがたや新板」とあり、刊年のある點から極めて珍重すべき寄本である。或は之が「色竹」か。

【刊年・太夫】 或は之を奥附だけ別のものを取附けたにあらずやと疑ふものがあるかも知れぬから、奥附の全文を左の如く筆寫して、其疑の全然許されぬ、完全なる貴重書であることを明かにしておきたい。即ち、

「世間に書本或はしやうさしに仕數多雖有之自見するに謬多く太夫直之本とは各別相違有之により今改土佐掾自筆之しやうさし所にふし拍子を付令開板者也」

貞享三年寅五月

大傳馬三丁目うろこがたや新板

以上の如く、「土佐掾自筆」の語と「うろこがたや板」の語は、上方の山本土佐掾物との混同をも完全に封鎖し、而も「貞享三年寅五月」の文字にも些の疑點はないのである。

【内容】 惜むらくは本書の内容が、

「れんしやう高野入。こゑつのだまかい四きのだん。前中書王武略の巻。二河白道、さくら姫道行。ふしん道行。かつらきづぼねおり。浦つくし。虎御前待よひのうらみ。世繼そが道行」

の九段を含むに過ぎないが、其後の刊行と思はれる木下甚右衛門版の寄本「色竹」の内容と比べると、此書中にも元々

もつと澤山の内容があつたのが、紛失したのではないかと疑はれ、従つて、所謂寶永五年の木下版の多くは既に貞享頃までに土佐掾の初代二代等によつて語られたものと推定されるのである。

○大やしま——のぼり八島

大やしま表紙



【體裁】 半紙形より稍小、小形より大、十七行十二丁。兩面繪三。題簽に「大やしま」、内題は「のぼり八島」とある。題簽の中段、外題の右側には「よりともしつねたいめん」、左側には「みがわりつきのぶ」と記し、上段に太夫名があり、奥に「大傳馬、二丁目、木下甚右衛門板」。

【太夫・刊年】 題簽の上段に、紋所をはさんで、土佐少掾、橘正勝とあるが、刊年はない。けれども木下が大傳馬二丁目から小傳馬三丁目に移る前のものであり、而も題簽の下段に「新板」の字があつたりするから、元來が大分早く、少くも元祿前

のものであつたと思はれる。

【形式・曲節付】 六段曲。初段以外は「其後」で始まり、各段尾には形式句があり、曲節付はない。

初段「扱も其後しやらそうじゆの花の色しやうじひつすいのことばりをあらはしおこる者久しからずたゞ春の夢の如し、た

けき人も遂にほろびぬ……」

【梗概】 初段 頼朝の平家討伐をきいて、義經上洛を秀衡に圖る。秀衡募兵。義經軍奉行を得んとして、出羽の佐藤庄司の子繼信忠信と對面。庄司父子の悲壯な別離。義經上野の板鼻にて伊勢三郎と對面。

二段目 義經上洛の途、浮島原にて、頼朝と劇的對面の長い場。平家一の谷へ退陣。義經先づ義仲を討つて、更に一の谷を攻め、屋島に進む。後半は庄司病んで二子を慕ひ、二子の妻達が二子の風して父を慰め、庄司の死。尼公の歎。

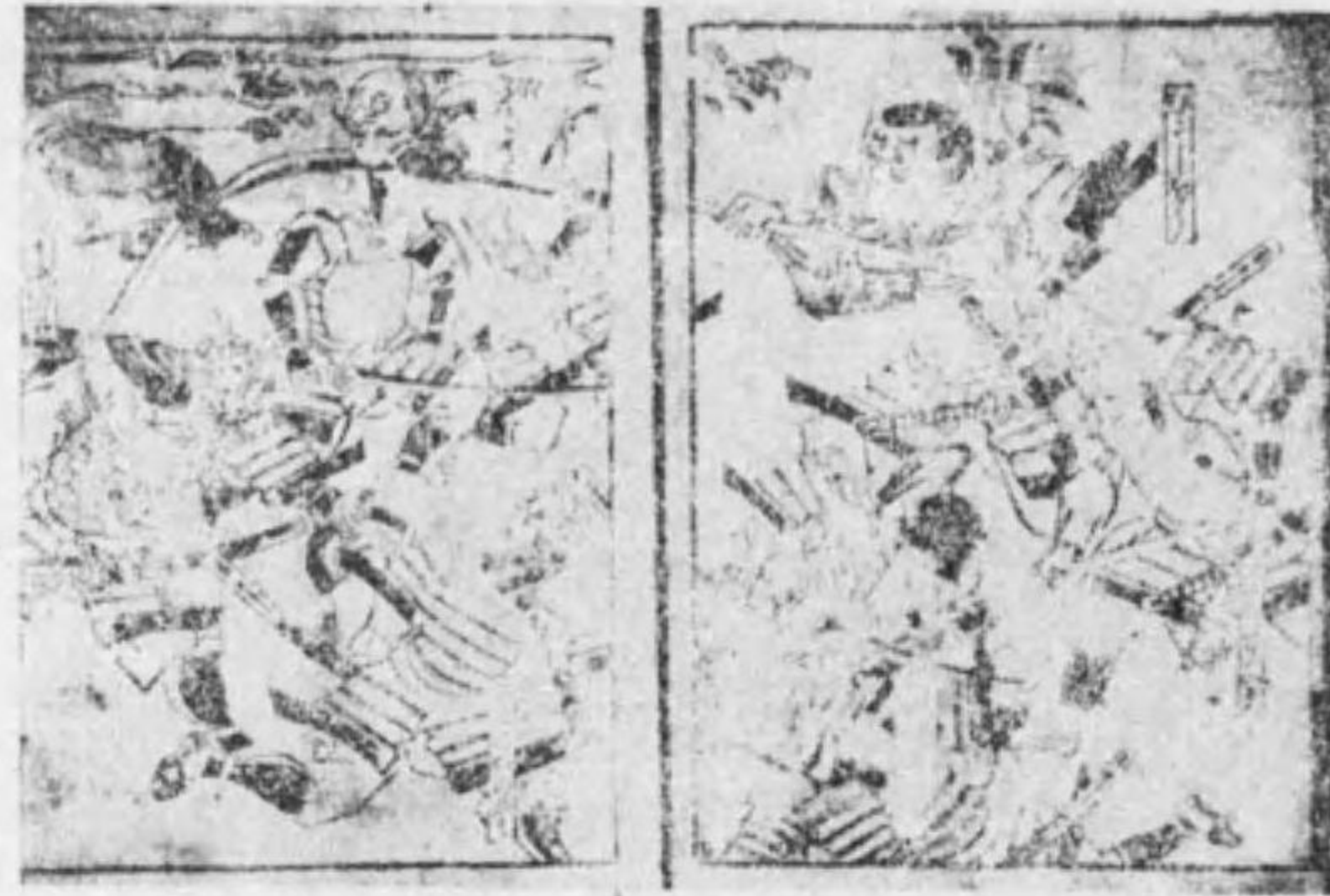
三段目 勝浦の戦について、屋島の戦、教經義經の名乗り合ひ、繼信の身替、辨慶の活躍。

四段目 繼信の臨終の長い場、即ち義經との對面、馬の太夫黒を繼信に給ふ物語。太夫黒殉死の有様。

五段目 景清が三保谷の鍛引。壇の浦にて義經と梶原の先陣争。景清の豪語、知盛の激勵。主上の御入水。

六段目 壇の浦にて平家の最後の有様。教經の奮戦入水。義經歸洛。

【出處・原據】 四段までは舞曲『八島』により、三段目前半は『源平盛衰記』、五段六段は『平家物語』や『源平



場の引鍛清景

「ましや大」

盛衰記」による。冒頭の如き、其他大體に「平家物語」によつたあとは明かで、南無右衛門の正本「八島」とも深い關係があるが、義經が奥州まで下る部分即ち「下り八島」の部分は殆ど除かれてゐる。

【解説】 本曲は拙著「古浄瑠璃の新研究」慶長寛文篇の「八島研究」及びその追記、更に「下り八島」と外題する曲と對照して見るべきものであるが、要するに、南無右衛門の正本「八島」が、十二段草子の後日物語であつたのでその中から十二段草子關係の分子を取のぞき、屋島合戦を中心とし、義經が平家討伐の爲に上洛し、平家を滅すまでをのべたので、「のぼり八島」と題したものである。大外題を「大やしま」としたのは、同じ土佐少掾の語物に「源平兵者揃」又は「八島」と題する、同一材料だが連生物語を入れたものがあるので、それとの釣合上かく呼んだのであらう。

【影響】 享保八年正月刊で、元外題不明、柱に「大やしま」とあり、後書の外題を「西海軍記」と稱する東京帝大藏本は、本曲に少しく手を入れ、省略を加へたもので、大序など全く同様である。段物集には「上洛義經記」といふものがあるが、それには靜と義經の關係が出て來て、艶つばい場面があるから、本曲とは關係が薄いやうである。

○色 竹

【體裁】 京都帝國大學國文研究室所藏。二種ありその中、一冊には版元が「大傳馬二丁目木下甚右衛門」とある。其行數は凡て九行、文字には所々大小の差がある。半紙形百十三丁。

後の色々の版、殊に家藏無外題本と大體同版なれど、家藏には、後に加へたと思はれる「もちみかり舞の段」以下

數十段が別にそへてある。

【太夫・刊年】 土佐少掾正勝の段物集であることは太夫名があるから明かであるが、刊年は明かでない。けれども木下甚右衛門が小傳馬町三丁目へ移る前の大傳馬町二丁目時代の刊行物故、元祿前のもかと思はれ、殊に彼の段物集中、最も古い最初のものであることは、後代の彼の段物目録によつて推定が出来る。蓋し之によつて彼の語物の可成り多くが元祿前のもので、後に出たものは、段物の前へ加へては、續々刊行したらしいものであることが知られる。

なほ鱗形屋版「色竹」は元々これと同様で、それは貞享三年刊の段物集か、この木下版「色竹」とも、内容は同一でありさうに思はれてならぬ。

目録の次に左の序文がある。

「代々の太夫の流れは多きかけ竹のふし／＼有中に、近來土州の一曲は俗をはなれ風をたて、聲は梁の塵をたゞしめ、節は利休の茶杓よりもしほらしく都鄙おしなへて風をなすもまたたのしからずや、やつがれも此みちにたづさばり、今高德の太夫にちなみて新板を弘むる事數年あり、身を立名を發すは一藝のとく也、書は萬代の鏡一字違ひ百萬の誤り、其つみの重きをおそれたゞことに直の謄本をうつし口傳を直に聞て、千たび校合し、百度琢磨し、清濁をふらふも道を思ふが故也、然るに此頃類板の塵芥ちまたにみち或は木下といふな本下と掠め甚右衛門といふを甚左衛門まぎらはし、あたひの輕きを以てあやぶめんとす、其書たるをみればふし訟のあやまりかぞふるにたらず、太夫のあやまり藝のそしりとならん事を恨て愚が板行の正本に正刊如此在列をしるし出之○ 大傳馬二丁目 木下甚右衛門板(書判)

卷末には、次の文がある。卷首には「大傳馬」とのみあつて、町字がない。

右此本者土佐少掾橘正勝直之以テ章句ヲ附シ秘蜜音節ニ送ニ校合ニ令ニ開板ニ者也

大傳馬町二町目

木下甚右衛門刊

なほこの序文は、寶永五年に出された種々の正本の前附の文とは、少し異なる所あることがわかり、同時にこれまでに種々の類版が出たといへば、如何に土佐節が流行したかが察せられる。

別本 京大國文研究室所藏別本『色竹』も、本書と大體同様なれど、落丁が一二あるらしく、柱などに多少の差がある。目次は同一ながら刊年はなく、版元もない。或は後版か。

目次 色竹目録(目録の文も順序も、本文の順序及び題の書き方と多少異なるをもつて、凡て本文に従ひ、大外題の明かなものは括弧内に記す)

- 一 しょうげん (目録には「しょうげん上るり」)
- 二 しょうげんほうらい (吳越軍談)
- 三 同吳越四季のだん (以上、柱に「祝言」)
- 四 文正の道行 (二本、下に、○太夫つれふし)
- 五 てうどつくし (目録には「同てうとそろへ」)
- 六 小鳥づくし (目録には「同鳥つくし」)
- 七 めいかうづくし (目録には「名香そろへ」)
- 八 ふえのだん 本ふし

(鹽屋文正)

九 玉ものだん 本ふし

一〇 四季のてう

(源氏十二段)

一一 すかたみの段 本ふし

一二 枕もんたう 本ふし

一三 通ひ小町 (目録には「少將かよひ女」)

一四 業平あつま下り道行

(吾妻業平色小町)

一五 業平かゝみの段 (目録には「同かゝみおとこ」)

一六 難波物語後深草院梅見車

一七 同あしやのさと名所道行 (目録には「なにはかた名所道行」)

(難波物語)

一八 あしかり笠の段

一九 開山揃いのりのだん (目録には「市のやかいさん揃」)

二〇 三十三所順禮道行 (目録に、同じゆんれい道行)

二一 浅草名所うき世びやうし (以上三、柱に市のや)

二二 大塔宮いのりのだん (目録には「観音揃」) (大塔宮熊野落?)

二三 染色つくし

二四 とをるの道行

(鹽釜大臣)

- 二五 ちかのしほがま (名所つくし、 かけあひつれぶし)
- 二六 色欲三世相らくやう名所物語
- 二七 同あまよのまへ北野まふて道行 (色欲三世相)
- 二八 ともへたいこの道行 (目録には、巴たいこたねなを道行)
- 二九 同たいこのきよく (巴太鼓)
- 三〇 兼好花うりの段 (徒然草)
- 三一 松風村雨しほくみの段 (現在松風)
- 三二 松風村雨きやう女の段
- 三三 二河白道さくら姫道行 (柱に「大全」とあれど別本には柱にも「二河」(一心二河白道))
- 三四 ゑしんの道行 (柱に大全、別本には柱にも恵心)
- 三五 とら御前待宵うらみ (目録に「風流和田待宵のうらみ」)(風流和田酒盛)
- 三六 名ごやの道行
- 三七 かつらきつぼねおり (名古屋山三)
- 三八 名ごや風流しかた物語
- 三九 からさき風流の茶の湯 本ふし
- 四〇 浦つくし 本ふし

- 四一 前中書王武略之卷 主上の道行 (目録には、前の字がない、以上三、柱に大全)
- 四二 源平兵揃れんしやう道行 三段目 (源平兵揃)
- 四三 れんしやう高野入
- 四四 しづかすがたみのだん (上洛義経記か)
- 四五 よしつねしのび物かたり
- 四六 あたかくはんじん帳 (あたか高館)
- 四七 高たちべんけい舞の段
- 四八 一休しのびの段 (一休一代記)
- 四九 一休和尚高野入 (目録ではこれが、「一きう山のけい」、「一きう山ぶしもんどう」の二つに分る)
- 五〇 大塔宮熊野道行 (大塔宮熊野落)
- 五一 大塔宮しのびの段、本ふし
- 五二 東國下り道行 (目録に「東海道道行」、柱に「東國」、左衛門の道行)(東海道兵揃?)
- 五三 源氏重代剣之卷 (柱に名剣、目録に、「頼光名剣の卷」)
- 五四 花世まひの段 (柱に「花世」)
- 五五 くへんとう小六風流 (關東小六)

- 五六 あふひのうへあつさの段 (葵の上)
 - 五七 あふひのうへいのりの段
 - 五八 虎少將の道行 (世繼會我)
 - 五九 虎少將しかた十ばんぎり (會我十番切)
 - 六〇 はんごんかうめいどのさんげ (目録に「高松の女御反ごんかう」) (中書王)
 - 六一 中書王神おろし
 - 六二 どうじよるひつめ
 - 六三 どうじ山入 (頼光山入)
- (目録に、「都合六十四段」とあるのは「一休山のけい」、「一休山ぶしもんどう」が、本文では合してゐるためにて、目録には之を二つとしてある)

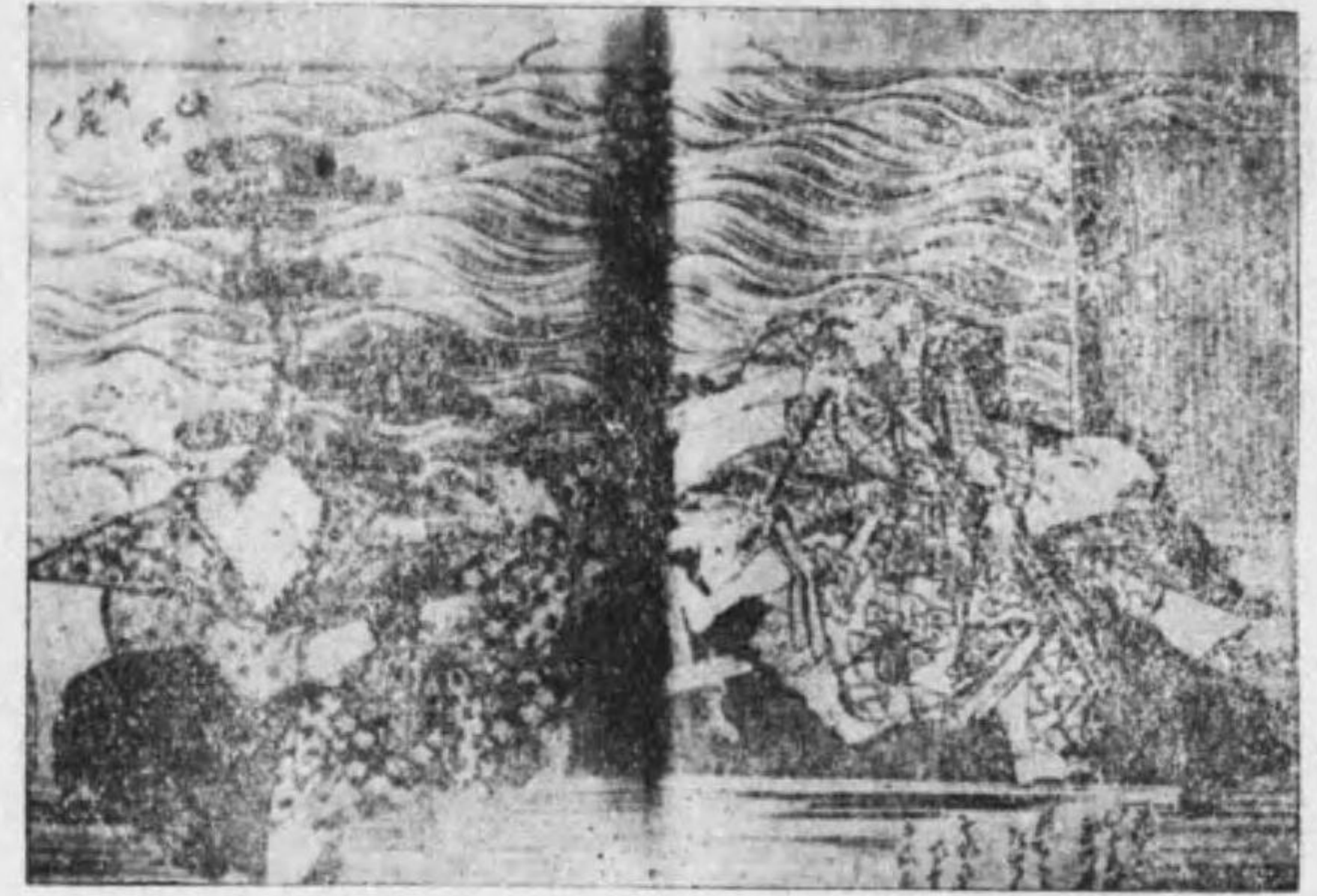
○蘭曲文音大林集(追記)

三〇三頁記述の段物集は、別本によれば、「小傳馬町木下甚右衛門刊」にて、目録の前に序文がある。

○田橋龍女本地(参考)

柳亭種彦作

【體裁】 古謡文庫藏本。現在一冊に合本されてをれど、題簽が上中下三つ残されてゐることから見ても、もとく



「地本女龍橋田勢」 人形遺に挿繪

三冊であつたことが知れ、序文について、両面の口繪五丁、その次に、『蘭菊の幣帛 尾花の幣帛 勢田橋龍女本地』三冊と記した内扉、その右肩に「讀本淨瑠璃、田原藤太老狐傳」左方の腰に「並にひいたりやく、琴の唱哥に親子の奇縁、付りうつたりやく、砧の玉聲たまなまに義心の身替」と二行に書いてある。初丁初行には、唯「龍女のほん地、作者柳亭種彦」とある。各々十行、上卷二十丁、中卷二十七丁、下卷二十四丁、挿繪は口繪の外に両面十三、片面一、葛飾北齋の筆に成ることが巻尾に記されてゐる。

【刊年・作者】 序文によりて作者は明白で、巻末には文化八年未年正月二日とあれど、序文には文化七年庚午夏日種彦と記す。これで見ると『日本文學辭典』にこの作を文化十年作の如く記してゐるのは立派に誤である。もし誤でないとするれば、此所見本は初版である。現に挿繪の中の一つに、「狂言半ながら口上、一昨年著述仕候『淺間が嶽』(文化六年)後篇即ち外題は『逢州執着譚』當秋はましがひなく賣出し

申候」と記してあるので明かである。

【形式】各冊一段づゝより成り、上巻には初段の句はないが、中下には二段目三段目の語が初行にあり、更に内扉には、目次として「大内の段、三上山の段、三井寺庵室の段、辛崎神前の段、同濱手の段、鏡山揚屋の段、秀郷館の段、堅田の浦身替の段、已上八幕、前帙畢」とあり、曲節付は序詞とヲロシと三重だけがついてゐて、句切も入れてある。

又梗概中にも記しおいたやうに、場面の變る所には、殊に四五字下げて、所謂ト書があり、人物の歌ふ歌も同様に別に下げて書いてある。又對話が盛に行はれる處には、色々な符號をつけてそれが明かにしてある。

序詞「蛟龍神と雖白日を以其輪を去こと能すとかや、疾風さへも降雨に、塵はあがらぬ譬ぐさ、年にさきだつ寒梅は雪に色香をうづめられ、秋をもまたで鳴鹿は、殺男が矢なみ逃れえず、されば期を知り時をまつ、智者の心は春の花、さかり久しき九重や、つたへくして六十一代朱雀帝のしらしめすヲロシ雲井の庭ぞ長閑なる……」

【梗概】初段 大内の段 將門が左大臣藤平忠平と心を合せ、日本横領を企てるに對し、田原藤太秀郷の弟宗郷友郷がそれに味方してゐる時、勅命により、右大臣藤原恒佐が秀郷をして、將門討伐に當らせ、忠平宗郷等に鼻をあけさせる。

△三上山の段 秀郷は白狐を祭つたお蔭で、夢のお告によつて、三上山に至り、忠平、弟宗郷、及び忠平の女で、秀郷の後妻たる司の前等の一味陰謀を知る。狐が密書を盗んで、飛行中に落したのを見るのであつて、其處に「此道具上へひきあげ秀郷狩場のいでたちにて、密書をよみ居る、これより谷のしたみちのものがたり」なる説明がついて

ゐる。つまりこれがト書にあたるのである。

△三井寺の段 貞盛の一子貞武は秀郷の先妻の娘玉の井と許婚の間柄ながら、母を失つて以來世をはかなみ、三井寺に庵室を結んでゐる。玉の井は多門を使として、毎日貞武を口説くが靡かぬ。今日も多門が拒まれてゐる所へ、多門の妻は朝妻の里の傾城八文字小織に扮して來て、多門に加勢して口説き、「街賣苦海經」といふ經を讀んで色傳授をする。

法の華 廊の花 傾作街賣苦海經 「如是我聞花街の説そもく靡と申するは、玉樓金臺軒たかく、……極樂世界もほかならずと、傾教頓語小織が利發口から出したい語りける」貞武が氣を和げたのを見ると、小織は新造に扮せしめて連れて來た玉の井姫を貞武に近づける。秀郷が敵の心を油斷させんがために、鏡の宿で遊女狂ひをしてゐる本心をさぐらんとして、わざと三井寺に隠れた貞武は、秀郷の本心も知り、安心して玉の井と夫婦になる。そこへ司の前の手下が討手として來る。貞武等は逐拂ふ。「忠あり孝ありなさけあり、末たのもしの若武者やと皆人語り傳へける」。

二段目 辛崎神前の段 藤太は見事に將門を討たしめたまへと辛崎の神前に遊君を集めて祈願の管弦を催す折柄、弟宗郷等の一味たる松羅陳人なる幻術者が、蜈蚣にばけて琴の中にひそみ、秀郷を討たうとして、見破られる。(こゝに「墓目は弓とる家々になを秘傳種々あるべし、唯兒女のねぶりをさまさんとしてつくる、かゝるたはれたる書に、なか／＼それをいはんもおこのわざなれば、近松門左衛門があらはす天鼓といふ淨瑠璃、二だんめの尾、山路判官梅豊が白狐になやまさるゝとて、いつはりをかまへたる神職松垣が女ぼうを見あらはす條にかけることばを、其まゝにもちひたり」としてある。)

△同濱手の段　こゝでは怪修行者が遂に松羅陳人を殺し、秀郷の家寶の硯と金とを奪つてにげるを、龍神小笹の二女が追かける。(其終に「雲間をいづる月かけに顔見てびつくり、やあおまへはコレ拍子まく」とあり)。

兄の姿を見たものらしい。即ち松羅陳人を殺した怪修行者は秀郷の執權大友藏人なのである。

△鏡の宿、揚屋の段　秀郷は今此家にて、わざと遊君龍神に溺れてゐる。そこへ宗郷が来て、龍神を我味方にせんとするを、龍神はそれと察して秀郷に告げようとする。折柄龍神の兄(實は叔父)大友藏人(實は秀郷の爲に敵情をさぐるべく、虚無僧姿にて来て、龍神(本名は小枝とて、兄の子を妹としてゐる)に向つて、いざといふ時の死を覺悟せよといふ。

秀郷は悪夢から覺めて飲直さうとする時、藏人は秀郷の決心をうながすべく刀をつきつける。秀郷が怒つて、龍神をして兄を打擲せしめた後にて、宗郷と秀郷の臣大竹五郎が現れて、藏人に一味をせまる。藏人は偽つて味方する。

秀郷は悪夢を見て、勢田の橋を渡らんとして大蛇に遇ひ、其背をふんで渡る中に、大蛇は美女と化したをよく見れば龍神だったので、遊女龍神は實は變化に相違なしとて斬つてかゝると、遊女龍神は、元來人間ならず、中天竺無熱地善女龍王の乙姫で、琵琶湖開けし以來近江にすみ、三上山にすみ千年の蜈蚣に苦められるので、假に人間となつて慈悲有る勇者に蜈蚣退治を頼みたいといふ。そして自分は熱田の水底金輪王の都に住んでゐると語り、三上山に黒雲が現れると、蜈蚣が勢田に来る由を傳へる。秀郷は直ちに蜈蚣退治に勢田へ向ふ。

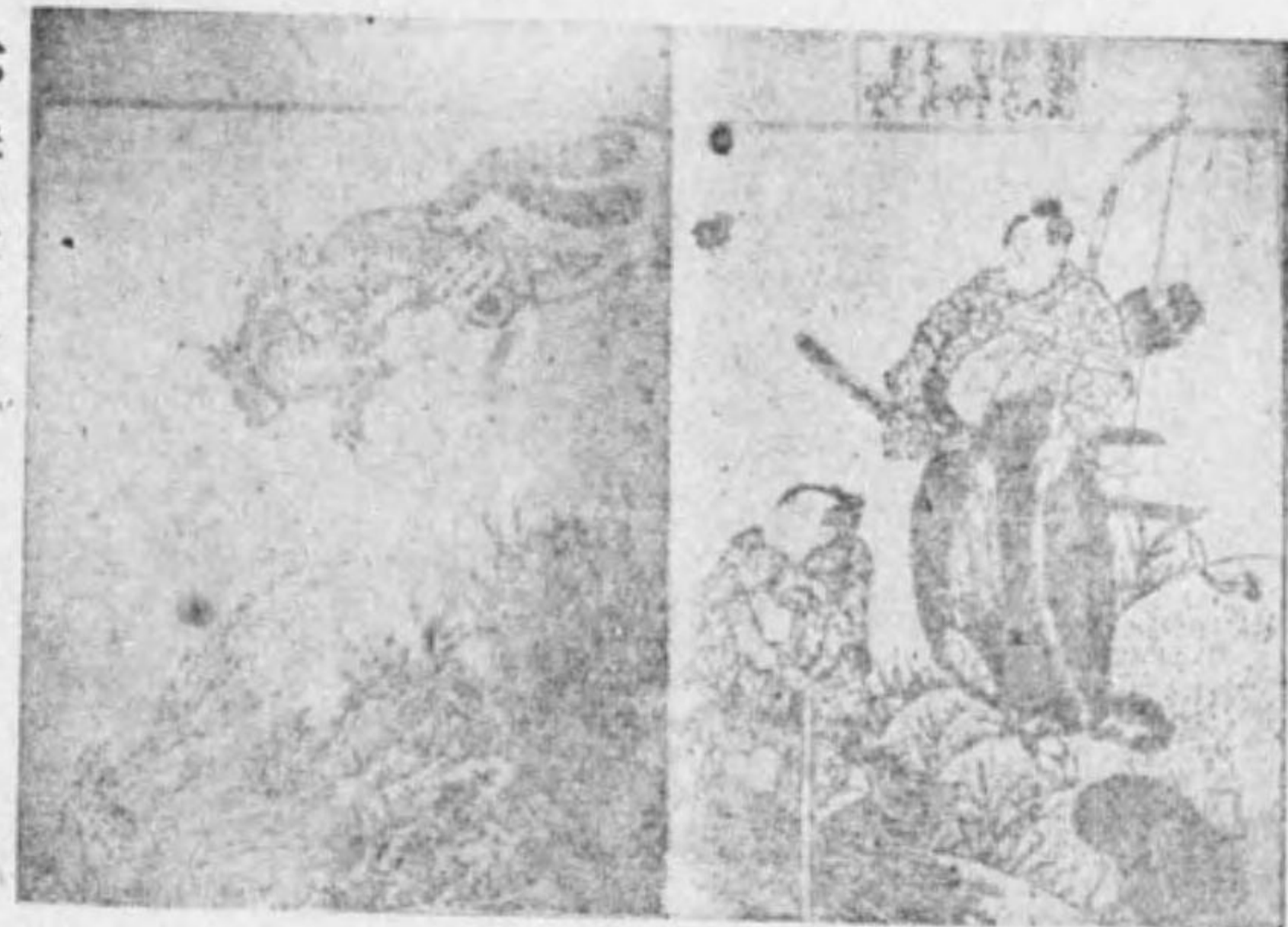
三段目　秀郷館の段　勢田の橋で蜈蚣退治以來、秀郷の行衛がわからぬときくと、妻司の前や宗郷等は、愈々跡目相續を願ひ出る體にしてお家權領を圖る。そして玉の井姫に陰謀を知られたと見ると、繼母司の前は生かしてはおか

れぬとて姫に斬つてかゝる。女達がとめる。藏人は堅田の浦で討つからといつて姫を預る。大竹五郎の妻小笹も姫を護る。

△堅田浦身替の段　堅田の浦の非人小よしの母は、行衛しれぬ武士の妻で、今も小よしを乞食にしてゐる事をなげく處へ、田原の執權藏人が来る。小よしが母の眼病が治るならば「御刀のためしもの、たとへ命の御用でも、何のいなど申しましょ」といふに乗じて、藏人は玉の井姫の身替に首をくれといふと、小よしは孝行の爲にならばといふ。藏人は奥を呼んで姫を引合せる。姫は砧を打ち小よしは琴を弾いて歌ふ。「吹風をたれかはあだといひそめし……」の歌から、藏人はこれが昔自分がすてた妻と我が娘であると思ひながら、わざと名のらぬ。娘小よしは母に向つて會者定離を説く。忠義一途の藏人は遂に娘を拔撃に斬る。斬そこねると小よしの叫によつて、目の見えぬ母は何故斬つたと咎め、狂氣となる。「お主のために首うつ娘、とめだてしてけがまくるな、そのけ小その」と藏人がいふので始めて母は藏人を我夫の三郎と知る。問ひつめられて、藏人は秀郷の命にて、大竹五郎と共に敵方に内通したと云ひ、小よしを姫の身替にする旨を語つて、娘の首を切つて間もなく、實檢に來た司の前に見せる。さて安心と思つて藏人が姫を尋ねると、姫は誰にか奪ひ去られてゐる。責を負うて小そのが自害した後に、遺書の短冊で、姫は大竹が連れ去つたとわかるが、藏人は娘を殺し、妻に死なれ、無常心むらゝと起つて、鬚を切つて菩提の道に入る。「その名はくちぬかたの浦、大友ざくらと云傳へ、義心の花をぞさかせける」。

【解説】　要するにお伽草子『田原藤太物語』を改作した寶永頃の讀本淨瑠璃『田原藤太』を再改作したもので、田原藤太の後妻と、藤太の弟等が、朝臣藤原忠平及び平將門の陰謀に加擔して、將門討伐の任にある秀郷を討つて、田

原の家を横領しようとするお家騒動に、藤太の蜈蚣退治を組合せたものである。そしてその間に、近松の「天鼓」を借りて、白狐の妖魔的活躍を取入れたり、松羅陳人といふ幻術者を用ひたり、遊女かと思ふと、龍女であつたりするやうな夢幻的な材料をかりて、不自然至極な浪漫味の多いものとしてあるのはまだいゝとして、折角の敵役たる司の前でも、弟宗郷でも友郷



柳亭種彦作 讀本淨瑠璃 勢田橋龍女本地

でもあまり活躍せず、卷末に豫約されてゐる如く、如何にも後篇がありさうな複雑極る構想であり、迫力に乏しいものであるが、さすがに三段目の終に於て、姫に對する非人の娘の身替の場を設けて、多少の緊張味を加へてゐるのは取り得である。けれども身替の場の表現力に至つては、古淨瑠璃時代のそれに何者をも加へた跡なく、陳腐平凡寧ろ失望を禁ぜざらしむるものがある。全體の構想から見ても、徒らに複雑化され、引伸されたといふ以外に感心せしめるものなく、文章としても殆ど妙味を思はしめる點なく、唯あくまで讀物本位の淨瑠璃であることを目的として、語調と語呂を整へ、場面の散漫をさけた點に、形式の點から見て讀本淨瑠璃の見本とするには都合のいゝものと思ふ。殊に近松物の如き名文ならずとも、構想も割合に整頓され、文章もあまり六ヶ敷からず、一般大衆物としては相當な讀物であるに、如何にもだし殻の感があつて興味をそよめるものが少いものである。

【讀本淨瑠璃】 此曲が讀物淨瑠璃であることは、内扉にも記してある如くであるが、種彦の序文として、「……紫式部が筆のすさみにもならず、近代平安堂近松門左衛門義太夫にうたはせ、傀儡にまはさんとてかける、淨瑠璃にもとづき、近會もつばら世に行はれつる、小説に混じてあらはすなれば、新に讀本淨瑠璃とはいふなり○此書つねの小説とは異れど、しゐて節をくださんともあらず、院本とも亦等しからず、共に相伴する一體の書なり、嗚呼才の短をいかんせん、よまんとすれば文章つたなくうたはんとすれば語路すぐならず、……○此書總て平安堂が作例にならへばたけかけのんこ、鷗づと、ぬめりあくゆぐきなど、其頃の流言を用ひたるところもあり、亦「様子は何か白木の三方」一間のうちへ入相」の類、此道先達の作意をそのまゝにうつすもおほし」など述べてゐることも明かである。而も三段目の挿繪の一つに、藏人と小よしの人形を、各々人形遣がつかふ繪があり、その下に「藏人ひにんのむすめを玉の井姫の身がはりにたてんとす、そのさまをでくにはまはす處にうつす」と記し、上には「此所大できく」としてあるなど、如何にも淨瑠璃らしく見せんとし、文章亦その積りで書かれてゐるのみか、最後には「右之讀本淨瑠理は柳亭一家の戯作……永壽堂主人○重て吟覽の君子音節墨譜等在加筆幸甚、柳亭種彦」と記してあるが、上演するよりも、矢張筋をはこんで、小説として賣らん爲に筆を執つたものと思はれる。

これまで實際に於て讀物本位の淨瑠璃が存在し、元祿頃よりそれが江戸に於て頗る盛になつたことは、淨瑠璃風の讀物らしい正本の残存によつて明かであるが、種彦が此書を自ら「新に讀本淨瑠璃といふ」といつてゐることから見ると、かうした語はこれまであまり用ひなかつたもの、如く、この時芝居好き淨瑠璃好きの種彦が近松にまねて筆を執つたもの、一般の人氣に投じなかつたか後篇が出てゐないといはれる。

八百屋お七正本の研究

一

天和三年三月二十九日に處刑された、八百屋お七の可憐なる物語は、お膝下の江戸に先んじて、三年の後には大阪に於て、西鶴の『五人女』の巻四に「八百屋物語」として不朽の名を留めるに至つた。其後それが歌祭文となるに至つたことは、既に知られてゐるやうであるが、歌祭文成立の年代は明確にされてゐない。けれども「八百屋お七、哥さいもん」と、其續きである「お七こひのもえくる」を見ると、其最後に、「とふもかたるも一むかし只よのあはれは是也とうやまつて申」と記されてゐる。此一句が歌祭文成立の年代を暗示するものとして、三田村鳶魚氏が指示されてゐるのは古いことであるが、私は三田村氏以上に、この「一昔」の一語に意義を認めて、お七の歌祭文が既に元禄六七年頃には成立したことを示すものと見るべきであることを強調したのである。いな一昔にあまるといふ意味が示されないのを見ると、或は十年たたない中にすら、此歌祭文が、巷の俚謡詩人によつて創作されたものではなからうかとさへ考へるのである。

それは兎に角に、所謂お七事件が頗る世話的傾向を帯びてゐると、江戸に於ては傳統的に武ばつたものが好まれたが爲か、又お膝下では生々しい悲痛な事件を其儘劇化することを遠慮した爲か、此事件が脚色上演されたのも上方

の方が早かつたやうである。

といつて、お七物語の文學的研究、換言すれば、上方に於ける淨瑠璃としての八百屋お七物の刊行乃至上演年代、之が江戸版淨瑠璃としての展開、淨瑠璃と歌舞伎狂言との關係等については、まだ充分な研究が遂げられてゐないやうである。私は今古淨瑠璃研究の途中に拾つた落穂をかき集めて、江戸版お七淨瑠璃が如何に展開し成立したかを探求すると同時に、最初のお七淨瑠璃成立期について私見を述べ、之等と狂言本との關係を少しばかり記述して置きたいと思ふ。これが此論文の目的である。

二

今記述を明晰ならしめんが爲に、多少の重複はあつても、八百屋お七に關する淨瑠璃の刊行乃至上演の年月表をあげて、ついで一々の正本について記述を進めて行くことにしたい。

第一 寶永元年（元禄十七年）二月十五日 『八百屋お七歌祭文』豊竹座上演（外題年鑑、明和版）

第二 享保元年秋——二年春 富松薩摩等正本『山王權現八千代玉垣』刊

第三 享保二年十月 竹本喜代太夫正本、紀海音作『八百屋お七戀緋櫻』江戸伊賀屋勘右衛門刊、尙別に之と同名の繪入三段本伊賀屋版がある。

第四 享保三年三月 竹本喜世太夫正本、『八百屋お七戀櫻、付り後日』さがみや與兵衛版。

第五 享保三年三月 竹本喜世太夫正本、『八百屋お七戀櫻』伊賀屋勘右衛門版。これは第三の再版だと思はれる。

第六 享保三年秋頃迄 竹本喜世太夫正本「八百屋お七、付後日」(五段)、湯島女坂下、相模屋與兵衛刊
第七 享保四年八月 堺島太夫、竹本喜世太夫正本「八百屋お七江戸紫」(三段) 相模屋與兵衛刊

第八 享保五年正月 繪入六段本「八百屋お七江戸紫」江戸通油町
村田屋新板

第九 享保十七年正月二十日 「八百屋お七戀緋櫻」豊竹座にて二
度目上演(外題年鑑)

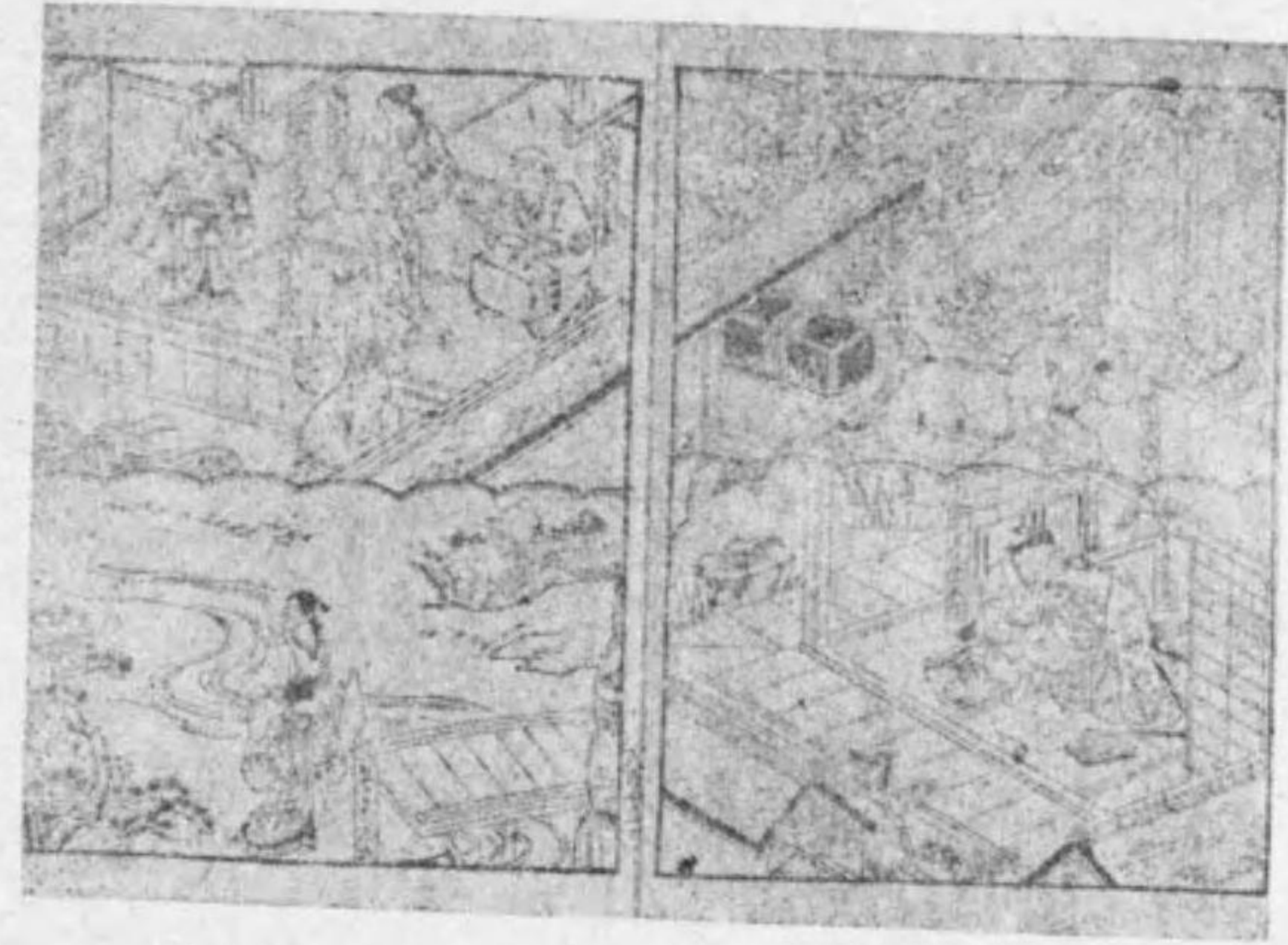
本正中一夫太都

第一〇 刊年未詳 富松薩摩正本「吾妻歌七枚起請」

第一一 刊年未詳 土佐少操正本「末廣昌源氏」

第一二 都太夫一中正本「八百屋お七」八左衛門版

以上の中、一番問題にされてゐるのは、寶永元年上演の「八百屋お七歌祭文」であるが、これに關しては記述を後にゆづる事にして、先づ次のお七物語から述べて見よう。けれども私がお七物語に入るに先だつて記述しなければならぬ一曲がある。それは富松薩摩の正本「山王權現八千代玉垣」である。



(一) この「山王權現八千代玉垣」は、七行六十九丁の九兵衛版で、その奥書には、中央に、太夫富松薩摩、其右前に宇治治郎太夫、名代野田若狭、左方に座本和歌竹土佐、富竹式太夫とあり、刊年は不明ながら、近松作の「國性

爺合戦」中の鷲と蛤の合戦にまねて、猫と赤貝の戦が敘せられ、又「國性爺合戦」を俳優神山小四郎が上演したとか「村山平十郎が口まねうつすよふうつすうつしもうつす阿波太夫節……」などの文句が、曲中にあるから、享保元年秋都萬太夫座で、神山等が「國性爺」を上演した後、海音の「八百屋お七」の現はれる前、享保元年冬から同二年春頃までのものかと思はれる。

本曲の内容は、これまでの所謂「八百屋お七」とは全く趣を異にし、お七とは直接關係のないものである。即ち近江國一城主花園家の忠臣大炊之介が、若殿梅太郎の遊女狂ひの爲に苦勞して、僧殺しまでして金をつくつて仕送り、その人殺しが源で悪人彈正の主家横領主君謀殺が暴露する。そして主君側のものは、一旦散り／＼になるといふ筋である。従つて八百屋お七とは何の關係もないのであるが、之を改作して、大炊之介が高野僧を殺して金を奪うたが爲に、其難が我子吉三郎に及ばぬやうにと、臣の十内をして吉三郎をつれて、江戸の吉祥寺に隠れて出家せしめるやうにして、お七との間接の縁がつくられたのが第七の三段本「八百屋お七江戸紫」である。そして吉三郎出家の問題から、所謂海音の「八百屋お七」との關係が出来るのである。つまりこれが「八百屋お七」展開の源をなすのであるが、それについては後に詳述する。

(二) 竹本喜世太夫正本「八百屋お七戀緋櫻」(伊賀屋版)は私の未見正本であるが、黒木勘藏氏は、之に關して

「既に享保二年十月に江戸の伊賀屋勘右衛門が出版した竹本喜世太夫、手づま人形竹田次郎五郎の正本「八百屋お七戀緋櫻」には、作者紀海音と明記してあり、文も殆んど同じであるから、既に上方に於て、これより以前に出て居た事は疑ふ

餘地はない……」(浮瑠璃名作集解題)

と述べてゐる。これは所謂海音作八九行本『八百屋お七』の文と比較しての話であらうが「殆んど同じ」とあるから多少の差はあるかと思はれ、多分第四の同じ喜世太夫正本である相模屋版『お七後日』の前半と同物であらうと思は



「紫戸江七お屋百八」 本正夫太世喜 夫太島

れる。いな後日物語がある(五)とも全部同文でありさうで(六)と同物かと思ふ。そして其外題を『戀絆櫻』といつたのは、所謂海音の『八百屋お七』の下巻の終にある「江戸櫻」といふ道行の題から出たにしても、改題の最初であつたかも知れぬ。いなひよつとすると、最後に述べるが如く、所謂海音の『八百屋お七』の外題が、最初からかういつたのかも知れぬ。

(四) 『八百屋お七戀櫻、付り、後日』は十行本であり、(六)にあける『八百お七、付、後日』と同版にて、唯外題を異にし、同じ竹本喜世太夫正本でもあり、さがみや與兵衛版にて、享保三年三月の刊記をもつてゐるだけの差がある。

下に、作者紀ノ海音とあり、更に享保戊戌年三月上旬、元濱町、伊賀屋勘右衛門とあつて、九行三十七丁の内題「八百屋お七戀櫻」といふのは、山村太郎氏藏だが、(四)の相模屋與兵衛版と同内容である。第一段に「八百屋お七戀櫻」

(五) 奥附に竹本茂太夫、竹本淺太夫、竹本文太夫、大阪太夫竹本喜世太夫、三味線鶴澤半七郎、人形竹田次郎五郎と順に書き、

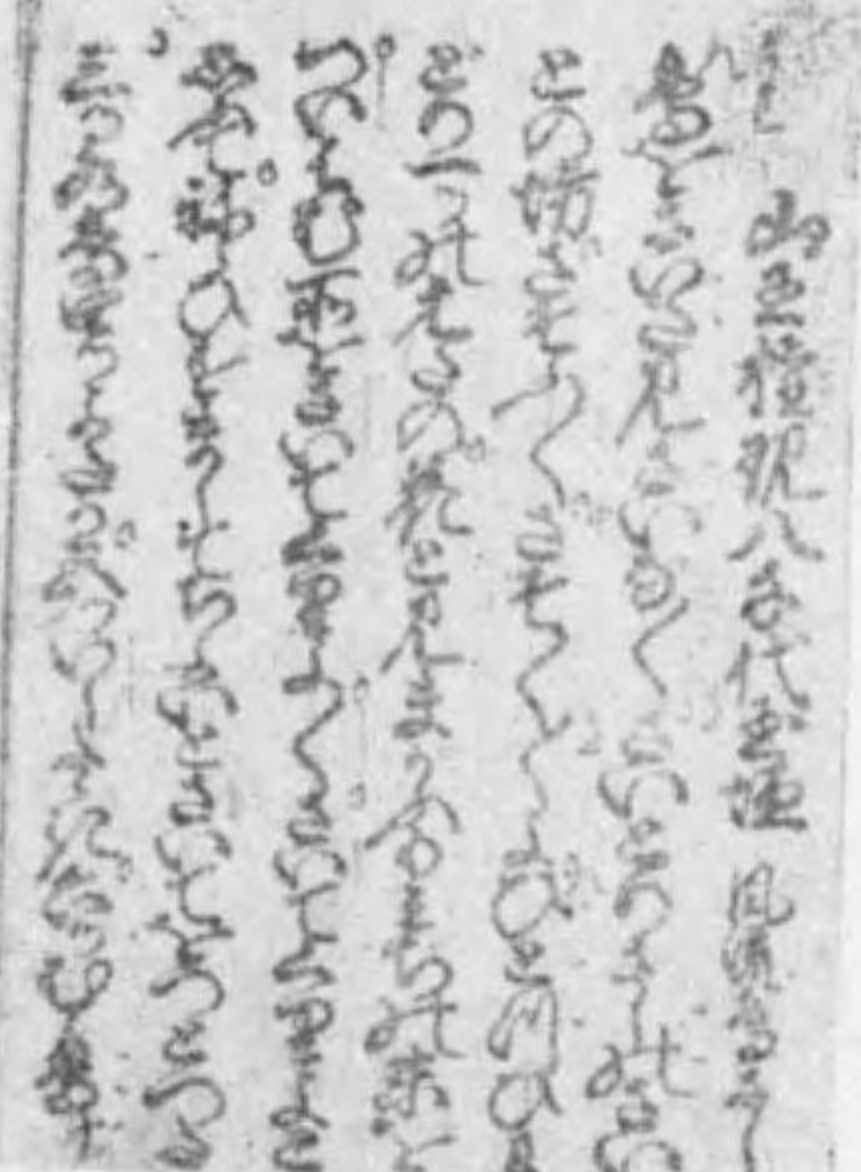
第三段終に「八百屋お七道行」の一行があり、第四段に「六ちぞうめぐり」の見出しがあれど、第五段の見出しが「八百屋お七うつゝのおぼろかご」とあり、極めて僅少の差があるのみで殆ど同文である。(四)と(五)の二つは同じ享保三年三月の出版で、何れが早いかわからぬが、(五)は(三)と同物であるやうに思はれる。

(六) 『八百屋お七、付、後日』は、其表紙見返しに「竹本喜世太夫」の名が明記されて、十行五十六丁の半紙本で、二部分に分れてゐる。

前半は所謂お七物語の本體にて、第一、第二、第三及び、第三に附屬した節事の場合から成り、所謂海音作『八百屋お七』の上中下の巻と、下巻についた節事「八百屋お七江戸櫻」を合せた全部と殆ど同文である。殆ど同文といつても讀比べて見ると多少の差はある。第一段では、一行又は半行足らずの書改めが四ヶ所あり、第二段では、前の方に十五六行改變があり、あとの方に一二ヶ所と、終に四五行の差がある。第三段では、祭文の終が二三行變化があるのみである。末行には「湯島女坂の下、相模屋與兵衛開板」と記されてゐる。

後半三十八丁以下の十九丁は、寶永四年夏竹本座上演、近松作『卯月の潤色』の中の巻に多少の手を入れて、殆ど其儘といつてもいい位に之を借用して、終の方を少しく改作し、お七の亡魂と吉三とが、武兵衛に對する仇討物とした、いはばお七の死後の後日物語である。そしてそれが、「六地藏めぐり、後日上の巻」と「戀ざくら、おぼろかご、後日中の巻」の二段とされ、下の巻なるものは、理論上はあるべくして實際は存在しない。それは全く『卯月の潤色』の文を借用したからである。即ち『卯月の潤色』の上の巻は、元來『卯月の紅葉』の下の巻の繰返であるから取入れず、中の巻を取つて、原曲の「二十二社めぐり」を「六地藏めぐり」に書直し、その以下「庵室の場」を矢張吉三郎

の「庵住の場」とし、原曲の下の巻は、書置であるから取入れなかつたのである。原曲に似せながら、取入れなかつたので、この後日物語は、下の巻なしの一見奇形と見える儘になつてゐるものと思はれる。



本正麻薩松富

更に本曲の刊年は正本には元から記されてはゐなかつたやうであるが、それについては、第一段の初めの邊に於て、海音作の『八百屋お七』には

聞けば毎日さかい丁とびき丁の御遊さんにかぶき若衆のうつくしい、
姿でうまい狂言を御らうじた……

とあるのが、本曲では

聞けば毎日さかい丁ふきや丁へ御遊山じやげな、定めし今日も國性爺
がな見てござつたの……

「垣玉代千八現權王山」

と改作されてゐる。これは享保二年五月に、中村座（さかい町）市村座（ふきや町）兩座に於て、『國性爺』の上演されたことを取入れたものと思はれる。

又第二段の初めに於て、海音作では

春をもまたず行年を、おしむでもなし、世の中は……

の文が、本曲では

右此本者依小子之懇望望耐松富
音節自逐枝合令関板者也
宇治大節夫
野田若秋
富委薩摩
お徳竹王作
富竹式夫夫
二條通寺町西入町 山本丸兵衛判

秋をもまたず行年をおしむともなき、世の中は……

とされてゐる。これは祐田善雄氏の説かれる如く、春の方が秋よりも妥當であり、其他に雪に關係の句が、本曲では凡て取り去られてゐる點から見て、秋の上演の爲の小細工と見るのは穩當であらう。

又本曲後日物語の中に、小僧辨長の談話の一節として

「そのあけの日は旦那しゆと堺町をふるまはれ、どこぞのぞめといわる、ゆへ、一べんかんばん見まはりしが、竹の丞のむかいにて、上方ぶしの上るりに、八百屋お七こいざくらとかんばんがあつたゆへゆかりの事とてはいりしにおびたしい人ぐんじゆ……」

とあるのは、享保二年十月刊、喜世太夫正本『八百屋お七戀絆櫻』（伊賀屋板）の上演に關係するものかと思はれる。以上の事情を考へ、本曲が享保二年十月前後の頃、又之が後日物語を取入れた六段本『八百屋お七江戸紫』（享保五年正月刊）以前、恐らく第七の三段本『八百屋お七江戸紫』（四年八月刊）の前年の秋迄、即ち享保三年秋迄の再版と見るのは穩當のやうに思はれる。

(七) 三段本『八百屋お七江戸紫』は、矢張湯島天神下相模屋與兵衛刊にて、前附の裏に、堺島太夫、竹本喜世太夫と大書し、更に茂太夫半太夫淺太夫の三人の名が併記され、太夫名の上に享保四己亥八月吉日と記し、卷末には、「江戸紫三段目終」とあり、之と大凡肩を並べて、次に「手妻太夫、辰松八郎兵衛座」、座名の右側に「辰松幸助」、左側に「辰松三十郎」、更に低く「作者 紀の海音 辰松幸助」と記してある。

本曲が「三段目終」と記されてゐることも想像出来るが如く、此三段で完結してゐるのでなく、悪臣彈正が主家

を横領しようとして、若殿梅太郎を放埒に導いて、勘當の身とならせ、忠臣等を斃して、最後に主人を殺して一家を破滅に陥らせ、其身は榮華に耽らうとする、それを知ると若殿も遂に眼をさまして復讐しようとするといふまでを描いたもので、まだ復讐は完成してゐないのである。

ところがこれだけでは、矢張お七物語とは何の關係もないことに終るので、忠臣源次兵衛が若殿の爲に、遊びの金を調達せんとして、高野僧を殺したので、其禍を我子に及ぼすまいとして、臣の十内をして吉三郎を武藏の吉祥院に送らしめて、出家させようとするることによつて、僅にお七物語との間接の縁をつなぎ得たのである。だからこそまだお七は此三段の間では出て来ぬのである。つまり此曲はまだお七物語の前日物語なのである。これにお七物語の本體と、後日物語とをつないで、お七物語の三日物語ともいふやうなものを作らうとしたのが、作者の意圖であつたらうことは、享保五年正月刊の「八百屋お七江戸紫」を見ると、一目瞭然たるものがあるのである。

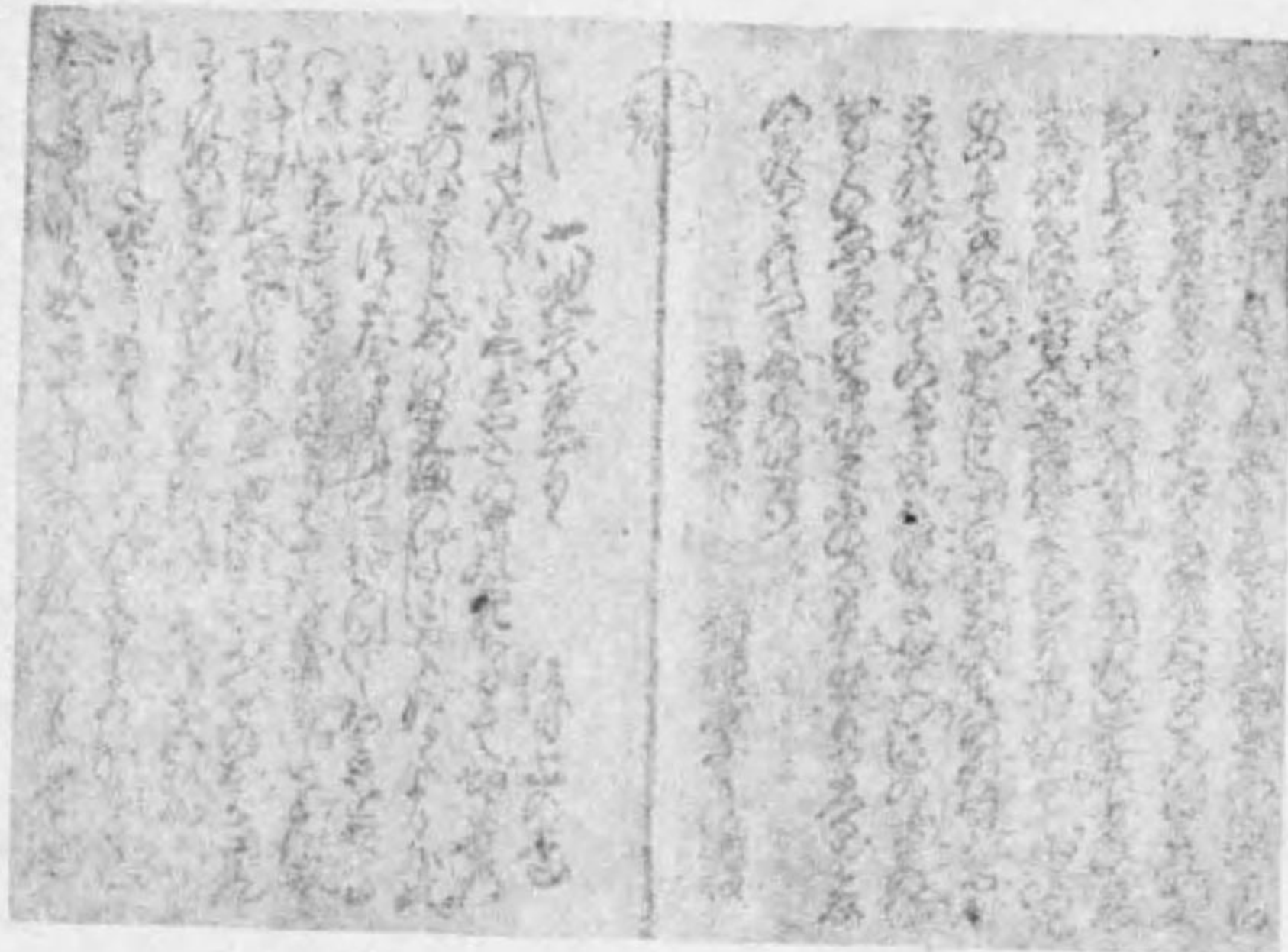
「海音はお七を題材にして淨るりを構想するに當り、まづ『江戸紫』に筆を染めて出来上つたが、五段組織にもならず、三段では纏らず、遂に別に三段の世話物の形式を採つて、『江戸紫』を捨てざるを得なくなつたので、これを捨て、別に『八百屋お七』を寶永元年に書卸したのであらう。そして吉三郎の一條が、尙その作中に帶の如くに残存して、『王子酒』の條をなしたのであらう。そしてそれを『八百屋お七歌祭文』の外題で上演した。二度目の上演には『八百屋お七戀耕耨』と改題して上演したものだらう。が豊竹座では、遂にお七の前編『江戸紫』は手摺にかゝらずに、海音はこの『江戸紫』は筐底に移してゐた。」

「海音はお七を題材にして淨るりを構想するに當り、まづ『江戸紫』に筆を染めて出来上つたが、五段組織にもならず、三段では纏らず、遂に別に三段の世話物の形式を採つて、『江戸紫』を捨てざるを得なくなつたので、これを捨て、別に『八百屋お七』を寶永元年に書卸したのであらう。そして吉三郎の一條が、尙その作中に帶の如くに残存して、『王子酒』の條をなしたのであらう。そしてそれを『八百屋お七歌祭文』の外題で上演した。二度目の上演には『八百屋お七戀耕耨』と改題して上演したものだらう。が豊竹座では、遂にお七の前編『江戸紫』は手摺にかゝらずに、海音はこの『江戸紫』は筐底に移してゐた。」

これで見ると、『近世演劇雜考』の著者は、本曲に作者紀の海音 辰松幸助とあるので、之を直ちに海音の作と信じてしまつたものと思はれる。それがもとで、海音は最初に之を書いて遂に筐底に藏しておいたのを、後になつて引すり出して、江戸で上演したものと断定を下したのであらう。

ところが「紀海音の著作年代考證とその作品傾向」(國語・國文六卷の七及八)の筆者祐田善雄氏は、さすがに本曲の作者の點に關して、次の如く述べて、其炯眼と慎重な態度とを示してゐられる。

「次に不審を懷かせられる點は、作者が連名になつてゐる事である。尙作者紀海音を紀の海音と書いてゐる。こんな例は彼の淨瑠璃を始め、他の著作にも滅多に見ない處である。さうなると、この出版物を海音が書いたかどうか疑が起らざるを得ないのである。この疑問を絶えず腦裡に浮べて、この正本を視ると、益々疑問は擴大する……正本の作者紀の海音を、その儘信用出来るかどうかは不明である。然し主となつて筆を揮つたのは辰松幸助であることだけは想像出来る。恐らく海音が筆をとつたとすれば、正本に辰松幸助を連名で載せる事はしなかつたと思ふ」



本正夫太世喜本竹 「日後、付、七お屋百八」

まことにさうである。兎に角海音は豊付座の座附作者であり、當代に於ける一二流の大家である。一般に行はれたやうに、世間並に前作の剽竊や借用はやつても、まだ合作はやらなかつたやうである。本曲を海音と幸助の合作と見るのは妥當でないやうである。現に本曲が最初に説いた『山王権現八千代玉垣』の改作であることを思ふ時に、一層その感が深いのである。試に本曲と『山王権現』とが、其冒頭から如何に酷似してゐるかを見ると下の如くである。

△江戸紫の曲首「鳥をさいて見さいなく、刺鳥さしのさいとの坊さそすと思ふて、くひとつひ鳥ひとつの枝に、花と見まがふもみぢのすを、ついはむ所を、さいてくりよ、さいてくりよとおもて、ねらいすましてちよつとさいておつとつた、ふたつふぐろに三つ水鳥四つよたか、五ついたよき、六つむく鳥ナンくくく七つ七浦八つの景見上見下ろす海と山近江のくの一城主花園の一子梅太郎、生れついたる色好み……通ひなれたるわけ里は都の辰巳……」

△山王権現の曲首「鳥をさいた見さいなく、さいとりさしのさいとの坊、さそふく、さそくくよ、ひとつひわどり一つの枝の、花と見まがふもみぢの末を、ついはむ所をさいてくりよ、くさいてくりよと思ふて、ねらいすましてちよつとさいておつとつた、三つ水鳥、四つよたか、五ついたよき、六つむく鳥ナンくく七つ七浦八つのけい、見上見おろす、うみと山あふみの國の一城主花園殿のおそば去らず大炊の介久つれば、若殿みんぶ梅太郎通ひたまひてしばくも柴屋町にて……」

この曲首を見たゞけでも、如何に兩曲が酷似してゐるか想像出来るであらうが、『山王権現』上巻をとり、その中に、吉三郎の一條を添へて、多少の手を加へ、それを本曲の第一、二段とし、更に適當に三段目を綴つて、纏め上げたのが本曲なのである。『山王権現』に刊記がないので、或は反對に、その方が本曲を改作したものではないかと疑

ふものがあるかも知らぬが、『山王権現』は全曲の構造が釣合がとれて、纏りがついてゐるに反して、本曲は如何にもお七物語との關係があまりに乏しい上に、最初に説き出されたお家騒動や復讐物語は、最後まであまゝに打やられてゐることが、六段本の『江戸紫』で知られ、結局これがお七物語に向つて急轉回することの不自然さなどからも『山王権現』が本曲を改作して成つたものと見ることは、あまりに妥當を缺くのである。

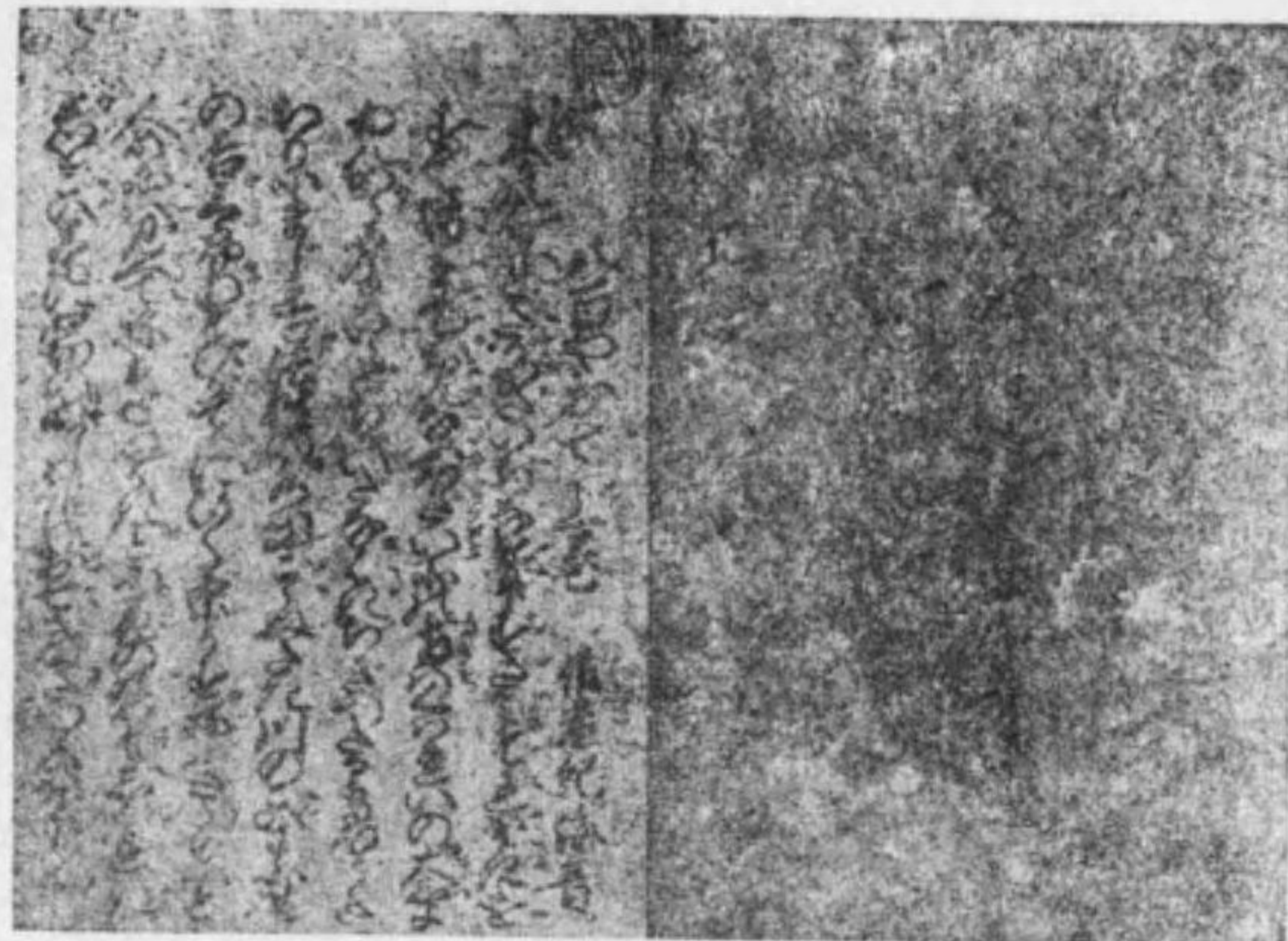
勿論、『山王権現』の作者が紀海音であるか否かは兎に角、本曲の作者として、紀海音と辰松幸助との二人の名が併記されてゐるのは、後にも述べる如く、最初辰松幸助、喜世太夫、海音の三人か二人の相談で、『山王権現』改作の話が出来てでもゐて、所謂海音の『八百屋お七』の本體の方が上方で先に刊行され、前日物語の方が後になつて江戸で出たにもとづくのではなからうか。換言すれば、三段本『江戸紫』の次に四段目以下の作があるか、腹案があつた爲に、極めて平易に考へて、版元か辰松幸助か二人の名を併べたのではなからうか。かくして本曲の四段目以下が刊行されたか否か、刊行は兎に角、上演したか、又はそれに近い企があつたらしい事は、享保五年正月刊の六段本『江戸紫』を見る時に略ぼ推測出来るやうである。何れにしても本曲の作者としては、辰松幸助が事實上の當事者であるかは明かでないにしても、立派に其責任を負ふ意であらう。そして六段本の仕組を考へたりすると、前の後日物語——近松の『卯月の潤色』を改作した『六地藏めぐり』以下だとして、或は其責任者が辰松幸助どもではなからうかとも推測されさへするのである。

(八) 繪入六段本の『八百屋お七江戸紫』は、三段本『江戸紫』の機巧仕掛をすつかり暴露するものであるやうに思はれる。奥附によると、江戸通油町、村田屋新板であり、小形十六行十丁の羽川珍重沖信筆の挿繪を入れた讀本風

のものである。これが三段本の抄略改作物であることは其曲首が

「扱も其後日ものどか心ものどかさしほの鳥をさいた見さいなさい鳥さしのさいとのほう、ひとつひよとりふたつふくらう三つ水鳥四つよたか五ついしたよき六つむく鳥七つ七浦八つのけい見え渡たる海と山あふみの國の一城主花そのよ一子

梅太郎……」



「櫻耕懸七お屋百八」

作 音 海 紀

とあるにても知られるが、初段と二段目半までは、「山王権現八千代玉垣」の上の巻をかり、つまり直接には三段本『江戸紫』をかり、二段目後半から五段目終までは、海音の『八百屋お七』をかり、六段目は近松の『卯月の潤色』をかりて作りあげたものである。換言すれば『山王権現』を抄略して前日物語をつくり、更に『八百屋お七、付後日』をとつて、お七物語の本體と後日物語を添へたもので、爰に至つて、三段本『江戸紫』に豫定され、若しくは豫想され得るものを纏めあげた感があるのである。けれども三段本『江戸紫』よりも、筆致が拙劣であり、文脈がちぐはぐになつて居たり、短縮され抄略されてゐる跡が瞭然たるものがある事から見ると、三段本『江戸紫』には、四段目以下が元來存在してゐたのではなからうか、少くも刊行されなかつたとしても、上演でもされたのではないかといふ多少の疑はもてるのである。尤もそれが刊行されなかつたとして

も、三段本『江戸紫』と、『八百屋お七、付、後日』を抄略し、適當に改作して、刊行する位のことには誰にだつて出来ることであるから、六段本『江戸紫』の存在を以て、三段本『江戸紫』に四段目以下の正本が存在してゐたことを裏書するものと見ることの出来ないのは云ふまでもないことである。

兎に角、江戸版八百屋お七の正本は大體以上の如き徑路を辿つて展開されたものと思はれるが、此處に序に加へておきたいのは第十の富松薩摩の正本『吾妻歌七枚起請』である。

(10) 『吾妻歌七枚起請』は七行三十六丁の九兵衛版にて、刊年の明記はないが、奥附に「太夫富松薩摩」と明記されてゐる。『歌舞伎事始』によると、富松薩摩は

「延寶六年十一月二十八日口宣頂戴して薩摩といへり、其後譲り請、正徳二辰年七月十一日に御免ありて、則薩摩源之丞と

す……」

とあり、又彼が繁昌したのも寶永正徳であつたことを『聲曲類纂』も記してゐるから、この正本の現はれたのは正徳二年七月以前らしくも思はれるが、必ずしもさう斷定出来ないのは、同じ薩摩の正本『山王権現八千代玉垣』が之を證明してゐる。奥附に太夫名があつたとて、そこに刊年の明記されてゐない限り、妄りに斷定を許さぬものがあるのだ、結局此正本の刊年が未詳であるのは残念である。殊に薩摩源之丞は二代目らしくもあるからである。

處で此正本の内容は如何なるものであるかといふと、上、中の巻は所謂海音の『八百屋お七』の上中の巻と全く同文にて、下巻と思はれる段に、「お七道行、一中正本」といふ僅に二丁半に過ぎない道行文がついてゐる。その道行文は、それでは別に題簽外題を『八百屋お七』（内題を、「八百屋お七物語」といふ）とせる都一中の三段曲第十二

(第三段は唯道行文)の中の道行文から借りたものかと思ふと、その道行文とは全く関係がない。

かの「外題年鑑」明和版にあげられ、「義太夫年表」にも入れられてゐる正徳二年七月豊竹座上演七枚「吾妻雛形」起請

は、本曲と何かの縁があるのではないかと思はれるが、それを未見なるが故に断定は出来ぬ。

かくして此正本は結局享保三年後のものかと思はれるのである。

(一一)『末廣昌源氏』は、頼親の叛逆と身替物語に、お七吉三の戀物語をつなぎ合せたものであるが、その戀物語は第三四段に入れられ、お七の戀人吉三は、仲光が我子を身替にして隠した、美女丸であるとし、彼は頼親に讒せられて、父滿仲の命で仲光から討たれることになつてゐるが、巧に頼親方の村雲王子を生捕にした功で、大内の近侍となるのである。けれども此曲のお七吉三の物語は、海音曲のほんの借物にしか過ぎないやうである。

三

残るは第一の寶永元年二月十五日上演の曲と、第九の享保十七年正月二十日上演の「八百屋お七戀緋櫻」と、兩者の關係と、お七の淨曲と狂言本との關係である。

何といつても「八百屋お七」の淨瑠璃に關して、一番問題になるのは、寶永元年二月十五月初日豊竹座上演と、明



右此本者依小子之戀想玉附録
音節自送校合令開板者也

大天 富松隆摩

「請起枚七歌妻吾」

本正摩隆松富

和五年と安永八年の「増補外題年鑑」に記されてゐる「八百屋お七歌祭文」である。水谷不倒氏は「世話淨瑠璃大全」の解題に於て、

「淨瑠璃にては、本巻に收めたる紀海音が「八百屋お七歌祭文」(寶永元年正月)と「八百屋お七戀緋櫻」(享保十七年)との二種ある如く「聲曲類纂」には記したれど、恐らく其の時によりて、唯外題を變更したるのみなるべく、別種の作にはあらざるべし」

といひ、成程「聲曲類纂」の豊竹派淨瑠璃外題目録中にも、本曲を「寶永元年二月海音作」とはしてゐるが、黒木勲藏氏は「淨瑠璃名作集」の解題に於て

「外題年鑑には寶永元年二月十五日から「八百屋お七歌祭文」を興行したとあるが、私はまだその正本も見ないし、又この時は豊竹座は一時退轉して居つたと考へて居るので、旁直に従ふわけには行かぬ……唯私は「八百屋お七歌祭文」と現存の「八百屋お七」とが同物であるかどうかには疑を存し、又その著作年月を正確にし得ないのを遺憾とする」

と述べてゐる。祐田善雄氏も亦「紀海音の著作年代考證とその作品傾向」(國語、國文、六卷の七)に於て、「八百屋お七歌祭文」を

「未見である故、元祿十七年二月十五日に果して上演したかどうかには就ては判断を下し得ないが、海音の署名があれば、恐らくは座附作者となつて以後の作だと推定したくなる。もし署名がないならば、彼の作であるかどうか疑問が存する。この意味に於て、この正本の發見をまつものである。寶永元年(元祿十七年)春には「東岸居士」を打上げて、地方巡業したと見てゐるから、この「外題年鑑」の説には従ひ得ないやうに思はれる。」

と述べられてゐる。今日まで私も「八百屋お七歌祭文」といふ正本未見であり、豊竹座創立後間もない元禄十七年即ち寶永元年頃の上演物については甚だ淺識であり、「外題年鑑」には「東岸居士」(元禄十五年九月九日)、『東大全』八百屋お七歌祭文」(元禄十七年二月十五日)とあつても、それを否定し切る程の力はないのであるし、黒木氏や祐田氏の云はれる其頃の豊竹座退轉の事も、未だ明かにし得ないのであるが、一寸此頃歌舞伎狂言としてのお七劇が如何にもてはやされたかを見ると、大體下の如くである。

寶永三年正月 大坂嵐三右衛門座にて、女形嵐喜代三(喜世三郎)八百屋お七を勤る、これお七の狂言の始なり。(歌舞伎年代記)

寶永四年霜月 江戸中村座へあらし喜代三下る、器量能大評判。

寶永五年 中村座、お七に嵐喜代三大當り。此頃地藏坊正元といふ者、江戸入口へ六地藏を建立す。俗の時の名を吉三郎といひたるゆゑ、吉三道心と人々よぶ。はお七が菩提の爲に立しといふ評判ありしを、狂言作者津打治兵衛、お七が戀したふ男は吉祥寺の小性吉三郎とは作し也。此年お七二十七回忌、吉三道心は、其比老年にて、天和の初、地藏二體は建立ありしとかや(歌舞伎年代記)

寶永六年 中村座にて嵐喜代三、又くり返しお七役にて大當也、正徳三年閏五月十五日嵐喜代三終。(歌舞伎年代記)

享保三年 市村座、嵐喜代三追善狂言、三條勘太郎お七を勤る(歌舞伎年代記)

以上の如く、歌舞伎としては、寶永三年後お七劇は度々東西の劇場に上演されて、相當人氣を博してゐるやうであるが、その際の狂言外題は明かでない。伊原敏郎博士の「日本演劇史」には、寶永三年の上演に關して、

「吾妻三八が當り作と稱せらるゝは、寶永三年正月、大坂嵐座にて書卸せる『お七歌祭文』にして八百屋お七に扮せるは嵐喜世三郎、高安吉三郎に杉山平八にして、其翌年、喜代三郎が江戸へ下りし時、之を齎らして、中村座に二年つゞけに繰返して演じたり」

と述べ、之を入れてか、『元禄歌舞伎傑作集』の「中將姫京雛」(寶永五年三月市村座上演)の解説には

「中將姫と八百屋お七とに扮した嵐喜世三郎は、寶永三年正月大坂の嵐座に於て、吾妻三八作の『お七歌祭文』にお七を勤めて好評を博し、寶永四年額見世に中村座へ下り、今度その得意のお七を演じて大當をとつたのである。」

と記されてゐる。伊原博士の記述中の『お七歌祭文』の外題もそれが本當の外題であつたかは疑はしく、内容も明晰ではなく、他の有ゆるお七劇を見ても、外題や狂言本の残つてゐるものはないらしく、よし外題が残つてゐても、お七とは至つて關係の乏しいものに、お七の役を強ひて割込んであつたものらしいことは、寶永五年三月市村座上演の『中將姫京雛』に於ける様子や、享保三年春市村座上演の嵐喜世三郎追善興行のお七劇が、『七種福壽會我』といふ外題であつたのでも、想像することが出来るやうである。して見ると、寶永頃に歌舞伎としてお七劇を演じたといつても、唯元禄初年の歌祭文の味を多少編込んだといふだけで、海音の作といはれる殘存正本「八百屋お七」風の世話がかつたものは、まだ現れてゐなかつたものゝ如く思はれるのである。換言すれば所謂元禄十七年二月上演の「八百屋お七歌祭文」なるものは、未だ存在しないで、それが歌舞伎劇の上には、影響を及ぼすまでに至つてゐなかつたものゝ如く思はれるのである。

かくして、正徳五年十一月の「國性爺合戦」が、翌享保元年秋都萬太夫座に於て榊山小四郎等によつて上演され、

その事を取入れた『山王権現八千代玉垣』が享保元年秋から享保二年春頃までの間に現はれ、更に其影響を受けて享保二年春から夏頃までの間に、所謂海音の残存正本『八百屋お七』は現はれたものと思はれる。そして海音の『八百屋お七』と縁のある『山王権現』が、享保四年に至つて、江戸に入つて、喜世太夫と島太夫の正本三段本『江戸紫』



(畫重珍川羽)「紫戸江七お屋百八」刊年五保享

として本當に頭をもたげてもしたのではなからうか。三段本『江戸紫』や海音の『八百屋お七』が『山王権現』の原作であるとするよりも、其仕組上に突飛な無理のない點から、『山王権現』が『八百屋お七』の原作であると見る時に、かうした推定に到達せざるを得ないのである。尤も三段本『江戸紫』の仕組の趣向に關しては、既に最初から、喜世太夫とか辰松幸助と海音との間に相談が出来てゐて、『山王権現』から改作されることになつてゐながら、公にされず、海音の『八百屋お七』だけ公にされ、三段本『江戸紫』の方は、江戸に於て、最初の趣向の儘公刊されたのかもしれないことは既述の如くである。尙黒木氏は海音の『八百屋お七』の上演を『鬼鹿毛武藏笠』(正徳三年十一月)より後の正徳四年頃の作とする説であるといふが、それが如何なる理由によるか、その記述が何處にあるかも知らぬ私は、漫然氏の説にも同意することも出来ぬのである。私の所謂海音の『八百屋お七』とは如何なるものかといふと

それは流布本上中下三段の『八百屋お七』であり、初行内題には『八百屋お七』とある八九行本のこと、それは等しく内題を『八百屋お七』といひ、九行本家藏にて、題簽の外題に『八百屋お七戀緋櫻』(豊竹越前少掾直正本)といへるものと全く同文である。黒木氏によれば『戀緋櫻』の七行本もあるといふが、それは未見である。けれどもそれとも、所謂『八百屋お七』と同文であることは黒木氏が之を明かにしてゐる。

是に於てか更に推測を下せば、所謂現存『八百屋お七』は、その内題からいつたので、外題は最初から『八百屋お七戀緋櫻』といつたのではなからうか。そしてその題簽か今日まで傳はらなかつたのではなからうか。だから『外題年鑑』には、享保十七年正月廿日の上演に「二度目」なる語が加へられてゐたり、享保二年十月伊賀屋勘右衛門刊の喜世太夫正本は海音作とあり、『八百屋お七戀緋櫻』とあるのではなからうか、そして黒木氏の云ふ如く、殆ど同文であるが故に、同一外題を用ひて、江戸で繪入本として出したのではなからうか。而も多少の改作が喜世太夫か、誰かによつて行はれてゐたので、それを取入れた『八百屋お七、付、後日』の前半には、その改作されて、少しく異つてゐる點が残つてゐるのではなからうかと思はれる。(昭和十四年五月、國語と國文學所載後、訂正)

○御國淨瑠璃集

【内容】小倉博氏編、本集所收仙臺淨瑠璃の内容は次の如くである。

- | | | |
|------------|-----------|---------|
| 田村三代記 | 田村三代記(異本) | 御山本地一代記 |
| 奥州一宮本地實錄 | 迫合戦 | 大日如來傳記 |
| 湯殿山大権現御本地記 | 竹生島之本地 | 鞍馬破 |
| 直垂あくち | 烏帽子折 | 宇治川 |
| 一の谷 | 那須興一扇の的 | 尼公物語 |
| 丸山物語 | 小佐治物語 | 爲致忠臣記 |
| 御所の的 | | |

第三篇 仙臺淨瑠璃研究

一 仙臺淨瑠璃の研究

一名稱 芭蕉の『奥の細道』には、元祿二年五月九日、鹽釜旅宿の記事中に

「その夜盲法師琵琶をならして、奥淨瑠璃といふものを語る、平家にもあらず舞にもあらず、ひなびたる鬮子うちあげて

枕近うかしましてければ、さすが邊土の遺風忘れざるものから殊勝に覺えらる」

とあり、奥淨瑠璃の名をあげてをり、柳亭種彦の『用捨箱』には仙臺淨瑠璃の名をもつて呼んでゐる。處が仙臺地方では、どちらも用ひないで、お國淨瑠璃と呼んでゐる。又東北大學圖書館藏、舊狩野文庫の『筆まかせ』と題する、旅役者、豊後大掾衆秀と自稱せるもの、日記にも、文政十一年七月二十五日の條に、仙臺領玉造郡川渡温泉にて、「その地の座頭が、自分の語るのを御國淨瑠璃だといつた」と記してあるといへば、相當古くからお國淨瑠璃の名も用ひられたものと思はれる。なほ單に「お國節」とも稱したことは、文政十二年の「仙臺領高名競角力」といふ番附に、お國ぶしと、さんさしくれとが併べてあげてあることでも裏書され、仙臺の國學者保田光利著『新撰陸奥風土記』(萬延元年)卷二の奥國淨瑠璃の條に、

「奥の風俗にて樹飯ツツヒ或は馬の頭月日待などに必ず催し、又追福作善の爲にも催すなり、其音節は今時の謠歌の風聲にあらず、六段大方は、四天王剛強づくし或は辨慶、義經、田村三代記など、數多く覺えたるを上手とす、又追善などには何の

本地何物語などいひて、愁嘆ともいふものを語る、是を奥國音節の催會といふ」

ともいつてゐる。自國自己の藩を愛敬して、御國といふことから來たものと思はれる。

二 古淨瑠璃との關係 ところで、大槻如電翁は明治四十三年十月二十二日、仙臺市外長町の盲人赤井澤龍之一を、東京音樂學校に招いて演奏せしめ、それに關する考察を「仙臺淨瑠璃の考」と題して、雜誌「音樂」第二卷第一號(明治四十四年一月東京音樂學校學友會發行、現に仙臺叢書第十六に轉載)に公にして、仙臺淨瑠璃を以て、「古淨瑠璃の中の最も古き淨瑠璃の、上國にては全く廢れたるが、獨り仙臺にのみ残りしものと考ふ」となし、更に龍之一の演奏をきいた高野斑山、本居長世、幸堂得知、永井素岳、三宅延齡、竹内半吉の六氏が、同じ「音樂」誌上に發表した「奥淨瑠璃合評」に於て、「約めて申せば、平曲家は奥淨瑠璃を以て、確に自分等の縁戚であると認めて、古風を十分に存するものと認め、我等同人も多數は古淨瑠璃の面影を存するものと認定する」とあるに對して、「お國淨瑠璃」(昭和七年六月刊)の著者であり、又その熱心なる蒐集家である小倉博氏は、同書の解題に於て、次の如く述べられてゐる。

お國淨瑠璃の定義を單に「古淨瑠璃の獨り仙臺にのみ残つたもの」としたたげでは、未だその真相を盡してゐない。實際お國淨瑠璃は、書遺されてゐるのを見ても、現に語るのを聞いても、古淨瑠璃の原形をそのまま保存してゐるのは殆ど無い。外題の古淨瑠璃と同じなものでも、内容や文句に多少の轉訛があり、或は全く古淨瑠璃に見出されさうもない外題のがあり、又取材の上から見て、仙臺地方で特に作られたらしく推察されるものもある。況や現に近松物などを語る事實や軍談ならば何でも語るといふ説のあることを考へると、お國淨瑠璃は、かなり複雑な性質を有つてゐるものである。

しかしお國淨瑠璃と稱するものうちで、多少の轉訛があるにしても、古淨瑠璃の面影を十分に保有するもの、及この地方で特作されたものでも、その結構が傳奇的で、その文體の特殊な點で、古淨瑠璃の型をとつたのを、お國淨瑠璃の正系と見做し、近松以下のものや、一般軍談類を語るのや、「義經記奥州本」(改定史籍集覽所收)「常盤津蜘蛛の絲」(浮世風呂)にあるやうな、殊更に卑俚な詞を弄したのは、偶發的のものとして、姑くお國淨瑠璃から除外するのが穩當であらう。要するにお國淨瑠璃は古淨瑠璃(多少の轉訛を伴つて)又は古淨瑠璃の型を模して作つた淨瑠璃を、仙臺特有の曲節で語るものである。

小倉氏の説かれる如く、奥淨瑠璃乃至仙臺淨瑠璃は、全く古淨瑠璃若しくはその仙臺地方化したものと、それ等の形式體裁に模倣して作つたものと、近松の改作などで成つてゐるのであつて、仙臺地方で創作されたと思はれるものの中には、地方的題材を用ひ、地方色の豊かなものも多く、これらは後代の創作になつたものか、其段數も可成り多いものがある。その他古淨瑠璃中に見られない判官關係のものも少くないのである。その他に軍談物まで語られたらしいことは、南部叢書第九冊に載せられてゐる「九戸軍談記」を見ると、如何にもと肯かれるのである。即ち「九戸軍談記」は、天正の昔宗家に叛した九戸政實の討伐記であつて、文政頃に成つたものか、それが殆ど淨瑠璃の形式にして、十二段目までであるのである。尙ほ之に關しては項を改めて説くことにする。

三 曲節 後にも記す如く、奥淨瑠璃が「奥羽永慶軍記」にあるやうに、天正頃から存在してゐたとすると、其語り方は元來素朴單調なものであつたらうし、その語り方の大綱も、今日語られるが如く、多少の曲節をつけて語る部分と、讀むが如くする部分位に過ぎなかつたであらう。而もそれが今日の義太夫節の如きものにまで發達するに至ら

ず、曲節をつけるにしても、朗讀するにしても、その場所は勝手に行はれたであらうし、従つて、單調至極なものであつたらう。そして又元祿頃には、『奥の細道』に見られる如く、琵琶を伴奏器としたらしいばかりか、

みちのくの三絃きけば扇かな

(元祿三年嵐雪選「其袋」)

にも見られる如く、三絃の代りに、まだ扇拍子でも語つてゐたらしいのであるから、相當素朴な演奏が行はれてゐたことと思はれるのである。

かくの如き素朴單調であつたらしい奥淨瑠璃でありながら、大槻翁の記述によると、奥淨瑠璃に四流あつて、城札節、かほ一節、重一節、喜右衛門節が存在してゐたやうである。最後の喜右衛門節は明治四十三年から六七十年前に出来たもので、前の三者は百五十年前の存在で、三流の祖たる此三人の存在した明和頃、三味線を伴奏として語り出したものとされてゐる。

それに終始變化に乏しい語り方だと思はれるに、語り場(普通の如く語る)、修羅場、愁歎、道行、はこび(曲節急にして疊みがける如くする)、小結び、大結び、小段落、大段落の九つの曲節があるといひ、三味線の調子は本調子のみにて、二上り、三下りなどなく、中棹にて、皮をたるませて張つた三味線を用ひると記されてゐる。

四 流派 三流の中にて、城札節は語り口勇ましく、かほ一節、重一節は低く柔かく、殊にかほ一の妻わかといふは口寄のいちこであつたので、口寄の曲節も取入れて居たといはれる。

城札節の祖は檢校城札にて、其弟子に檢校若生城秀あり、其又弟子等も皆名人であつたといふが、大抵既に世を去り、城札節から出た喜右衛門も、其師城八も盲人でなく、従つて其弟子も皆盲人でなかつたといふが、文久の頃かほ

一節の樋口みよの一は、晴眼者の侵入を憤慨して訴へ、盲人以外のこの淨瑠璃を語ることを禁ずることゝなつたといはれる。

かほ一は八百段も知つてゐたといふのであるから、奥淨瑠璃の曲目も頗る澤山あつたことを察すべく、喜右衛門は相當俗受のする曲節を語り始めたと傳へられるが、城札節の赤井澤龍一は、其強き語り口に應ずべく、後には義太夫節の三味線を用ひたといはれ、従つて他の流派の低音にして緩調であつたに反し、高音急調な派手なものであつたといふ。その龍一晩年の語物には、

瀬田合戦、丸山合戦、新羅十三代記、友春注進記、今川二度の注進記、堀河夜討、天神記、

奥州前九年記、常盤御前鞍馬破、八島、御所の酌、田村三代記、唐紙注進記

の十三種があつたと記されてゐる。

五 史的考察 序に龍一の演奏を聞いた人々の合評の中、史的考察上参考すべき幸堂翁の曲節に關するものを要約すると次の如くである。

「寶曆の末、明和頃まで扇拍子が行はれ、早くとも安永天明頃始めて三味線を用ひたかと思ふ。その證據は、明和三年市村座の顔見世に出した「蜘蛛絲絃」俗に仙臺座頭といふ淨瑠璃に、初代文字太夫が仙臺座頭の歌を入れて作曲してあるが、その節付によつて考へると、どうも扇拍子時代の語物によつたものと思はれる……

三味線を用ふるやうになつた頃から、丁度江戸方面から流行して來た説經祭文などの感化を受けて、この語り口を取入れるやうになつたと思ふ。祭文は先づ神おろしといふがあつて、それから俗文講話に五常を寄せて語つたもので、初は手錫

杖、法螺貝などを合せて語つたものだが、近く天保の末から嘉永の頃に、三味線を入れるやうになつて、俗に之をテロレシ祭文と云ひ、説經は、操芝居の地方さかたに使はれたのは、之を天満節と申し、物質は門説經を語つたものです。奥淨るりは

此感化を受けて餘程變つたものと思ふ。つまり今の仙臺淨るりは昔の扇拍子時代のものへ、説經祭文が加つてゐるものと思はれ、只今の浪花節は歌祭文の崩れたもの、源氏節は説經の崩れたものである。」

所が平曲の研究家であつた「平家音楽史」の著者館山漸之進氏の奥淨瑠璃に関する批評を見ると、

「奥淨瑠璃は徳川時代前のもので、平曲のクドキとシラ聲とを受入れてゐる、平曲から幸若、奥淨瑠璃となつたと思ふ。序や結の三味線の手に移る前の唄風の比較的曲節の多い部分は、三下りの追分を取入れたものであらう」

「論 甲 平 公」

寛文三年版



三味線は後に入れたもの、即ち朗讀式、講釋の立て讀み式が本位で、語り場、道行、ハコビなどに昔の面影を見る……」

以上を見ても諸説があることがわかるが、私の浅い経験では、平曲のクドキとシラ聲があるといふのも肯かれ、幸若の面影の残つてゐることも思はれ、説經歌祭文も加はつてゐる説にも賛成する。のみならず、三味線の手と朗讀の仕方とは、最初から伴つてゐたものでなくて、まるで別々の感があり、今日のラジオで屢々かされる若松若太夫の説經節の語り方も、その三味線の手とも、似た所が少くないと思つてゐる。

六 方言的研究 奥淨瑠璃に現れてゐる地方的音聲の變化については、小倉博氏の令弟小倉進平氏が、最初音楽學校に於ける際の研究について發表されたものが、仙臺叢書に轉載されてゐるが、それは主として撥音の次に來る阿行、也行、和行の音聲に関するもので、

- 御出(おんにて) 御入(おんにり)
- 御家(おんにへ) 善惡(せんなく) 御主(おんなるじ)
- 殊に、は、を、を受ける時甚しく
- 兩人な承り 當年な十五歳 羨まざらん無かりけり。
- 拜見の許され 先陣の給はり。
- 又「引込みて」を「引きこうで」といひ、「さしたるを」を「さいたる」。

これらは足利時代の語法でもあり、狂言や幸若には屢々見られる事であるが、更に之を研究することは興味のあることであらう。

なほこの上の奥淨瑠璃に関する概説は、私が京都帝大文學部の「國語・國文」(昭和十四年十月號)紙上に發表した次の文にゆづることにする。

二 仙臺淨瑠璃と古淨瑠璃 (國語國文誌所載を訂正して引用する)

刊行正本無し 奥淨瑠璃乃ち仙臺淨瑠璃又はお國淨瑠璃と呼ばれる東北地方流布の淨瑠璃を通じて、最も驚くべきことは、所謂正本と稱すべき刊本の一種も見當らぬことである。私の所見正本が一冊もないのみか、この方面の最も熱心なる蒐集家であり、『お國淨瑠璃』なる一書を公にしてゐられる小倉博氏ですら、奥淨瑠璃若しくはそれに用ひられた江戸版刊本の一種も見ることがないといつて、「不思議なことには、編者はこの正本といふものを見たことがなく、又見たといふ人を聞いたこともない、現に残つてゐるお國淨瑠璃本は、編者の知る限では、悉くこの地方の物好きな手に成つたと思はれる寫本である」と述べてゐられる程である。之に關しての私見は後に述べるとして、現存曲が凡て寫本であることは事實である。今この寫本を土臺として記述を進めるに方つて、私は空疎なる見解を先に羅列するよりも、一通り殘存寫本をのぞいて見ることにしよう。

四種に分類 さて所見寫本、活字本及び、其殘存を保證されてゐる仙臺淨瑠璃七十餘種を考察するに方つて、先づ便宜上之を四種に分けて見たいと思ふ。

第一類 古淨瑠璃、又は其改題、改作、若しくは古淨瑠璃を奥淨瑠璃化するもの

第二類 判官物、もしくは直接間接に判官に關係せる、古淨瑠璃又は判官關係の地方的創作

第三類 奥羽地方の題材によりて創作されたる特殊曲

第四類 近松關係物、未見物及び不明のもの

以上の分類は極めて曖昧な分け方ではあるが、其中第一類は一見して、古淨瑠璃の何れかと、其内容題材を一にしそれを改作したものか、それに多少の手を入れただけのものか、若しくは奥羽地方に於て語られてゐる中に、自ら字句の上に多少の變化を生じたものかである。第二類は判官義経が平家討伐の目的を以て、最初秀衡に頼つた事實や、最後に彼が悲痛な終を遂げたのが高館であつたといふことや、彼の武勇を崇拜し、彼に同情することなどから、奥羽地方には何かにつけて義經關係のものが多く、それが此地方の語物にも影響したと見えて、判官關係のものが頗る多いのである。勿論判官關係のものといふ中には、彼と最も因縁の深かつた辨慶や、繼信忠信や、一の谷や、八島に關係したもの凡てを含めて見たいのであるが、その中には、其原形若しくは原據を古淨瑠璃に見出し得るものもあり、若しくは幸若舞曲、義經記、源平盛衰記、お伽草子等によつて、地方的に作り出されたかと思はれるものもあるが、之等を皆一緒に包括して云ふのである。第三類は、此地方特有の題材によつて、特に此地方の聽衆の興味をそゝるやうに古淨瑠璃風に作られたものであつて、仙臺淨瑠璃中最も興味あるものである。第四類は、近松物若しくは近松物と推定されてゐるもの等から借りて、之に手を入れたり、いつか變化したものゝ外に、未見の語物を含めたものである。従つて第四類は更に二つに分けて見ることも出来るのである。今この概念の下に大體に曲目を分類して見よう。

○第一類 古淨瑠璃中心の曲

一、竹生島の本地——竹生島辨財天御本地 (七段)

本曲は相模鎌正本の『辨財天利生物語』や天満八太夫、重太夫の正本『大福神辨財天御本地』と關係がありさう

に見えて、それ等とは殆ど関係のないもので、むしろ寛文元年五月刊天満八太夫の物語かと思はれる「松浦長者」の改作である。七段となつてゐるのは、原曲の五六段目の前へ、女主人公が奥州まで落ちてゆく道行を加へ、之を奥州化した爲である。

- 一、百合若むくり退治 (七段)
寛文二年刊、日暮小太夫正本「ゆり若大臣」を改作したものである。
- 三、四天王國廻 (十段)
寛文三年五月刊、「公平生捕問答」、若しくは貞享三年二月刊「四天王國廻」を改作したもの。
- 四、善光寺如來由來 (五段)
寛文二年五月刊「月界長者」又は「善光寺本地」と殆ど同文である。
- 五、金平甲論 (六段)
寛文三年六月刊、大和掾正本「公平甲論」を殆ど其儘用ひてゐる。
- 六、阿彌陀胸割 (六段)
古淨瑠璃「阿彌陀胸割」の享保版に近いものであるが、元來は慶長頃から語られたものが原曲である。
- 七、梵天國 (六段)
二種の異本があるが、元來慶長頃から語られた古淨瑠璃を原形とするものである。
- 八、頼光跡目論 (六段)

寛文中頃のものと思はれる大和掾の正本、古淨瑠璃「頼光跡目論」を殆ど其儘用ひてゐる。鹽釜の風景が描かれてゐることが殊に喜ばれたものか。

九、舟いこん

寛文三年六月の「なすの舟いこん」によるものと思はれるが、正本未見。

- 一〇、小栗判官二度の對面 (六段)
寛文六年九月刊「小栗判官」を殆ど其儘用ひたものである。單に「小栗判官」といふものもある。
- 一一、むらさきの合戦 (六段)
寛文五年頃の刊「八幡太郎誕生記」又はその後版たる「四天王紫野合戦」をかりたもの。
- 一二、後推天 (六段)
元來「熊野本地」及び「五翠殿」の二つの系統をもつてゐるが、要するに萬治元年刊「熊野權現記」を原形とするもの、改作である。
- 一三、頼光山入 (六段)
原形に「酒天童子」と題するものと、單に「頼光山入」といふものとあるが、共に之と大差なきものである。
- 一四、大峰の本地 (六段)
貞享二年二月の鱗形屋刊、舊東京帝大圖書館藏と同物と思はれる。
- 一五、羽州湯殿山大權現御本地記 (六段)

別に『大日如來傳記』と外題するものがあるが、それとは餘り關係なく、東京帝大藏本『金持大日御傳記』と稱するものと同一曲である。

一六、熊谷先陣問答 (六段)

東京帝大藏本、天滿八太夫正本で、内題を「熊谷先陣問答」と記し、外題を「熊谷先陣評」とせるものと殆ど同文
一七、爲致忠臣記 (六段)

これは現に鈴木幸龍の得意曲にて、「公平法問評」又は「忠臣身替物語」の改作である。

一八、住田川梅若丸の御事 (六段)

享保頃の江戸鱗形屋刊「隅田川」と殆ど同文である。

一九、鰐山兵部一代記

妻女横領型の公平物風の曲である。

二〇、西之宮由來記

之は浦島が龍宮から歸つて、西の宮惠比壽大神となる物語。

二一、武綱最期 (六段)

之は寛文期の『源氏筑紫合戦』と同一と思はれる。

二二、子四天王指物揃 (六段)

之は公平物の一種である。

○第二類 判官物及び關係曲

二三、丸山物語 (六段)

別に『丸山合戦』といふものもあり、同じく「丸山物語」といふ外題の異本もあるが、東京帝大藏「錦戸丸山合戦」を殆ど其儘とつたものである。

二四、鎌田最後

未見のものなれど、帝國圖書館藏、元祿三年正月刊の江戸版天滿八太夫正本「鎌田兵衛正清」と外題し、内題を「鎌田兵衛正清ふしみときは小幡物語」とするものと、大體同様にて、舞曲風に、鎌田の死を扱つたものと判定して誤なからう。

二五、ふしみときわ (六段)

天滿八太夫正本で、内題を單に「ふしみときは」として、前者と同内容のものが、東北大學圖書館にも京大國文研究室にもある。前者は前半の鎌田の死に重きをおき、普通の「ふしみときわ」は後半の常盤の伏見に於ける物語を主にしたものであるが、これは普通の曲とは文を異にし、巻尾に「鱗形屋孫兵衛」とある。

二六、熊井太郎孝行之卷 (六段)

所見寫本には「源平盛衰記」の題がついてゐたが、内容は全く「熊井太郎孝行之卷」である。

二七、尼公物語 (六段)

二八、八島合戦 (一段)

二九、八島 (一段)

以上三は、謡曲の「攝待」幸若舞曲「八島」を原據とするもので、殊に後の二つは南無右衛門の「八島」の改作であり、「八島合戦」及び「八島」は其中心をなす繼信の死の場だけ抜いたもので、語り續けられる中に異本となつたものと思はれる。

三〇、一の谷 (三段)

『源平盛衰記』を原據として、一の谷の源平合戦、殊に義經の鴨越攻を描いたものである。

三一、辨慶管絃サマシ (六段)

景清に捕へられた辨慶が酒を要求して、元氣を出して、縛を切つて逃亡する滑稽曲である。

三二、常盤御前鞍馬破 (一段)

異本が數種あるが、常盤が鞍馬の掟を破つて登山、牛若を託する物語。

三三、鞍馬破 (異本) (三段)

之は新に「お國淨瑠璃集」に收めらる。

三四、烏帽子折 (三段)

舞曲「烏帽子折」を原據とする判官物である。

三五、牛王姫問定 (六段)

可なり妙な外題であるが、或は「牛王姫問答」とでもいつたのかも知れぬ。例の慶長頃に語られたといふ「牛王

姫」の改作たる、延寶七年五月の刊「牛若千人切」を再改作したものである。

三六、牛若東下り (三段)

三七、伊勢三郎義盛見參

以上の二曲は「十二段草子」の改作で、後者は土佐節「源氏十二段」中の伊勢三郎が義經に始めて見參の場。

三八、勸進帳 (一段)

これは謡曲「安宅」に原據を有するもので、その改作である。

三九、源氏十二段 (六段)

これは土佐少掾正本「源氏十二段」と同物で、中の三四段目に「十二段草子」の縮圖が詰込んであり、肥前掾の正本「源氏十二段」と對するものである。

四〇、那須與市扇的 (二段)

八島の戦に於ける與市の弓の技巧を描く一節。

四一、義經勳功記

未見なれど、仙臺叢書のお國淨瑠璃研究中の、部分的所載によれば、吉野山に於ける靜と義經の別れを描いたものである。「義經千本櫻」との関係が明かにせぬ。

四二、堀河夜討

未見にて、舞曲「堀河夜討」又は「御所櫻堀河夜討」と関係がありさうだが、明かにせぬ。

四三、瀬田合戦 (八段)

瀬田にて義経が平家を討つて、平家は石山へ退く物語だが、その間に於ける佐藤繼信忠信の功名話が山である。

四四、直垂あくち (一段)

常盤が牛若に與へる直垂の物語。

○第三類 奥淨瑠璃の地方的特曲

四五、寛文物語 (八段)

四六、伊達盛衰記 (四段迄あり、前者と同文)

四七、宗勝逆心 (上下二卷)

四八、兵部物語 (十五段)

以上は皆伊達騒動記にて、『寛文物語』、『伊達盛衰記』の如く、大體同文のものもあり、要するに同一内容を取扱へるもの。

四九、奥州一の宮本地——鹽釜御本地 (十二段)

『鹽釜御本地』と稱するものと、『一の宮本地』と稱するものとあれど、同一内容である。

五〇、田村三代記(第一種) (六段)

仙臺叢書第十二巻に收む。

五一、三代田村 (九段)

南部叢書第九所收。前二者は同内容にて、三代目田村の高丸征伐記である。

五二、二代田村 (八段)

南部叢書第九冊所收。年光年仁二代に亘る田村の武勇物語で、次と大同。

五三、田村三代記(第二種) (五段)

『お國淨瑠璃』所載。年春年光年仁等三代の田村武勇物語。

五四、田村三代記(第三種) (八段)

新に『お國淨瑠璃集』に所收。他の田村三代記と大同小異。

五五、お山本地一代記

これは三代田村の後日物語で、利仁が岩手山の権現となる武勇物。

五六、奥州籠獄本地 (六段)

田村丸の悪呂王征伐物語で、田村三代記の後日物である。

五七、大日如來傳記 (六段)

武藏本郷笈分如來と、それと一體なる宮城縣國分福岡村の笈分如來の縁起で、『湯殿山大権現御本地』とは全く別物である。

五八、小佐治物語 (六段)

戀人の飲んだ茶の殘滴をのんで懐胎し、生れた子は戀人に抱かれて扇がれると、姿が消えたといふ傳説に基づく

物語で、唯物觀的戀愛を挿擧して痛快極りなきものである。

五九、檀毘尼長者本地 (五段)

長者が申子をして姫を得、長者號を得て、夢の如く死んだといふ大日堂縁起による物語。

六〇、迫合戦 (六段)

寛文以後に有ふれた、妻女横領物語を地方色豊かに創れるもの。

六一、御所の的 (六段)

これも此地方特有の曲として作られたものではないかと思はれるが、繼信忠信の遺子二人が泰衡を討つて義經の爲に恨を晴らすのである。殊に此曲が慶應元年まで毎年正月城中で演奏されたといふ點でも、地方的特殊性が認められる。

六二、餅合戦 (一段)

現に鈴木幸龍が時々語る餅づくしの滑稽曲。

○第四類 近松物其他

六三、天神記 (六段)

近松の『天神記』の改作である。

六四、子持山姥

これは未見であるが、近松の『姫山姥』の改作だらう。

六五、佐々木大鑑 (八段)

義太夫正本と同外題なれど、文章も筋も異なる。

六六、金平佛法論

これは未見ながら、寛文期の流行曲であり、公平が僧と大宗論を戦はす『公平法問諍』ではないかと思はれる。

六七、奥州前九年記

これは地方的に見て、義家の貞任宗任退治戦かと思はれるが、未見の事とて、寶曆七年豊竹座上演の『前九年奥州合戦』との關係は不明である。

六八、佐代の中山靈驗記

これも未見の事とて、治太夫正本『小夜之中山』や、江戸の別曲『佐夜中山』及び、明和三年竹本座上演の『小夜中山鐘由來』との關係不明である。

六九、新羅十二代記

「新羅三郎が事」と、仙臺叢書にあるのみで、内容は分らぬ。未見。

七〇、友春忠、心記

和泉の臣立花彈正氏村の臣しろ田友春の姉が、將軍頼義を獄より脱せしむる物語といふ。未見。

七一、唐紙忠、心記

「維盛の子六代御前の乳母唐紙の忠義にて、文覺上人の六代の命乞の事」と仙臺叢書に記す。未見。

七二、唐糸満壽孝行卷

「義仲の臣手塚太郎の娘唐糸の事」といふが未見。

七三、宇治川

「契情我立袖」に縁がある義仲の没落記で、原據は勿論「源平盛衰記」である。

七四、今川二度の注進記

赤井澤龍一の演奏曲中に見られるが、未見。思ふに寛文期の「今川物語」の改作か。

この外、奥浄瑠璃の一派喜右衛門節では、「太閤記」が語られ、「義經記」中の高館の戦等も明かに語られたやうである。

以上七十餘種は、所見寫本の外、確實に存在したことを傳へられたものであり、小倉博氏の蒐集された寫本四十四種と、齋藤博物館所蔵十七種の外に、仙臺叢書中に其存在を傳へられる未見本其他赤井澤龍一、鈴木幸龍等の語物をも含んでゐるのである。けれども實際なほこの外にも残存してゐるものも相當あるべく、既に廢滅に歸したのも少からずあつたこと、思はれるが、之等残存するものは、割合廣く行はれてゐたものと思はれ、所謂奥浄瑠璃乃ち仙臺浄瑠璃の概觀を知るに足るものであらう。然らば之等残存寫本乃至残存曲目を通じて、吾等の知り得ることは如何なることであらうか。

第一 古浄瑠璃との關係

一、正本 第一類の表によつても明かである如く、奥浄瑠璃には萬治寛文以後享保期に至る古浄瑠璃の曲目が、可

成りに多く使用されてゐるのである。そしてそれが古浄瑠璃そのままではなくて、改題されてゐることもあれば、其詞章が奥羽方言的に轉訛してゐることもあり、又は其構想が後半に於て奥浄瑠璃化してゐることも屢々あり、若しくは單に道行などを加へて、改作を試みたものもあり、「頼光跡目論」や、「百合若むくり退治」や、「竹生島の本地」や、「熊井太郎孝行の卷」の如き上方曲もあれば、「紫野合戦」や、「公平甲論」や、「大峰の本地」や、「熊谷先陣問答」や、「湯殿山大権現御本地」や、「源氏十二段」や、「丸山物語」等の如く、江戸曲もあつて、一方に偏することなく取入られてゐるのである。恐らく「公平法問評」の改題であらうと思はれる「公平佛法論」の如きも江戸曲であり、「爲致忠臣記」といふのは「公平法問評」若しくは「忠身身替物語」又は「金平忠臣身替」の改作である。思ふに之等の事實は、奥羽地方に對しても、江戸正本が年々多量に輸入されたことを證するものであつて、かの柳亭種彦が「用捨箱」に於て、

「江戸傳馬町の繪草紙屋永壽堂西村屋與八奥八に阿彌陀の胸割、きりかれ曾我、熊谷の類の古浄瑠璃六十種元祿寶永の頃再刻したる摺板傳はりてあり、近く文化年中まで春毎に製本して奥州へのみくだせり。故に永壽堂にては仙臺浄瑠璃となへ、又

正本といふ。奥州にては今(天保十二年)も是等の浄瑠璃をかたる者あり。彼地へのみ賣りくだすは此故なり」

といつてゐるのは、蓋し實際であつたと思はれる。而も之等の正本が今日残つて居ないといふのは、第一に、其正本が後代になるにつれて、極めて粗悪な紙が用ひられたこと、第二に、奥浄瑠璃の語り手は萬延文久の頃まで、盲人に限られてゐたので、江戸若しくは上方から輸入された正本も、盲人には何の用もなく、之を讀むのは矢張晴眼の婦女子であつたので、讀んでしまつたあとは、之を粗末にして失つたものが多かるべく、又奥浄瑠璃化された正本が別に

刊行された筈もなく、輸入されたとしても、元々普通の江戸本乃至上方本であつた筈であるから、之等が奥淨瑠璃の原本であつたことが、一々正本に特に書入でもしてない限り、奥羽地方に残存してゐたものであることを證することは出来ず、よし輸入正本が残つてゐたとしても、凡ては今日文化の中心地に再び流れ返つて、他の正本と混同された筈である。現に貞享二年二月刊の江戸鱗形屋版「大峰の本地」は、舊東大圖書館本が大震災で失はれて以來姿を見ないが、それと同物と思はれ、初行の同一である寫本が、奥淨瑠璃中に見出されるのである。又「伏見常盤」や「丸山物語」等も同様である。之等はその正本が奥羽地方にも入つて、語り物に用ひられたことを證するものである。

一、寫本 奥羽地方に、江戸や上方から輸入された正本の残存を見ないのは、以上の如き理由によると見て誤なかるべく、盲人の語り手が口から耳へ傳へたものは、いつか詞章も構想も段數も自由に變化されて行つたのであつて、それが好事家によつて寫本とされ、今日残存してゐるものと思はれる。これ等の寫本にて、段數の點で面白いのは、構想が變化され、内容が増加されただけ、段數が殖えてゐたり、又段數が徒らに増加されたり、中には二段が一緒に記されてゐたりすることである。蓋し後代の作かと思はれるほど、段數が徒らに増加され、段分が明瞭にされてゐなかつたり、一段が一緒に記されてゐたりするのは、盲人の語り手の記憶に従つて、自由にされたものであることを證明し、切り方も極めて自由であることは、初め「十二段草子」が、語り手によつて勝手に切られて、記憶の儘にまかされてゐたことを、繼承するものとも見ることが出来るのである。(中には後代の段數の増加にまねたものもあること勿論であらうが)。

三、語物と年代 残存寫本だけ見たのでは、古淨瑠璃中、公平物が多いやうに思はれるが、必ずしも公平物のみが

特に取入れられたと見ることは出来ず、むしろ有名な語物は、皆奥淨瑠璃として自在に取入れられたといつてよいのである。従つて今日奥淨瑠璃に残存してゐる曲目を標準として、古淨瑠璃が奥淨瑠璃として生活し始めたのが、何時のことであるかは、明かに之を知る由もないのであるが、「奥羽永慶軍記」の「和田安房守智謀の事」の條に、

「其比(天正)白河に座頭有テ尼君物語ノ淨瑠璃ヲ語ル、奥州ノ佐藤兄弟共ニ君ノ命ニ代テ死スト云フ事ヲ聞ク、和田落涙スル限ナシ」

とあれば、奥羽地方に、既に慶長以前「尼公物語」などが語られたことを推定し得べく、其後の語物として残つてゐるものは、寛文以後刊行のもののみであるから、奥淨瑠璃の流行が盛になつたのは、やはり江戸本の刊行が盛になつた元祿以後、殊に西村永壽堂が江戸正本の再版物を、奥羽地方に送り出した以後のことであつたかと察せられるのである。

四、十二段と影響 それにしても奥淨瑠璃中に、流布本「十二段草子」が見出されないで、その改作たる「牛若東下り」や、「源氏十二段」の如きもののみが見出されるのは、何故であらうか。若し初期の淨瑠璃が、仙臺地方に於ても語られてゐたとしたら、「十二段草子」の流布長篇が矢張何等かの形で残つてゐさうに思はれるに、それが改作の形に於てのみ残つてゐるとすると、奥淨瑠璃が慶長以前何時頃までも溯れるものかは可なり不明なことともいへるのである。かくて、

奥淨瑠璃緒絶えの橋や古扇

調和(寛文年間「俳枕」)

の句には意味深長なものがあるやうに思はれる。けれどもどうしても忘れてならない一事は、流布本「十二段草子」

は奥淨瑠璃として語られ、若しくは流行したか否かを明かにせぬが、『十二段草子』の構想乃至詞章的影響は、奥淨瑠璃の上に甚だ明瞭に現れ、又一種の特徴と見るべきほど、それが力強く影響してゐることである。即ちそれは『牛若東下り』や、『源氏十二段』の一部たる『伊勢三郎見参』や、『迫合戦』や、『御所の的』などに於て、屋形の構造、庭園の模様、襖に描かれた四節の模様等に於て、最も著しく現れ、同工異曲などといふよりも、『十二段草子』やお伽草子の詞章構想を全く模倣するとか、其儘流用するといふことが甚だ屢々行はれてゐるのである。

五、語り方の様式 之等庭園や四節の模様等の、操芝居の表現に相應しくない、單なる物語的詞章構想が盛に用ひられてゐるといふことは、奥淨瑠璃が操芝居としての存在でなくて、單なる語物としての存在に過ぎなかつたことを證明するやうに思はれるが、他面に於てそれが又奥淨瑠璃の語り方の起源様式等を暴露するものであるやうに思ふ。そして又それが、必ずしも景事などを殆ど喜ばなかつた江戸淨瑠璃の系統をのみ追ふものとも限らず、むしろその點に於て、上方淨瑠璃の系統に近いものであることをも語るものであるやうである。

第二 判官物との關係

今日なほ『十二段草子』が淨瑠璃の最初の語物であつたかと思はれる點からといふよりも、其主人公義経が奥羽地方と密接な歴史的關係をもち、自然この地方一般の崇拜と同情的であつたといふ點から、奥淨瑠璃が判官乃至判官と直接間接に關係がある人物に關聯する數多の曲を上演し來つたのは、極めて自然の勢といはねばならぬ。

そしてこの種のものの中で、古淨瑠璃として知られてゐるものは、『尼公物語』や、『八島』『源氏十二段』の如く、其儘にて利用することも行はれたのであるが、『牛玉姫問定』の如く、原曲を其儘借りたゞけで満足せずして、

其結末に於て、清盛が牛玉の亡魂に惱まされ、音羽に社を建て、祭るといふやうに、構想上の改作が行はれてゐるものもあるのである。その他舞曲や義経記源平盛衰記平家物語等の軍記物などから、題材詞章を借りて語り出されたものや、お伽草子などの構想詞章をかりて作文され、操芝居の上演物といふよりも、單に語物としてのみ傳へられたと思はれるものが、相當澤山あるやうである。就中『辨慶管絃サマシ』の一篇の如きは、可なりに滑稽味の豊かなものとして尊重すべきである。いなそれよりも一層注意すべきは、之等判官關係の語物の中には、古淨瑠璃中に其題名すら見ざるものもあつて、其成立の年代についても、從つて其作者に關しても、研究を要するものも少くないことである。

第三 奥淨瑠璃特有の曲

一、濃厚な地方色 古淨瑠璃中にて、『頼光跡目論』に於ける鹽釜の段の如く、地方的色彩を含んでゐるものを利用するとか、『羽州湯殿山大権現御本地』とか『丸山物語』の如き、特殊の地方的色彩の豊かなものを傳へるとかすることは、地方藝術の傳來上極めて當然のことであるが、特に奥淨瑠璃には、地方色の濃厚な縁起や、本地物語や、歴史を取扱つた、地方特有の曲の少くないことは、頗る注目すべき事で、これは一面には、一體で奥淨瑠璃と稱するものが、如何に奥羽地方に流行したかを物語ると同時に、他の一般的淨瑠璃に對して、地方的色彩あるものが相當力強く迎へられた事を示して餘あると思ふ。素よりこれには、伊達南部等の豪族の政治的勢力乃至政策の影響も與つて力があつたかと思はれるが、一つには同情すべき判官等の經歷傳説とか、田村丸關係の武勇傳説とか、阿部貞任宗任等の源氏との關係とか、伊達一家の大騒動の如き、好個の題材が多分にそなはり、中央からは可成りに僻遠の未開地で

あるが如く思はれながら、中央の文化を取入れつゝ、他面に於て模倣的ながらも、相當の藝術を生み出すだけの底力と文化とが、此地方に備はつてゐたことにもよるものと思はれる。

二、古浄瑠璃の傳統 けれども、一體に奥浄瑠璃が盲人の專業とされ、藩の掟として、盲人以外のものが職業的に之を語ることを禁じてゐたが爲に、又それが地方的産物なるが爲に、讀物としての刊行を見るに至らなかつた等の理由から、之等の地方的特色を有する曲目製作の年代を明かにすることの出来ぬのは惜しむべきことである。素よりその製作が、元祿以前乃至義太夫節流行前何時まで溯るかは不明であるが、必ずしも凡ての地方的特色ある奥浄瑠璃の曲目が、義太夫節が非常に流行し出したの後に、成つたものとも見られぬかも知れないのである。何となれば、それ等が後代の義太夫節曲の影響を受けたと思はれるよりも、其構想、題材、脚色、詞章、形式等の有ゆる點に於て、古浄瑠璃の傳統風格を其儘繼承して出来てゐるからである。この意味に於て、奥浄瑠璃は新浄瑠璃に屬するといふよりも、むしろ古浄瑠璃の範疇に入るべきものであり、義太夫節新浄瑠璃の壓迫に潰滅せずして、今日なほその面影を残存してゐることこそ、むしろ奇蹟といふべきである。

第四 近松物との關係

一、義太夫節との關係 近松物が奥浄瑠璃に取入れられたことは、『天神記』『忠臣身替物語』等の外に二三の例を數へ得ることでも否定することは出来ないが、それ等の殘存曲のあまりに少いのは面白いことである。成程奥浄瑠璃の語り手が江戸時代の終、萬延文久頃まで盲人に限られてゐたとすると、その盲人には寫本も正本の要もなく、専ら暗誦で足りたのであるから、奥浄瑠璃に近松物や義太夫節曲の丸本が見られぬといふのは、何の不思議もないことで

あるが、實際問題として最近までの語り手の曲目中に、近松物以外の義太夫節物は殆ど其名を見ることがないのである。これは抑何故であらうか。これは例へば、安永六年四月大阪嵐座で、奈河龜助作の伊達騒動物「伽羅先代萩」が上演され、ついでその改作が安永七年七月、江戸中村座で「伊達競阿國戯場」として上演され、それについて翌年同名の操が上演され、更に天明五年正月には、江戸結城座で、「伽羅先代萩」が操として上演されたりしても、仙臺には、その後此作が入り込みもしないで、依然として、奥浄瑠璃の伊達騒動物たる「寛文物語」や、「伊達盛衰記」や「兵部物語」で事足り、それが上方や江戸の流行をあくまで驅逐し盡したといふことであらうか。換言すれば、義太夫節浄瑠璃芝居は、全く仙臺とは縁がなく終つたといふことであらうか。實際にまたさうであつたのであらうかといふと、そんなことは私には信ぜられないことである。仙臺にも亦「伽羅先代萩」の操芝居も歌舞伎芝居も立派に侵入して、奥州人を驚かしもし喜ばせもし泣かせましたことであらうと信ずる。それは「舊仙臺藩治要」中に見られる次の記述によつて明かであると思ふ。

一、花火、操、歌舞伎之類、堅御停止之事

附 操 歌舞伎之眞似を仕總て百姓に不似合儀仕間敷候事

この掟の年代を明かにすることの出来ぬのは残念だが、更に寶曆八年六月五日の日附があつて、其次に農民取締に關して、

一、農民ニハ別ニ條目ナルモノアリ、毎年郡横目巡廻シテ之ヲ讀ミ、其法ヲ守ラシム

といふ記述の存することは、少くも江戸時代の中期に於て、仙臺に於ても、操や歌舞伎が相當に行はれ、餘りにそれ

が流行することを恐れ、江戸に於ける妖艶な豊後節の流行の如きは、當然奥州をも風靡せざれば已まざるべきことを恐れたが爲であらう。而も『先代萩』の如き流行名曲が、其題材の火元たる東北の大都會仙臺に、其姿を見せなかつたと見ることは無理なことと思ふ。然らば奥浄瑠璃も亦それらの義太夫節浄瑠璃の影響を受けた筈であるのに、實際それらしい形跡が、語り方の曲節や語り方や、その語物の上に見られないのは、何故であらうかといふと、それは奥浄瑠璃の語り手であり、保守主義生活の権化とも見るべき盲人等が、其語り方や曲節に於て、義太夫節の曲節や語り方を取り入れることなく、しよんぼりとして、依然として舊態を保持することにつとめた爲と、又それを取り入れるべく奥浄瑠璃と義太夫節との間には、曲節や語り方に於て、餘りに大きな差異があり、従つてそれが容易に取入れられなかつたこと、藩の掟は盲人の語り手を、陰に保護してゐたが爲に、盲人等が義太夫節を取入れて、語り方の上に改革を行ふ必要もなく、それを行ふことはむしろ彼等の自殺でもあり、奥浄瑠璃そのものを滅すことでもあり、又一般民衆の義太夫節などに耽ることを藩則が禁止してゐたりした爲であつたらうと思はれる。それが爲に奥浄瑠璃の語り方や曲節は、相當舊態のまゝで、今日までも持續され、而も殆ど進歩することなくして、遂に現存の語り手鈴木幸龍氏を最後として、愈々滅亡の運命に瀕してゐるのであらうと察せられる。つまり奥浄瑠璃の根本の語り口、曲節即ち曲風といふものが、義太夫節と調和することが出来ず、もつと、早く滅びてゆくべき筈の古風のものであつたに係らず、盲人の語り手が或程度の保護を加へられ、近頃迄晴眼者の侵害を受くことがなかつたので、幸に今日まで其命を保つてゐたものと見るべきであらう。

一、衰因と曲風 といつて、序に奥浄瑠璃の衰因と見るべきものには、この外に、一、語物に進歩がなく、終始一貫

して非戯曲的物語から成り、而も武張つたものゝみ多くして、文學的價値の多いものが少く、同時に戯曲的價値の豊かなものが現れなかつたこと、二、語るものが殆ど盲人のみにして、其門弟以外に之を愛玩するものが少かつたこと、三、時勢の變遷一般趣味の變化等をあぐべきであらうが、其最も主要なる原因と見るべきは、單調なる曲風であつたことは争ふことが出来ないであらう。

それでは奥浄瑠璃の語り方曲風は如何なるもので、如何なる歴史傳統をもつてゐたかといふと、傳へられるが如く、初期浄瑠璃の語り方から多くを出づることなく、曲節をつけて吟唱する傾向の部分が少く、所謂戯曲的ならざる物語文を、殆ど抑揚もなければ曲節も乏しい、單調な早口で朗讀し、甚だ稀にゆるぎ曲節をつけるといふ程度であり、義太夫節が、戯曲性に富んだ詞章に、謡曲の謡ひ方を應用して、地の文と對話の文とに、曲節を交錯せしめ、更に數多の曲節を取入れて、出来るだけ單調をやぶり變化をつくる一面に、曲節のある部分と、對話の部分とに應じて、三味線の伴奏を適宜に按配して、音楽味を豊かにして、日本獨特の一大音楽を創り出したのと異り、奥浄瑠璃に於ては三味線の伴奏に於ても、詞章の吟誦と殆ど關係なく、時々合の手風に、單調なる手を唯滅茶苦茶に繰返すに過ぎず、餘りにも保守的であり原始的であつたのである。此點に於ては、最近まで佐渡に行はれてゐた文彌節の演奏と大體に於て、似たものがあり、佐渡文彌節の人形が、如何にも單調な動作を繰返す一人遣であつたことから考へて、奥浄瑠璃に、よし操人形が伴つてゐたとしても、如何にも單調な、藝術味の乏しいものであつたらうし、寛文頃までも扇拍子で語つたといはれ、三味線の取入れられたのは明和以後安永天明頃からであるといはれる位であるから、恐らく人形の伴はない單なる素浄瑠璃で終始したのであらうと察せられるのである。かゝる原始的とでもいふべき素朴單調な語

物が何時までも永續する筈なく、盲人の専業であつたからこそ、却つて今日までも傳はつたのだといつてよからう。

(昭和十四年七月二十七日)

三 お國淨瑠璃の文化史的意義

百姓に眞似を禁止 既に説いた如く、舊仙臺藩にて、農民には別に條目があるとして、操歌舞伎の眞似をすることを禁じたのは事實であるが、之は操や淨瑠璃が如何に文化史的に高價な意義をもつてゐるかを全く解しなかつた爲ではなくして、その百姓に及ぼす効果は理解してゐながらも、百姓が進んで自ら之に關はり、之に溺れて、自分の本分を忘れることなからんことを戒めた禁令であつたのである。事實上うっかりすると、飛んでもない結果に陥りような傾向が見えたので、それを禁じ、それを戒めたのであらうことは、さうした禁令が發せられたといふ事實が之を裏書してゐると思はれるのである。實際仙臺藩の政治家達は、享保以後江戸に於ける豊後節淨瑠璃や歌舞伎の生み出した類廢的傾向が、之に關はり之に溺れるものにとつて、如何に有害であり恐るべきかを面のあたり目撃してゐたから、此種の法令を發布したのもと思はれるのである。單に之を觀覽し、之を鑑賞するだけであるならば、それが或意味に於ては道義的にも文化的にも相當な意義と効果をもつてゐることを、決して知らなかつた筈はないのである。だから法令の中には「眞似を仕、總て百姓に不似儀仕間敷」と斷はつてあるのである。蓋し公平淨瑠璃等の武勇物によつて民衆の武勇心を養ひ、忠孝精神を培ふことが立派なことであり、それ等が立派な教化的効果をあげるものである事

は、勿論、「田村三代記」などが如何に剛健勇武の精神を養ふに足り、傳説物本地物等が如何に宗教心愛郷心を堅固にする上に役立つたかは、何人にも容易に知ることが出來た筈であるからである。而も百姓に對して、操歌舞伎の眞似を禁じたのは、百姓その者をして、あくまで健實な眞摯な生活を持続せしめ、そこに治藩の基礎をおき、強固なる國政の維持を圖らうとしたものであることが窺はれるのである。

地方的特異曲の創成 由來仙臺南部津輕等の東北地方には、古來久しく豪族が割據して其勢力をふるひ、中央に對しては正に一敵國の觀を有し、獨特の文化を持続し、獨特の氣風と習俗と



慶安版「むねわり」

社會的政治的情勢に立つてゐたのである。されば之等の地方に於ける政治家や武人は勿論、一般町人農民も亦、江戸や上方とは一種異つた文化を享樂し、獨特な社會的政治的情勢の下に立つことを誇とし喜としてゐたのである。其文化と氣風と意氣と矜持とは、徒らに江戸や上方の文化を其儘取入れることを潔しとしなかつたものゝ如く、従つて江戸や上方に流行した古淨瑠璃を取入れ、公平淨瑠璃や判官物などを輸入するにしても、之等を東北化し、地方化して上演することが行はれ、他面に於てまた仙臺南部地方獨特の傳説や歴史や縁起などを資料として、自ら之等の地方獨特の淨瑠璃を創作する傾向があつたのである。この傾向と矜持と風習とが、此地方をして初期淨瑠璃の詞章を取入れるのみでなく、初期淨瑠璃の語り方や曲風までも大體古風に維持せしめることゝなつたものと思はれるのである。勿論それには交通が不便であつたことや、従つて文化の移動が割合に緩慢であつたことや、お國

節を盲人の専業たらしめて、彼等の生活を保證したといふやうなことが、與つて力あり、さうした結果を導いたものではあらうが、一方には鎖國的政策や、農民に對する健實なる政治等が加勢しつゝ、獨特の文化と氣風とがよく此處に到らしめたものであらうと思ふ。而もよく之を達成せしめるに足るべき地方的傳説や縁起が頗る豊かに存在し、田村丸一族や、佐藤一族や、安部一族の如き豪族が、常に東北五十四郡に割據して、中央政治の圏外に立ちて威を輝かし、武勇と悲壯なる運命に充ちた判官關係の物語を始めとし、古くは鬼神退治などは屢々行はれたりして、如何にも古淨瑠璃の題材が豊富であつたからでもあるのである。之が社會的文化史的に如何に大きな貢獻をなしたかを考へる時に、お國淨瑠璃の存在と發達とが、如何に意義深いものであつたかを思はずにはゐられないのである。

現存曲節の意義 而もあの相當に原始的曲節を以て語られるお國淨瑠璃が盲人保護の手段によつて今日までも維持され、あの貴重すべき曲節を今日ラチオならずとも、蓄音機ならずとも、現實に鈴木幸龍老人の唇から聞くことが出来るといふことは、音樂史上、文化史上頗る興味あることといはねばならぬ。之によつて幾分でも初期の淨瑠璃に近いものを髣髴することが出来るやうに思はれるからである。あの單調にして變化に乏しく、曲節に殆ど見るべきもなく、伴奏の三味線の弾き方が、また琵琶と相似たる如く使用されるに過ぎず、長時間の鑑賞に對しては、頗る倦怠を感じしむるのみなるに係らず、數百年の間大衆の娛樂として、よく其勢力を持続し得たことを思ふ時に、此地方に於ける社會的政治的乃至文化的情勢の、上方や江戸とは如何に異なるものがあつたかを思はずにはゐられないのである。それにつけても今回小倉博氏の編によつて『御國淨瑠璃集』が公にされ、特色ある十九篇がそれに收められてゐることは頗る喜ぶべき事であると思ふ。何となれば、大體に古淨瑠璃其儘の遺物であるが如き感ある奥淨瑠璃でありな

がら、一面に之を改作して奥羽地方化し、若しくは奥羽地方獨特の傳説縁起歴史等を材料として、奥羽地方獨特の淨瑠璃が相當澤山に創作して語られ、その殘存せるものが此集に集められ、それによつて、此地方民衆に對して、江戸時代の此地方の爲政治家が如何なる指導原理の下に、民衆に對して娛樂と慰藉を與へようとしたかも知れぬながら親はれ、さらに東北地方獨特の創作的對内的自尊主義的文化の姿が髣髴され得るからである。

四 仙臺淨瑠璃概説

○竹生島の本地（辨才天之由來）

【體裁】 寫本にて小倉博氏藏。寫本は登米郡寶江村にて嘉永五年寫。上記外題の如くあつたり、『竹生島辨才天御本地』ともある。『竹生島辨才天由來記』、『竹生島由來』とも稱せられ、異本が多い。

【刊年】 刊年など全く不明だが、筆寫原本に天保四年六月書とある。

【形式】 七段にて各段首尾に形式句がある。

初段「扱も其後近江國竹生島辨才天の由來をくわ敷尋奉るに、つくし肥前國松浦の里といふ所に、長者一人おはします、然るに、此長者……かくれなく長者なれば諸事につけて不足なく、わく實數を知らず持れける、先一番の實には……金のわく山九つ持……」

【梗概】 初段 竹生島辨才天の由來を尋ねると、筑紫肥前國松浦の里に、松浦の長者とて、數の寶をもつた人があつた。金の涌く山九つ、銀の涌く山十三、七八十歳の老人も松風に吹かれると若くなる松、ふるれば病の除けられる邯鄲の夢枕五つ、泉の涌くつぼ七つ、麝香の犬五匹、惡魔を防ぐ飛劍三振をもつてゐた。けれども子がなくて、長谷の觀音に祈る。一七日、二七日、五七日籠ると、八十計りの翁が現れ、長者の前世は信濃國に住居した山立獵師にて、

鳥類畜類を殺し、嘗て山鳥が子を育てゝゐるを見て火をかけて殺した、その怨靈が報ひて子種がない。女房は近江勢田橋に住つた大蛇で、常に鳥類畜類をとつて子供の餌とした。その因果で夫婦に子がないといふ。夫婦はなほも色々のことを誓つて願をかける。（そのかけ方は全く十二段草子の申子の段そつくりである。）と觀音は夫婦の枕上に立つて、不愍だから子種を授けるといふ。御臺は懐胎する。生れたのは花の様なる姫であつた。

二段目 「借も其後此姫君の御成人物に能々例ふるに宵にはへたる竹の子が、夜中の露にはごくまれ尺を延ぶるが如く也」……いつか五歳になる。或時姫を慰むべく一家一門集つて皆花園へ出る、酒宴を催した長者は、姫が四歳になる、父か母か一人死ぬと佛勅があつたが、何事もない、觀音も偽をいふといつて笑ふ。之を知ると觀音は、浮世の仇であるとして、疫神の司祇園牛頭天王を頼み、疫神一千餘神を召寄せ、長者の館に亂入せしめる。長者は忽ち病む。様々の手段を盡すが効なく、それこれと遺言して四十四歳で死ぬ。ついで觀音の罪によつて、召仕の女房達若者達も皆死ぬ。數の寶も一夜の中に失せる。残るは只貧苦の御臺と姫とのみとなる。

その中に姫は十七（一本には十五）歳になる。長者の十三回忌になると、姫は父の菩提を弔はんことを願ふが、金がないので、身を賣つて其金を得ようとする。

三段目 「是は借置筑紫肥前國松浦の里の物語、委敷尋るに、其昔奥州伊澤郡上臈澤といふ所に、高山掃部長者連長者一人」ある。五十四郡の總大將にて榮花に暮し、召抱三百六十四人、慈悲の人だが女房は情を知らぬ強慾者で、邪慳極りない。遂に大蛇の苦患を受ける。

或時大雨あつて、四方七里がみぞろが池となり、佛神達が二十尋の大蛇となる。此大蛇が年々一人づゝの人身御供

を求め、之に従はぬと膽澤を一時に崩すといふ。

かくて此人身御供が今年は志津笠池の軍治兵衛吉實の女の番になつてゐる。一人の姫を失ふことの堪へがたき儘、

吉實は都の方にて代人を求めようと、所々に高札をたてる。奥州行ときいて、誰一人之に應ずるものがない時、老僧が一人現れて、西海筑紫肥前松浦の里の長者が観音の罪にて死んだ、あとに残つた娘を買へと告げ、我は汝が信ずる春日大明神だといふ。吉實は十日餘にて肥前の松浦に着く。佐用姫は吉實の觸を聞くと天の與へと喜んで、壹千兩にて身を賣り、十日の暇を貰つて、その間に父の菩提を弔ふ。母には金を拾つたといつてごま化す。

四段目 やがて姫は身を賣つたことを、母に物語り、殘金五百兩を渡し、立出でようとする、母は驚いて止めるが、今更仕方なく連れて行かれる姫にとりついて歎く。吉實は、姫を吾が子として、大名小名の御臺ともなし、やがて母を迎へに来るといつはり、悲しむ母子を引分けてゆく。

母は遂に狂亂の體となり、兩眼を泣きつぶす、(この邊説經風に



頗る悲しげに描かれてゐる。)

寛文元年 松浦長者

五段目 「其後姫君泪ながらに歩せ給へば通らせ給ふはどこぞ、かたの浦より船にのり……」(これが道行になつて)奈良から、都を経て東海道を下る。姫は疲れて堪へかたきを強ひて歩ませられ、鹽釜から船に乗り、松島につく。姫は松島でも、「松島やおしまで物をくれよかしふくろと聞て國の土産に」……など三首の歌をよむ。かくて八十五日にして下膽澤軍治兵衛吉實の館につく。(此間長い道行で、全曲が全く之に費されてゐる。)

六段目 姫を見ると、女房はその美しさに驚き、自分の娘とは比較にならぬ程の美女を、馬にも乗せずして下したことを悲しむと、吉實は却つて、途中にて大名からも奪はれんことの恐ろしさに、姿をやつさせて、わざと徒歩でつれて来たといひ、さま／＼にもてなす中に八月十四日になる。

明日は愈々高山みそろが池に、御供をそなへる日だとて、座敷をかざらせ、姫には二十一度の垢離をとらせる。姫は召使はれずして、大事にされる理由を怪しむ、女房は始めて事實を明かす。姫は歎きながらも、父の菩提の爲と思へば命は惜まぬが、母を思ふとたまらぬ。

いよ／＼當日になると、午刻にお供をする豫定の處、昨年は辰の刻だつたのに、今年は何故遅れるか、御供をせぬと、五十四郡一時にゆりくづすぞといふ聲が天地に轟く。

やがて三艘の舟を浮べ、一つには吉實の一門、一つには見物、一つには神主と姫をのせて島に至り、神樂を奏するが大蛇が出ぬ。やがて天が曇り雷電して、二十丈の大蛇が出る。十六本の角をふり立て、姫を一吞にせんとする。姫は泰然として來由を語り、法華經を読み、やがて大蛇の首に經を投げつけると、經の功力にて、十六本の角がはらりと落ち、蛇は水に入る。